串木野城跡

くしきのじょうあと

2000年3月

鹿児島県串木野市教育委員会

空からみた串木野城(北から)

空からみた串木野城(西から)

序　　文

串木野城跡の発掘調査は、文化庁・鹿児島県文化財課のご指導のもとに、保存活用を図ることを目的として実施した事業であります。平成９年度から平成11年度にかけて発掘調査を行い平成11年度に遺物整理及び報告書作成を行いました。発掘調査は、冬期に行われ、雪が舞ったり、霜が降りたりと悪条件下ではありましたが、多くの方々にご指導、ご協力をいただき順調に調査も進み無事終了することができました。

串木野城跡は、串木野三郎忠道が1215年～1220年頃築城したと言われています。串木野氏は、村岡平氏の支流である頴娃忠永の孫串木野三郎忠道に始まり、５代目串木野七郎忠秋まで120余年居城したと言われています。

その後、島津氏と川上氏・渋谷氏との抗争のなか、史料にあらわれます。

串木野城跡の本格的な調査は、平成９年度から平成11年度の３カ年で行われました。歴史のベールに包まれた南九州中世社会の実像をこの串木野城跡の調査成果から浮かび上がらせることができたらと考えます。

この報告書が、私たちの祖先が残してくれた貴重な遺産である串木野城を、次の世代を担う人々に残し伝える債務を果たすとともに、歴史・文化財に興味関心のある方はもちろん市民、県民の多くの方々に広く活用されることを願ってやみません。

最後に串木野城跡の調査・報告書作成に至る過程の中で、文化庁記念物課、鹿児島県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターなどの関係機関をはじめ、市民の皆様やご指導・ご助言いただいた多くの方々に対しまして心から感謝申し上げます。

平成12年３月　串木野市教育委員会

教育長　山　下　卓　朗

報告書抄録

ふりがな	くしきのじょうあと
書名	串木野城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	串木野市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	2
編著者名	濵田純一・堂込秀人
編集機関	鹿児島県串木野市教育委員会
所在地	〒896-8601　鹿児島県串木野市昭和通133-1　TEL 0996-33-5653
発行年月日	2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	ふりがな 市町村	ふりがな 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
串木野城跡（くしきのじょうあと）	鹿児島県串木野市上名城之元（かごしまけんくしきのしかみみょうしろのもと）	2055		31°42′	130°16′	平成9年度 12月2日 ～12月19日 平成10年度 10月19日 ～11月9日 平成11年度 11月22日 ～12月20日	平成9年度 108㎡ 平成10年度 190㎡ 平成11年度 350㎡	串木野城跡の保存・活用のための確認発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
串木野城跡	山城	中世 (14～16世紀)	曲輪・空堀・土塁・掘立柱建物跡3軒他柱穴跡多数・竪穴状遺構1基	青磁・白磁・染付他	歴史公園として整備予定

例　　言

1．本報告書は、串木野市が文化庁及び鹿児島県の補助を得て実施した鹿児島県串木野市上名城之元にある「串木野城跡」の埋蔵文化財確認調査報告書である。

2．調査主体者は串木野市教育委員会、発掘調査は県立埋蔵文化財センターの協力を得て串木野市教育委員会が行った。

3．本書に掲載する遺構・遺物の検出は、濵田・堂込が行った。
　遺物の実測物等は、染付の一部を㈱エーティックに委託し、その他については、県立蔵文化財センターにおいて、濵田・堂込が整理作業員とともに行った。
　なお写真撮影・現象にあたっては、県立埋蔵文化財センター鶴田静彦の指導を得て、同鷲尾史子の協力を得た。

4．本書のレベル数値は海抜絶対高である。

5．本書で用いた遺物番号は通し番号とし、挿図・図版の番号は一致する。

6．本書の執筆分担・編集は、下記のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅱ章 …… 濵田　純一
第Ⅲ章・第Ⅳ章 …… 堂込　秀人

7．本書の編集は、濵田純一・堂込秀人が担当した。

付章　串木野城の城域と構成 …… 上田　　耕

本　文　目　次

序　　文

報告抄録

遺跡位置図

例　　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1

第２節　調査の組織 …… 2

第３節　調査の経過 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 6

串木野市管内の遺跡一覧 …… 8

第Ⅲ章　遺跡の調査 …… 14

第１節　調査の概要 …… 14

第２節　各トレンチの調査 …… 15

第Ⅳ章　まとめ …… 45

付　章　串木野城の城域と構成　　上田　耕 …… 47

第１図　串木野城の縄張構成 …… 53

第２図　南九州の主な中世城郭 …… 56

挿 図 目 次

第１図　遺跡地図 …… 9
第２図　串木野城跡地形測量図 …… 10
第３図　串木野城跡トレンチ配置図及び曲輪番号等 …… 12
第４図　１トレンチ炉跡 …… 15
第５図　１トレンチ・６～８トレンチ遺構検出状況 …… 16
第６図　１トレンチ　出土青白磁(1) …… 18
第７図　１トレンチ　出土青白磁(2) …… 19
第８図　１トレンチ　出土白磁・陶器 …… 20
第９図　１トレンチ　出土染付(1) …… 22
第10図　１トレンチ　出土染付(2) …… 23
第11図　１トレンチ　出土陶器・その他(1) …… 24
第12図　１トレンチ　出土陶器・その他(2) …… 25
第13図　１トレンチ　出土陶器土師器 …… 26
第14図　２トレンチ　遺構検出図 …… 28
第15図　２トレンチ　掘立柱建物跡（１号） …… 29
第16図　２トレンチ　掘立柱建物跡（２号・３号） …… 30
第17図　２トレンチ　出土青磁・白磁 …… 31
第18図　２トレンチ　出土染付 …… 32
第19図　２トレンチ　出土陶器・その他 …… 33
第20図　２トレンチ　出土土師器 …… 34
第21図　３トレンチ　空堀跡・土層断面図 …… 36
第22図　５トレンチ　遺構検出状況及び土塁部分土層断面図 …… 37
第23図　５トレンチ　出土遺物 …… 38
第24図　９トレンチ　土層断面図 …… 39
第25図　12トレンチ・15トレンチ土層断面図 …… 40
第26図　13トレンチ　遺構配置図及び土層断面図 …… 41
第27図　13トレンチ　柱穴跡復元想定図 …… 42
第28図　13トレンチ・14トレンチ・15トレンチ　出土遺物 …… 43
第29図　14トレンチ　土層断面図 …… 44

図　版　目　次

巻　頭　空からみた串木野城跡（北から）
カラー　空からみた串木野城跡（西から）

図版１　串木野城跡写真航空写真 …… 58

図版２　表土剥ぎ状況・プレハブ設置状況・城跡北東方向（治山工事前） …… 59

図版３　伐開状況（１トレンチ予定地）・伐開状況（２トレンチ予定地） …… 60

図版４　作業用通路整備（１トレンチへ。曲輪２への登り口。向かい側が曲輪３） …… 61
曲輪１と曲輪３の間の空堀（９レンチ）・曲輪１（５トレンチ掘り下げ）

図版５　曲輪３から曲輪２を見る・曲輪１への作業用通路・曲輪１の下からの登り口 …… 62

図版６　平成９年度　１トレンチ作業風景・遺構検出状況・遺構検出状況 …… 63

図版７　１トレンチ・１トレンチ　土坑調査状況・１トレンチ　柱穴跡検出状況 …… 64

図版８　１トレンチ拡張部分　遺構検出状況（西から）・１トレンチ拡張部分　遺構検出状況（東から） 65

図版９　１トレンチ炉跡検出状況・掘り下げ状況 …… 66

図版10　１トレンチ遺物埋土状況　・炉跡検出状況 …… 67

図版11　６トレンチ遺物出土状況・６トレンチ遺構検出状況・発掘作業状況 …… 68

図版12　１トレンチ遺構検出状況・７トレンチ遺物出土状況・９トレンチ土層 …… 69

図版13　６トレンチ遺構検出状況・７トレンチ遺構検出状況 …… 70

図版14　２トレンチ遺構検出状況（東から）・２トレンチ遺構検出状況（西から）・２トレンチ白磁出土状況 71

図版15　２トレンチ拡張部分遺構検出状況（北西より）・２トレンチ拡張部分遺構検出状況（南東より） 72

図版16　３トレンチ土層・４トレンチ土層 …… 73

図版17　５トレンチ作業状況・５トレンチ遺物出土状況・５トレンチ拡張部分土塁断面 …… 74

図版18　10トレンチ土塁断面・10トレンチ遺構検出状況・10トレンチ埋めもどし …… 75

図版19　13トレンチ遺構検出状況・13トレンチ土層 …… 76

図版20　13トレンチ土層・13トレンチ遺構状況 …… 77

図版21　12トレンチ土層・14トレンチ土層・15トレンチ遺物検出状況 …… 78

図版22　鹿児島県文化財保護審議委員会委員、三木　靖先生・上村俊雄先生視察 …… 79
文化庁　坂井秀弥調査官視察・　埋めもどし状況

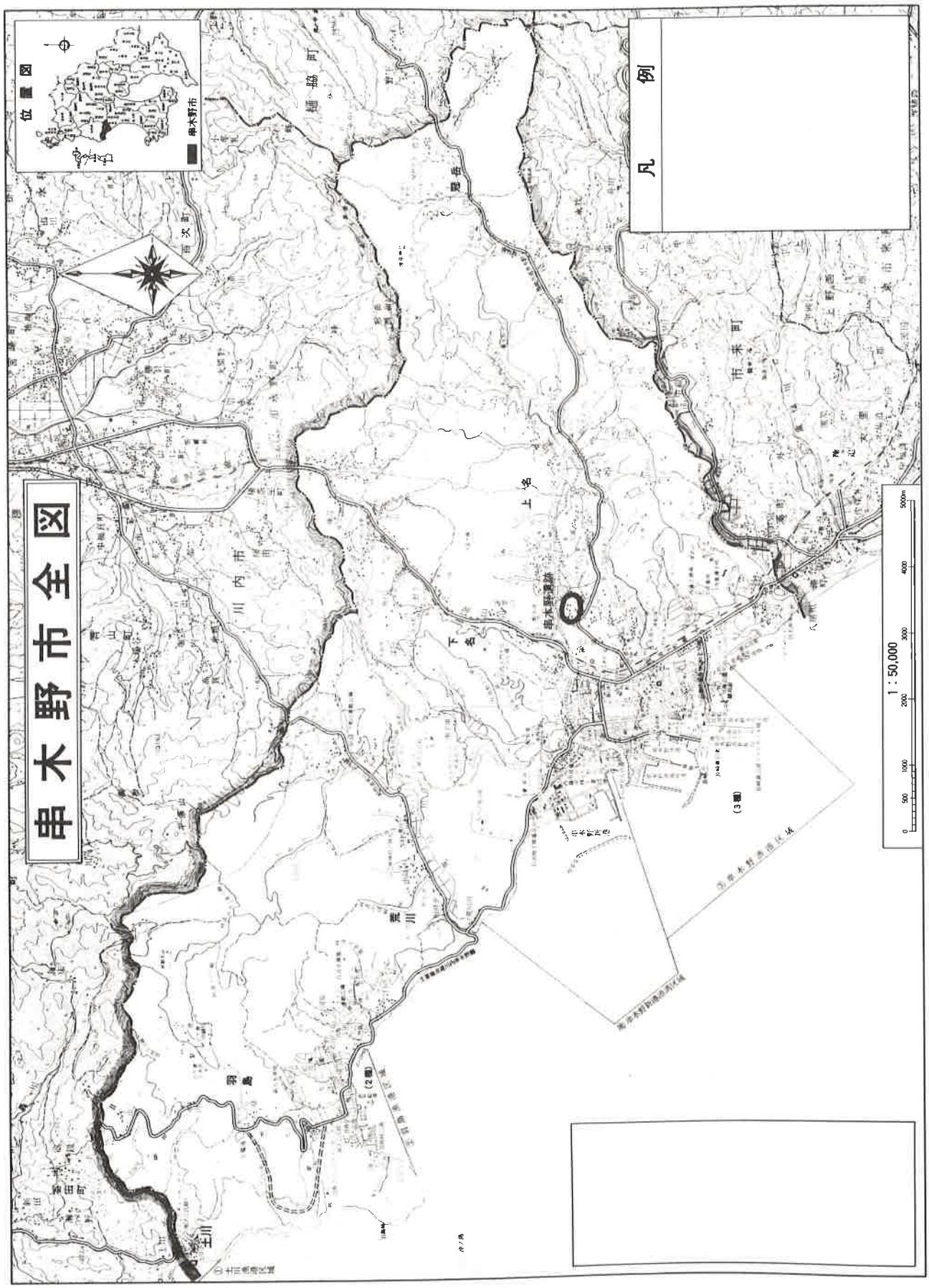
図版23　遺物写真（個別写真・1．10．59．81．101） …… 80

図版24　遺物写真（２～25） …… 81

図版25　遺物写真（26～43） …… 82

図版26　遺物写真（44～64） …… 83

図版27　遺物写真（65～83）…… 84
図版28　遺物写真（84～93）…… 85
図版29　遺物写真（94～107）…… 86
図版30　遺物写真（108～127）…… 87
図版31　遺物写真（128～139）…… 88
図版32　遺物写真（140～152）…… 89
図版33　遺物写真（153～169）…… 90
図版34　遺物写真（170～174，55，68，69，130）…… 91
図版35　発掘調査参加者 …… 92


串木野市全図
位置図
串木野市
凡例
1：50,000
0
500
1000
2000
3000
4000
5000m
川内市
上名
下名
市来町
樋脇町
西次郎
(2)
(3)

遺跡の位置図

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

串木野城跡は、串木野郷土史や薩隈日地理纂考によれば、中世山城であった「串木野城」があったことが記録されている。その後、薩摩の外城制度のもとで、麓に地頭仮屋がおかれ地元郷士によって、その残域は保存されていた。

現在は、西側の部分が一部宅地化やシラス採取がされているが、主郭と思われる部分はほとんど手を付けられておらず、残存状況は極めて良い。

串木野市都市建設課では、平成５年度から、串木野市都市計画土地区画整理事業を計画し事業区域内に串木野城跡が所存していたことから、串木野市教育委員会、県教育庁文化財課とその取り扱いについて事前協議を行った。その結果、地元住民の保存への熱意と文化財の保存・活用の見地から、麓地区歴史保存区域とした。その後、県教育庁文化財課の指導のもとに、串木野市教育委員会は中世山城である串木野城の保存活用を図っていくこととし、遺跡の範囲、性格等を調査確認していくために、国・県の補助を受けて、平成９年度から平成11年度の３カ年計画で、国宝重要文化財保存整備事業に伴う、埋蔵文化財確認発掘調査を実施した。調査の結果、掘立柱建物跡と考えられる多数の柱跡等の遺構や青磁・白磁・染付等の遺物を確認することができた。

確認調査は、平成９年度から平成11年度の３カ年で行い、平成11年度は鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて、整理・報告書作成の作業を行った。

第２節　調査の組織

（平成９年度）

調査主体者	串木野市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	竹田　昭
事務担当者	串木野市教育委員会社会教育課	課長	平石耕二
	〃	課長補佐	瀬戸山　武
	〃	主査	久木野親志
	〃	主査	福満泰子
調査担当者	〃	主事補	濵田純一
	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係	文化財主事	堂込秀人
指導指導者	文化庁文化財保護部記念物課埋蔵文化財部門	文化財調査官	坂井秀弥

（平成10年度）

調査主体者	串木野市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	竹田　昭
事務担当者	串木野市教育委員会社会教育課	課長	平石耕二
	〃	課長補佐	瀬戸山　武
	〃	主査	久木野親志
	〃	主査	萩原清美
調査担当者	〃	主事補	濵田純一

	鹿児島県教育庁文化財課埋蔵文化財係	文化財主事	堂込秀人
調査指導者	佐賀県教育長文化財課	副課長	大橋康二

（平成11年度）

調査主体者	串木野市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	山下卓朗
事務担当者	串木野市教育委員会社会教育課	課長	平石耕二
	〃	課長補佐	瀬戸山　武
	〃	主査	久木野親志
	〃	主査	萩原清美
調査担当者	〃	主事補	濵田純一
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	堂込秀人
調査指導者	鹿児島短期大学	学長	三木　靖
	知覧町教育委員会文化財課	学芸員	上田　耕
	熊本大学文学部	助教授	小畑弘己

発掘作業員（平成9年度）

白石　保、長　久、梅木　一美、力石　篤、田代　義臣、臼井ノブ子、萬福　高子、長　京子、西堂路フヂ子、宮地アヤ子、加藤なる子、西村　葉子、樋口　雅子、植田　もと、佐藤　順子

発掘作業員（平成10年度）

白石　保、長　久、西堂路哲夫、力石　篤、田代　義臣、萬福　高子、西堂路フヂ子、宮地アヤ子、加藤なる子、西村　葉子、樋口　雅子、植田　もと、久保　初美、大庭きく代、勝田　弘子

発掘作業員（平成11年度）

白石　保、長　久、宮地　貞治、石野　和弘、田代　義臣、萬福　高子、西堂路フヂ子、久木山美代子、加藤なる子、西村　葉子、樋口　雅子、植田　もと、軸丸由美子、大庭きく代、勝田　弘子

整理作業員（平成11年度）

木佐貫いく子、四丸久美子、寺田みどり、西　清子

なお、調査企画等に関し、鹿児島県教育庁文化財課長　立園多賀生氏、同課長補佐　山田孝志氏、同埋蔵文化財係長兼主任文化財主事　戸崎勝洋氏、県立埋蔵文化財センターの指導助言を得た。また、発掘調査・整理報告書については、県立埋蔵文化財センターの所長　吉永和人氏をはじめ、多大な支援と協力をいただいた。

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成９年度から平成11年度の３カ年で串木野城跡を確認することとし、トレンチ方式での調査を実施した。

なお、発掘調査期間及び発掘調査面積は、下記のとおりである。

発掘調査期間　　平成９年度　　平成９年12月２日～12月19日

発掘調査面積　　平成９年度　　108㎡

12月２日（火）　調査の開始。諸道具等の搬入及び調査に際しての諸注意、伝達。主郭を形成すると考えられる曲輪部分に第１・２トレンチ、空堀と思われる部分に第３・４トレンチを設定した。第１～４トレンチ掘り下げ。

３日（水）　第１トレンチ掘り下げ。作業用通路整備。

４日（木）　第１・２トレンチ掘り下げ。作業用通路整備。

５日（金）　第１トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影。
第５トレンチを西側曲輪に設定。第２・５トレンチ掘り下げ。

８日（月）　第１・５トレンチ掘り下げ。第２トレンチ清掃。

９日（火）　第１トレンチ遺構検出及びピットに石灰いれ。第５トレンチ掘り下げ。第２トレンチ遺物出土状況写真撮影。

10日（水）　第１・２トレンチ掘り下げ。第５トレンチを土塁部分まで拡張することとし、雑木伐採及び撤去。

11日（木）　第１・２トレンチ掘り下げ。第５トレンチ土塁部分掘り下げ。

12日（金）　第１トレンチ掘り下げ。第５トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影。

15日（月）　第１・２・５トレンチ掘り下げ。出土遺物水洗。

16日（火）　第１・５トレンチ掘り下げ。第２トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影。

17日（水）　第１・２トレンチ遺構検出及び石灰いれ及び遺構面写真撮影。
第５トレンチ清掃。

18日（木）　第１・２トレンチ遺構面掘り下げ。
第４・５トレンチ清掃及び出土遺物状況写真撮影。

19日（金）　第１・２・５トレンチ遺構配置図作成。
第４トレンチ土層断面図作成。
各トレンチの埋め戻し作業。

発掘調査期間　平成10年度　平成10年10月19日～11月7日

発掘調査面積　平成10年度　190㎡

10月19日（月）～21日（水）

調査の開始。諸道具等の搬入及び調査に際しての諸注意、伝達。

主郭を形成する曲輪部分に第1・6・7・8トレンチ、空堀と思われる部分に9トレンチ、西側曲輪に第10トレンチを設定。

第1・6・7・8・9・10トレンチ掘り下げ。作業用通路整備。第8トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影・出土遺物取り上げ。

第6・7トレンチ壁面清掃。

22日（木）　西側曲輪に第11トレンチを設定。

第9・11トレンチ表土剥ぎ。

第8トレンチ遺物出土状況写真撮影及び出土遺物取り上げ。

第10トレンチ壁面清掃、第1トレンチ拡張部分・第6・7トレンチ掘り下げ。

23日（金）　第1トレンチ拡張部分・第6・7・9・11トレンチ掘り下げ。

26日（月）～29日（木）

第1トレンチ拡張部分・第6・7トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影及び遺物取り上げ。

第1トレンチ・1トレンチ拡張部分・第6・7トレンチ遺構検出及び柱穴検出、遺構掘り下げ。

第8・10トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影及び出土遺物取り上げ。

第11トレンチ掘り下げ。

30日（金）　第6・7トレンチ清掃及び遺構面写真撮影。

第1トレンチ拡張部分の炉跡検出。

11月2日（月）　第1トレンチ拡張部分の炉跡写真撮影。第8トレンチ清掃。

第1トレンチ拡張部分・第6・7トレンチピット掘り下げ。

4日（水）～6日（金）

第1トレンチ・1トレンチ拡張部分・第6・7・8トレンチ1／20遺構実測・遺構配置図作成。

第9トレンチ土層断面図作成。

7日（月）　各トレンチの埋め戻し作業。

発掘調査期間　平成11年度　平成11年11月22日～12月20日

発掘調査面積　平成11年度　350㎡

11月22日（月）～24日（水）

調査の開始。諸道具等の搬入及び調査に際しての諸注意、伝達。

主郭を形成する曲輪部分に第1・2トレンチ、空堀と思われる部分に第3トレンチ、西側曲輪に第10・12・13トレンチ、西側曲輪第16トレンチを設定。

第1・2・3・10・12・13・16トレンチ掘り下げ。

25日（木）～26日（金）

第2・3トレンチ掘り下げ及び作業用通路・周辺整備。

第1トレンチ清掃。

第10・12・13トレンチ出土遺物取り上げ。

29日（月）　第1・12トレンチ掘り下げ。

第13トレンチ清掃及び遺物出土状況写真撮影。

30日（火）　第2・12・13トレンチ掘り下げ及び作業用通路整備。

12月1日（水）　第2・12トレンチ掘り下げ。

西側部に第14トレンチを設定。第12・14トレンチ清掃及び遺構検出。

2日（木）　第2トレンチ掘り下げ。第12・13トレンチ遺構検出。

3日（金）　第13トレンチ拡張部分掘り下げ。第2トレンチ掘り下げ。

第14トレンチ上の曲輪への通路整備。

6日（月）　第13トレンチ拡張部分・16トレンチ掘り下げ。

第2トレンチ掘り下げ及び遺構検出。第14トレンチ上の曲輪への通路整備。

7日（火）　西側部に第15トレンチを設定。

第2・13・14トレンチ掘り下げ。

第12・13・14・15トレンチ遺構配置図作成。

8日（水）　第2・13・14トレンチ掘り下げ及び作業用通路整備。

9日（木）　第2トレンチ清掃及び石灰いれ及び遺構面写真撮影。

10日（金）　第3・16トレンチ土層断面図作成。

13日（月）　第13・14トレンチ土層断面図作成。

第12・13トレンチ拡張部分掘り下げ。第2トレンチ清掃。

14日（火）～17日（金）

第12・15トレンチ掘り下げ。第2トレンチ遺構配置図作成。

第12・14・15トレンチ土層断面図作成。

第3・5・10・13・14・16トレンチ埋戻し作業。

20日（月）　第1・2トレンチ埋め戻し作業。

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

串木野市は薩摩半島の西岸に位置し、北は川内市、東は薩摩郡樋脇町、南は八房川をはさみ市来町に接している。市域の北部は旧期火成岩からなる八重山山塊に属する冠岳、平原山、弁財天山などからなる海抜500ｍ前後の山々が連なり川内市との分水界をなし、この山地は金鉱を蔵する。南はシラスが広く堆積して台地を作り、山地部は溶結凝灰岩や安山岩の露出するところもある。樋脇町野下に源をもつ五反田川は、シラス台地を削って沖積地をなしながら野元で海に入る。こうした沖積作用と北西の季節風で、南から続く吹上浜砂丘の末端を形成しており、その沖積地に現在の市街地が立地する。

市の最高峰冠岳は、除福伝説で知られる。用明天皇の勅願所として蘇我馬子が興隆寺を建立し、西岳・中岳・東岳に熊野三所権現を招請したと言われ、現在はその礎石をとどめるのみであるが霊峰として信仰をあつめている。開山阿子丸仙人より63代快屋に至る住持の墓は、頂峯院西側の段丘や花川のほとりに、坊主墓として現存している。また、万治３（1660）年のころ、島津家が芹ケ野において掘り始めた金山は、全国でも有数の金山として知られている。

串木野城跡は、串木野市の東部、串木野市上名麓内にある。五反田川が平野部に流入する平野の扇状部分にシラスの残丘がいくつか散在し、その一つに串木野城が築かれている。城跡の北側には五反田川が流れ、東側には坂之下栫城跡、西側には浜ケ城跡がある。

城跡の現況は、東側の曲輪は南方神社の境内となっており、その他は、大部分が民有地であり、雑木・竹林で覆われている。周辺には、串木野氏５代の墓と言われている串木野氏の墓や元亀２（1571）年に17代島津家久が16代島津貴久をまつるために建立した大中公の廟や近世の頃を偲ばせる麓の武家屋敷群や地頭仮屋跡、旧街道等が現存している。

串木野城は、『御家五代他家古城主来由記』によると「・・・串木野三郎忠道、忠久公の時櫛木野城をまもる。」とあり、「古系図」の忠道の部分に「始築串木野城住之」とある。そして『古城并古戦場糺帳』によると「建久年間之比串木野三郎忠道致領地、其子孫五代目七郎忠秋迄相続致居城候・・・」とある。このことと、1342年に五代目城主、串木野七郎忠秋が知覧に追われたことから推測すると、1215年～1220年頃、串木野三郎忠道によって築城されたと考えられる。

興国三年（1342）に南朝方の串木野七郎忠秋と北朝方の島津貞久との間に戦いがあり、串木野七郎忠秋は、城を追われる。文和四年（1355）、征西将軍懐良親王の臣三条泰季は串木野城の奪回の命を市来氏家・鮫島蓮道・知覧忠世等の南朝勢にだし、串木野城を攻めさせるが、島津貞久の子師久の反撃にあって奪回することはできなかった。

串木野城跡の東側に位置する坂之下栫城跡は、串木野城の出城とみられており、『三国名勝図会』巻の十によると、「坂之下栫、串木野村上名にあり、永禄十一年五月渋谷衆五十三人戦死と旧記にあり・・・」とあり、永禄十一年（1568）に島津義久と渋谷衆との戦いがあった所である。

串木野城跡の西側に位置するす浜ケ城跡も、串木野城の出城とみられているが、現在は、宅地化が進み、ほとんど原形をとどめていない。

串木野城は、南北朝の当時、北朝方の島津氏が市来氏、伊集院氏を討つにも、また南朝方が出水の木牟礼城や川内の碇山城の北朝勢を討つにも、どうしても通らなくてはならない要路であり、南北朝以後も渋谷衆を牽制するうえでも重要な場所に位置していたと考えられる。

〔参考文献〕

『串木野郷土史』　串木野市教育委員会　1984年

『御家五代他家古城主来由記』

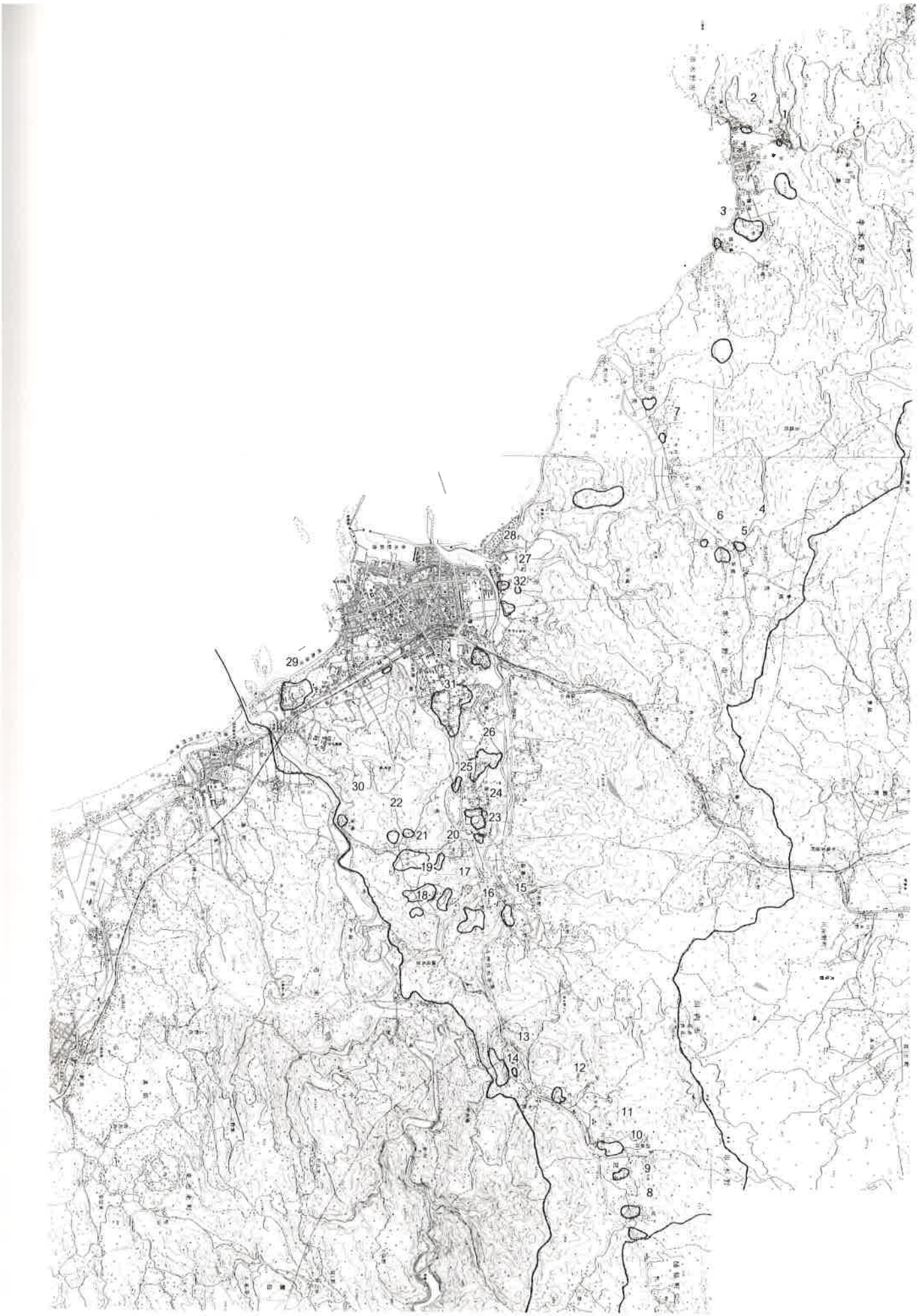
『古城并古戦場糺帳』

『三国名勝図会』

『薩隅日地理纂考』

串木野市遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	萩元	羽島字萩元		縄文・近世	土器片・石核	平成4年北薩・伊佐分布調査
2	丸尾	羽島字丸尾		縄文	残核・黒曜石・剥片・ドリル・楔形石器	平成4年北薩・伊佐分布調査
3	猪鼻	羽島字猪鼻		縄文・近世	石錘・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
4	一ノ渡瀬	荒川字一ノ渡瀬		古墳	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
5	芝居ケ段	荒川字芝居ヶ段		縄文	残核・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
6	木場の段	荒川字木場の段		歴史	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
7	中野	荒川字中野		縄文	黒曜石剥片・スクレーパー	平成4年北薩・伊佐分布調査
8	野下口	冠岳字野下口		縄文・古墳	石核・黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
9	藤ノ脇	冠岳字藤ノ脇		縄文	黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
10	上虎	冠岳字上虎		縄文	黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
11	前市野原	冠岳字前市野原		縄文・歴史・近世	黒曜石 土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
12	松野野	冠岳字松野野		縄文・歴史・近世	黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
13	久木之野	冠岳字久木之野		縄文	残核・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
14	丸田	冠岳字丸田		縄文	黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
15	大六野	上名字大六野		縄文・歴史・近世	石核・黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
16	芋野原	上名字芋野原		歴史・近世	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
17	八郎堀	上名字八郎堀		縄文	残核・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
18	休左衛門堀	上名字休左衛門堀		縄文	黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
19	兵左衛門堀	上名字兵左衛門堀		縄文・歴史・近世	黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
20	金吹ヶ段	上名字金吹ヶ段		近世	陶器片 磁器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
21	東中之薗堀	上名字東中之薗堀		近世	陶器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
22	寺堀B	上名字寺堀B		縄文・歴史・近世	黒曜石 磁器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
23	六目木	上名字六目木		縄文	石核・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
24	平石原	上名字平石原		縄文	黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
25	向井原	上名字向井原		縄文	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
26	栫鼻	上名字栫鼻		縄文・歴史・近世	黒曜石剥片 土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
27	中野畑	下名字中野畑		縄文・歴史・近世	黒曜石剥片・土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
28	幸新橋	下名字幸新橋		縄文	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
29	中海瀬	下名字中海瀬		縄文・歴史・近世	黒曜石 土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
30	段ノ上	下名字段ノ上		縄文	残核・黒曜石剥片	平成4年北薩・伊佐分布調査
31	並松	上名字並松		縄文・古墳・中正・近世	黒曜石・土器片・陶磁器片	平成4年北薩・伊佐分布調査
32	節政	下名字節政		縄文・古墳	土器片	平成4年北薩・伊佐分布調査


2
3
7
6
4
5
28
27
32
29
31
26
25
30
24
22
23
21
20
19
17
18
16
15
13
14
12
11
10
9
8

第１図　周辺の遺跡

第２図　串木野城跡地形測量図

第３図　串木野城跡トレンチ配置図及び曲輪番号等

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要（第３図）

串木野城跡の南側部分の現在住宅地となっているところは、かって地頭仮屋がおかれ、麓集落が形成されていた。「麓」は薩摩藩近世の外城制度のもと形成された集落・制度で、武士や郷士を薩摩藩領の各地の中世山城の麓に配置して、いざ戦いとなれば山城に立て籠もったり、そこから兵士を召集した。この伝統は中世山城を管理して保存する役割も果たした。現在までも、余人を立ち入らせることがなく、北側の曲輪４は杉林となっているが、大部分は竹林であった。そのため、まず踏査してトレンチ設定予定場所を伐採することとした。曲輪及び帯曲輪については、上田氏の縄張構成に準じて説明することとする。串木野城は、地勢としては、南側が開けており現在住宅地として開発されている。旧道は西側を通っており、これと冠嶽・樋脇方面の県道（かっては堀切りが想定される）が南側を通って旧道へつながる。陸路としては南側からが利便性に富む。北には五反田川が流れ、北西に下って海にでる。現在水田地帯であるが、舟運としては北に利便性が有る。このため大手がどちら方向かの議論もわかれる。

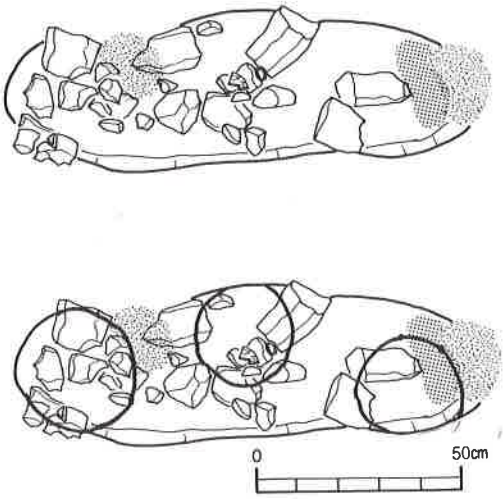
串木野城の中核の６つの曲輪のうち東南の曲輪５は、現在南方神社があり、神社氏子の承諾さえあれば、いつでも発掘調査は可能であり、今回の機会以外に発掘調査の困難な部分より発掘調査を行うこととした。曲輪４については、杉林間を掘ることは無理であったので、発掘調査は行わなかった。

平成９年度は、遺構の存在の有無、廃絶時期等の把握と、とりあえず今後の調査の見通しをつけることを目的とした。その結果曲輪１（５トレンチ）、曲輪２（１トレンチ）、曲輪３（２トレンチ）において掘立柱建物の柱穴跡と考えられるピットが残存していることを確認し、空堀部分については、曲輪１と曲輪２の間（３トレンチ）に薬研堀があり、曲輪３と曲輪４の間（４トレンチ）についても、現在の地表面より約２ｍ下がって炭化物が検出された。曲輪１については土塁が残存していたため、南北方向の５トレンチを一部東方向に拡張して、その断面から、削り出して作られたものであることを確認した。

平成10年度はほぼ城跡内の踏査がすんだために、地形図を作成することとし、測量委託費に調査費の半分をあて、発掘作業は３週間おこなった。さらに曲輪２について、１トレンチを拡張して、遺構を検出し、遺構の掘り下げをおこなった。曲輪１と曲輪３の間のｃの部分については、出入り口跡や門跡を想定して、９トレンチを設定し掘り下げたが、ここも空堀が入っていた。曲輪１の北側の帯曲輪ｇの部分に10トレンチと11トレンチを設定し確認をおこなった。２ｍ以上の土塁が残っており、10トレンチではやはりシラス山の尾根を削り出している。11トレンチでは基盤の白色シラス面で遺構は確認されなかった。

平成11年度は、曲輪３の２トレンチおよび８トレンチで確認した遺構をさらに面的に把握するために、12ｍ×14ｍにひろげた。その結果掘立柱建物跡を３軒と柵列を１列確認できた。さらに帯曲輪ｇに12トレンチ、13トレンチ、14トレンチ、15トレンチを設定し掘り下げた。曲輪０については、登り口に土塁が設けられ桝形をつくっており、西側にも土塁があり、下草を払って土のう袋等を積んで整備したのみで、トレンチは設定しなかった。遺跡見学会にむけて、１トレンチと３トレンチの再発掘をおこなった。

各年度において、かなりの急坂を上り下りし、かつ機械がはいるのが曲輪２と曲輪３であったた



第４図　１トレンチ炉跡

め、竹の根が張った表土の除去に時間を要し、また周辺の住宅へのシラス災害の配慮等で、発掘調査面積は限定せざるを得なかった。遺構面をシートで覆うことも、排水の関係上無理として、調査終了時に翌年以降に継続調査するトレンチについても、その度に埋めもどして、翌年の発掘調査時に再度遺構面を掘り出した。また柱穴はシラスに掘り込まれており、遺構の肩が弱く、11年度は必要以上の掘削は行わないこととした。また平成９年度に豪雨があり、曲輪３の東側が土砂崩れをおこし、その後10年度に治山工事された。図版２の下の写真が治山工事前の写真である。

各年度の発掘調査面積は、年度をおって以前の調査トレンチを開けて、見学者へ解放したため、平成９年度が108㎡、平成10年度が190㎡、平成11年度が350㎡となった。実調査面積は各年度で平均120㎡である。

また平成11年11月27日（土）に発掘体験をおこない、12月11日（土）には現地見学会を実施した。

現地見学会においては、南九州城郭研究会を中心に150名前後の見学者が来跡した。

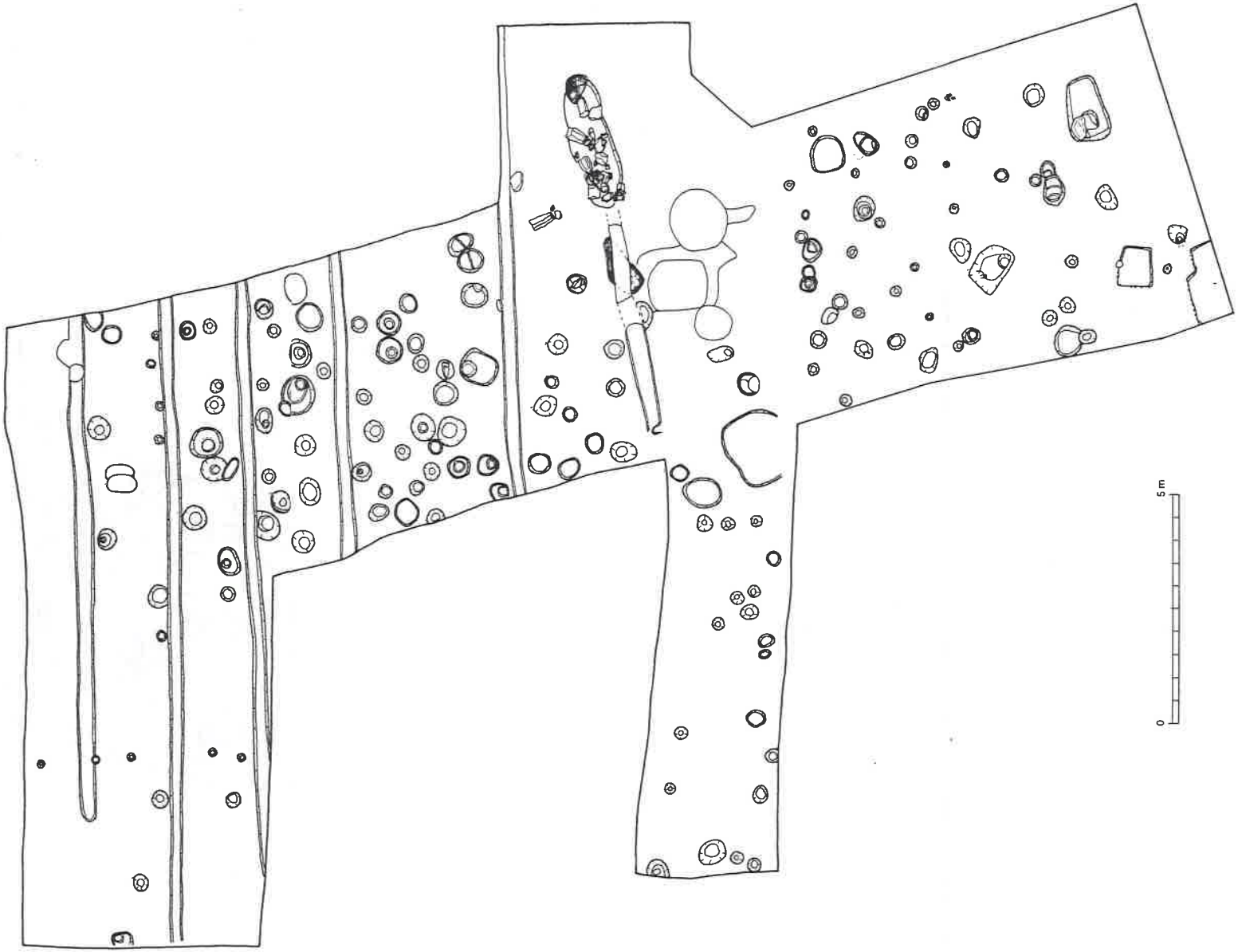
第２節　各トレンチの調査

１）１トレンチの調査（第４図～第13図）

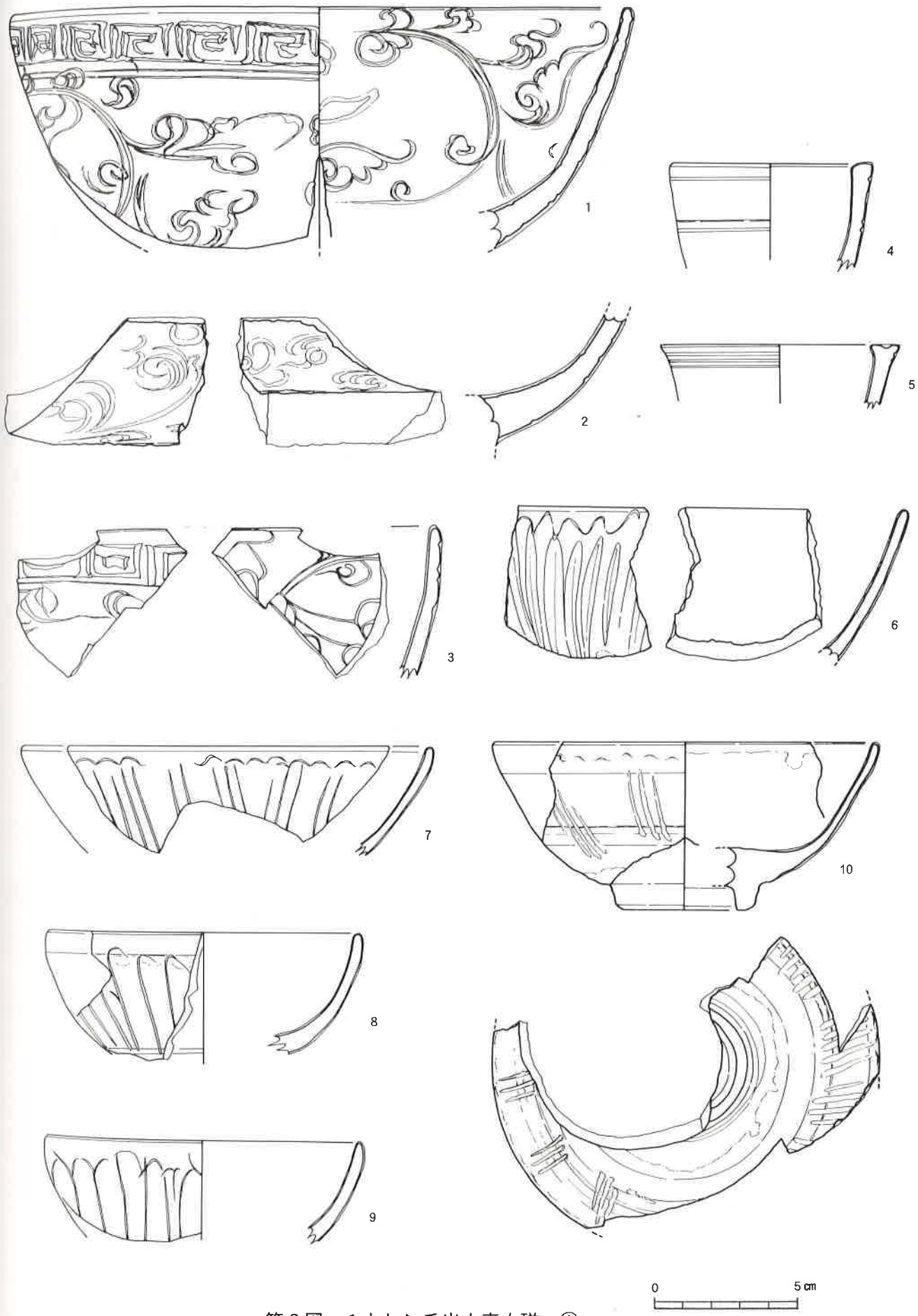
平成９年度に南側の中央部の曲輪２に東西方向に約２ｍ×15ｍで設定した。約50㎝の表土を除去して、遺構面を検出した。南北方向に幅30㎝ほどの溝状遺構が、約1.5ｍ間隔ではいり、これがもっとも新しい遺構である。柱穴跡の遺構と16世紀の染付等の遺物が出土した。このため幅を広げて全幅約５ｍで調査することとした。中央部北側で炉跡を検出したために、さらに一部北側に２ｍほど広げた。平成10年度は６トレンチと７トレンチを南北方向に設定し、７ｍほど南へと遺構面の広がりを追った。６トレンチ側は遺構は疎であり、杭列が１列検出された。掘立柱建物跡が曲輪の北東側によっていた可能性がある。６トレンチと７トレンチについては、１トレンチの拡張として、遺物等は一括して述べていきたい。西側では検出面は基盤の白色シラスであるが、東側は淡褐色のシラスとピンク色のシラスが混じった層での検出で、遺構が把握しにくかった。これは西南側を削り、北東側へ盛り土して、曲輪を造成したものと考えられる。

炉跡（第４図）については、当初鍛冶炉を想定して検出していたが、鉄片・鉄滓は出土せず、鍛冶炉ではなかった。上面検出後に半截して掘り下げた。溝によって石組が動いたものがあるが、第５図の下図のようにほぼ円形の石組みが３基あり、炉を形成したものと考えられる。炊事に用いたものと考える。

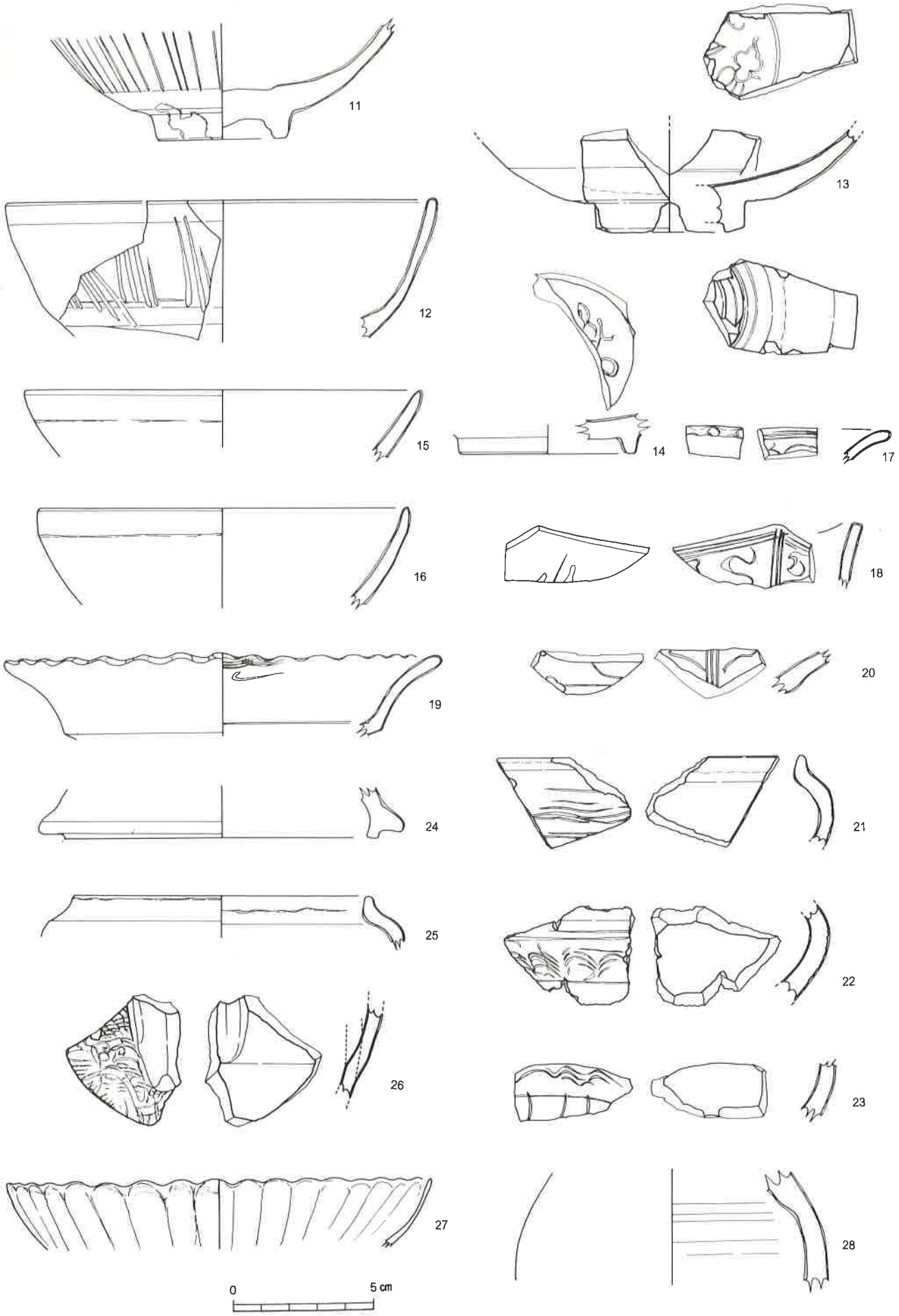
第５図が遺構配置図である。柱穴からの建物跡の検出は、炉跡を撹乱した小溝からさらに西側の小溝の南西に、磁北方向からは、やや軸がずれた東南向きの３間の柱列が伺えるが、復元には至らなかった。曲輪３の建物跡と軸が共通しており、ほぼ同時代の掘立柱建物跡があったものと考えら



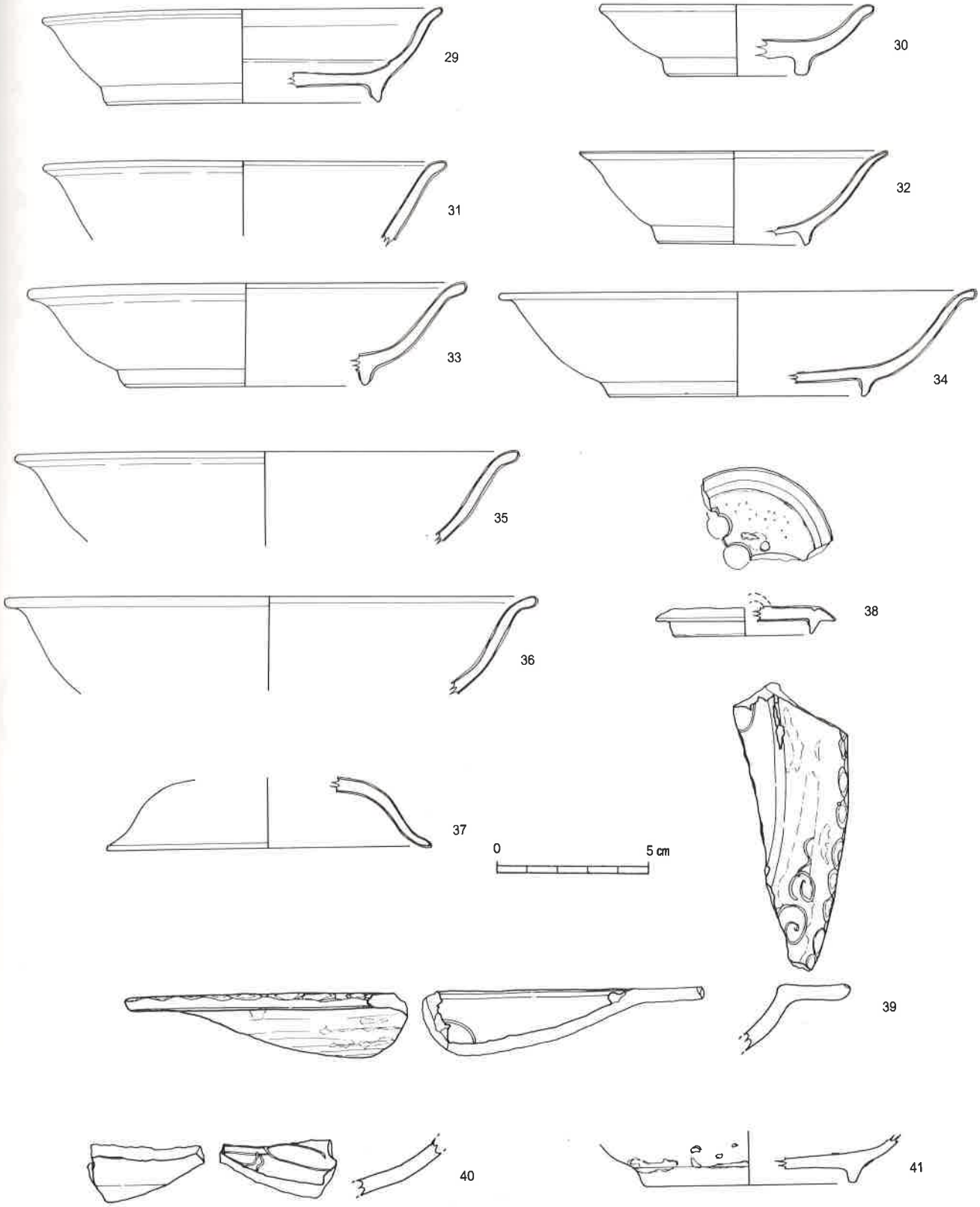
第５図　１トレンチ・６～８トレンチ遺溝検出状況



第６図　１トレンチ出土青白磁　①



第７図　１トレンチ出土青白磁　②



第８図　１トレンチ出土白磁・陶器

れる。幾列かの柵列があったものと考えられる。

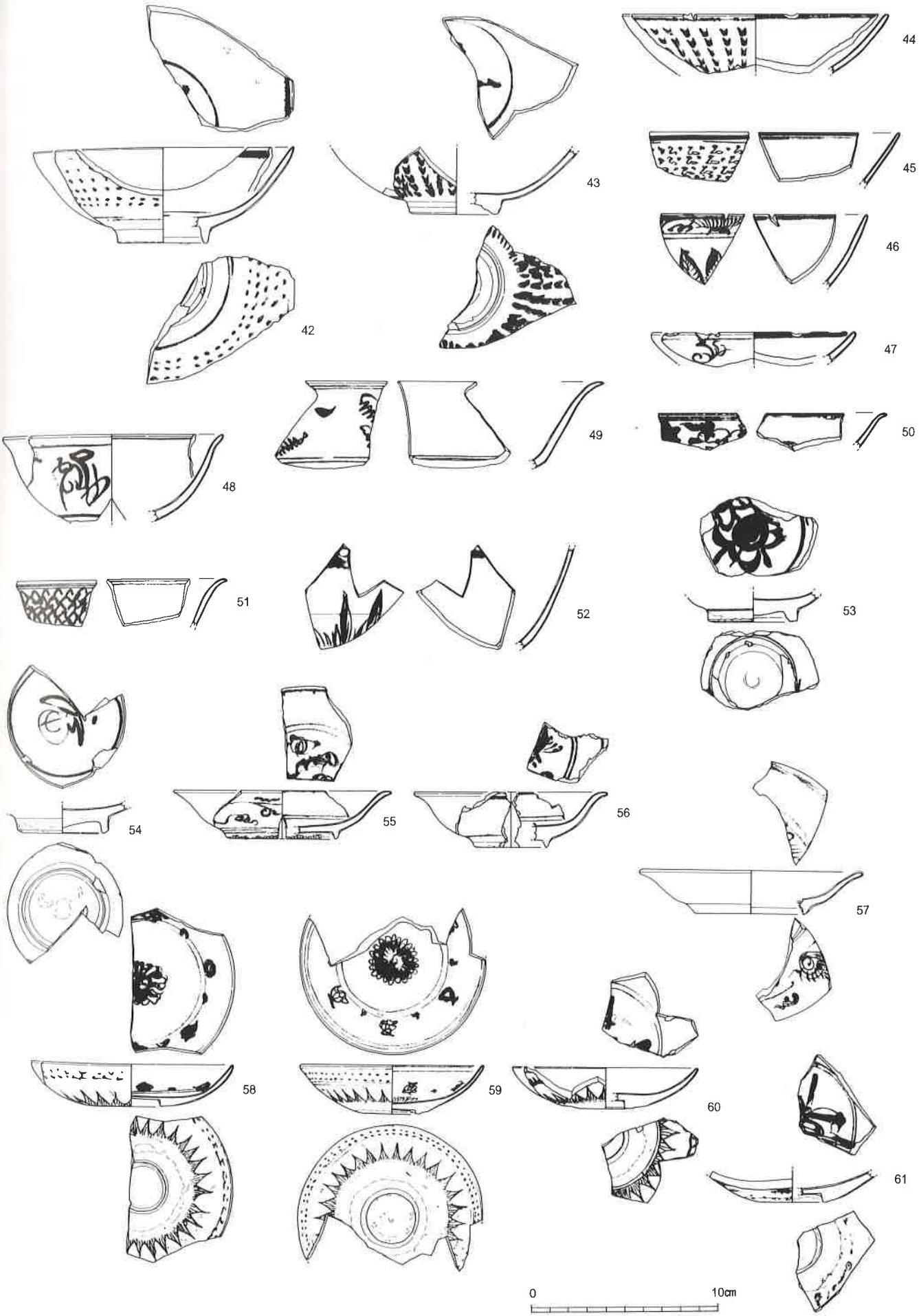
出土遺物は1～9・11・13～26・28が青磁で、10・12・27・29～38が白磁、39・40が三彩、41が青釉陶器、42～79が染付、81～97が陶器、98～107が土師器である。

1～3は龍泉窯の雷文帯青磁碗で14世紀中頃から15世紀初めの時期にあたる。4・5は香炉である。4は16世紀の終わりぐらいのものである。6～9は蓮弁文の碗で、6が15世紀中頃から16世紀の前半の時期にあたる。7～9は16世紀ぐらいか。10・12は白磁で、櫛目の沈線が施される。11・13・14は印花文の底部である。17～20は腰折れの稜花皿の破片で、ヘラ描きの沈線で施文する。24は盤の蓋としたい。21・22・23・25は口縁部が短く立つ、ボール状の鉢形土器と思われる。27は菊花皿である。30は青磁の小皿である。29～36（30を除く）は端反りの口縁をなす白磁で、森田氏分類のE－2類（森田　1982）に相当し、16世紀の使用が中心である。38はつまみの痕跡と穴があいており、合子の蓋と思われる。39は明の三彩皿で、ヘラ描き沈線に褐釉・緑釉が施される。41は青釉陶器であり、わずかにコバルト釉が残る。

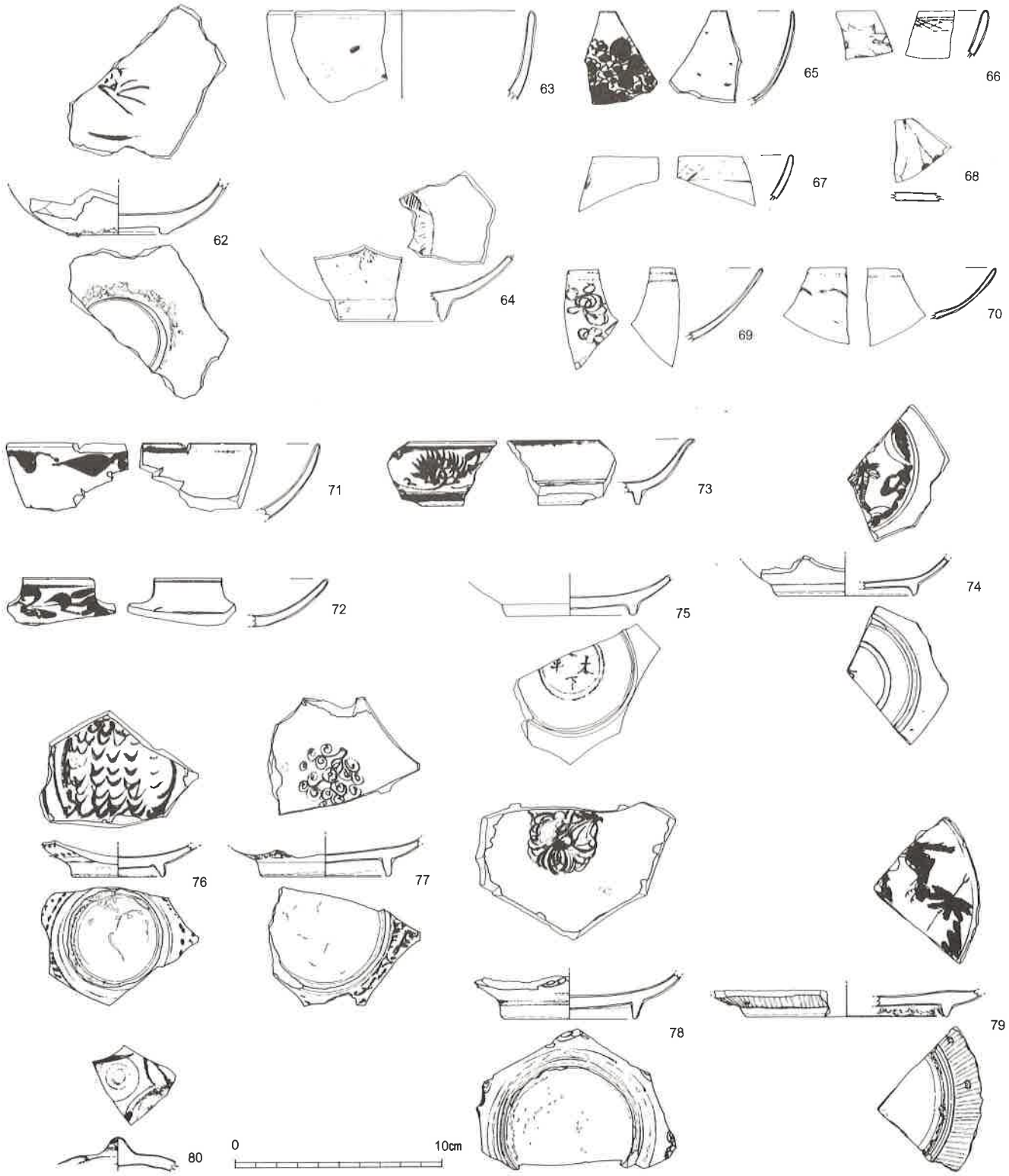
42～79は染付である。42～46は小野氏分類（小野　1982）の碗C群にあたる蓮子碗で、碗としては出土がもっとも多い。小花文や波濤文や芭蕉葉文を施す。49～51は小野氏分類の碗B群にあたり、51は大口市平泉城跡でも出土している。48は端反りの口縁をなすが、漳州窯系[1]（森村 1994）の碗であろう。54は見込みに「福」字文が書かれる。55～57は小野氏分類の皿B1類である。55は底部に砂が付着し、57とともに牡丹唐草文が外面に書かれる。56は漳州窯系の可能性が強い。58～62は小野氏分類の皿C群で、碁笥底で口縁は軽く内湾気味で、高台は畳付部分の釉を掻き取るものである。外面に波濤文・芭蕉葉文、見込みに花文のI類が多い。63と64は、白濁した釉薬で、文様もぼけているものである。71と72は内湾する口縁の皿であるが、漳州窯系の可能性がある。65はアジサイを描き、肥前の18世紀の新しいものである。66～68は赤絵である。69・70は小野氏分類の皿E群で、73は皿B群にあたる。74～79は皿の底部であるが、皿E群のもので、見込みに花文や水草が書かれる。80は蓋のつまみ部分である。81は備前焼の摺鉢で、87～91とともに16世紀初めから17世紀に至るV期に相当する時期のものであろう。87・88は窯印がある。82は東播系の摺鉢で、83～85は黒褐釉の壷の口縁部と肩のところである。産地は明のものと考えられる。92は、貝目はないが初期の薩摩焼の可能性が大きい。94は火舎、96は土風呂の破片である。

全体に染付と白磁の破片が多く、土師器の壊れやすい性格から考えると、土師器の破片の割合は少ない。その他に鉄釘と壁材と判断されるすさ入りの焼成粘土塊が出土している。

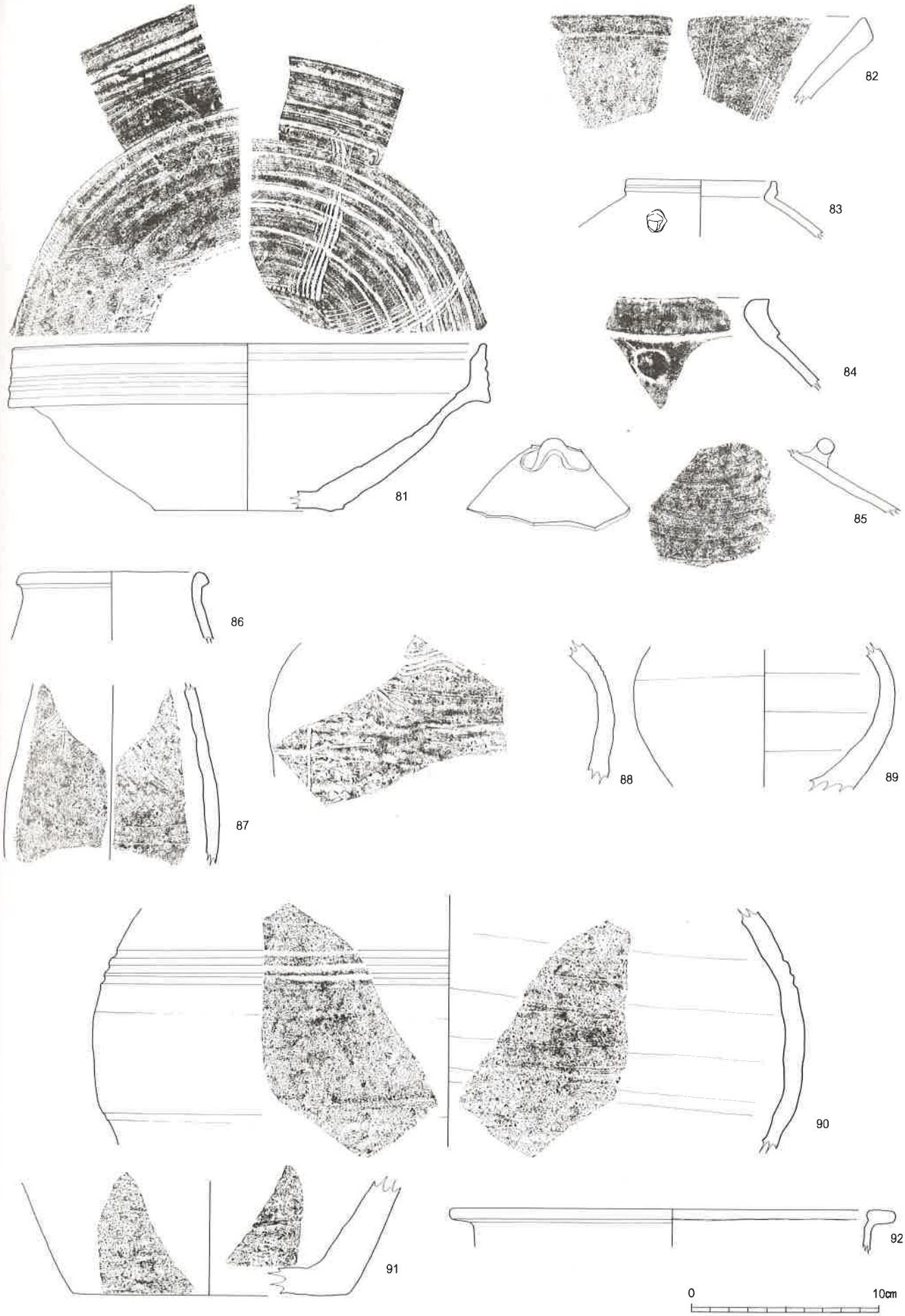
1）漳州窯系としたものは、加世田市の橋口亘氏の御教授により分類した。



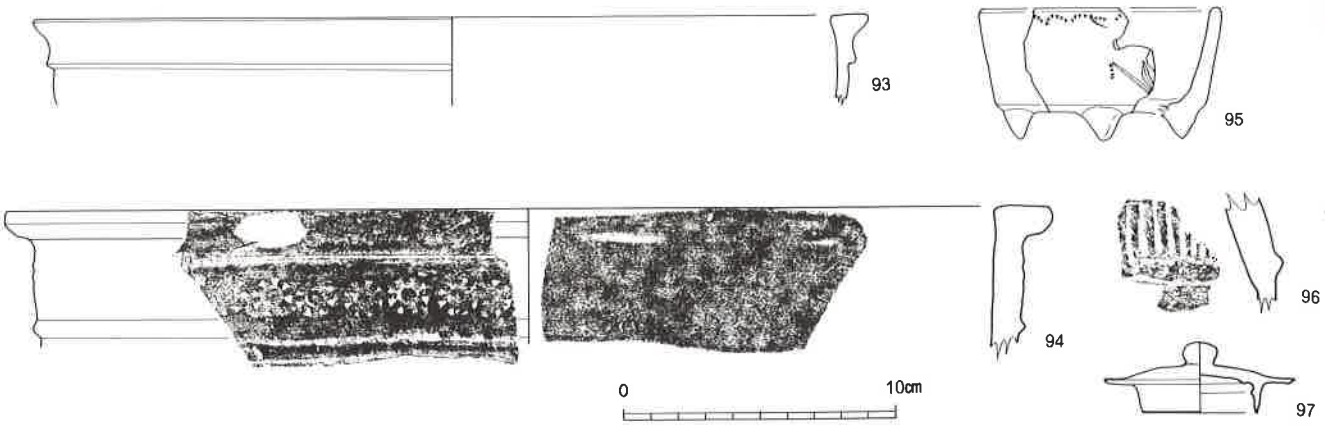
第９図　１トレンチ出土染付　①



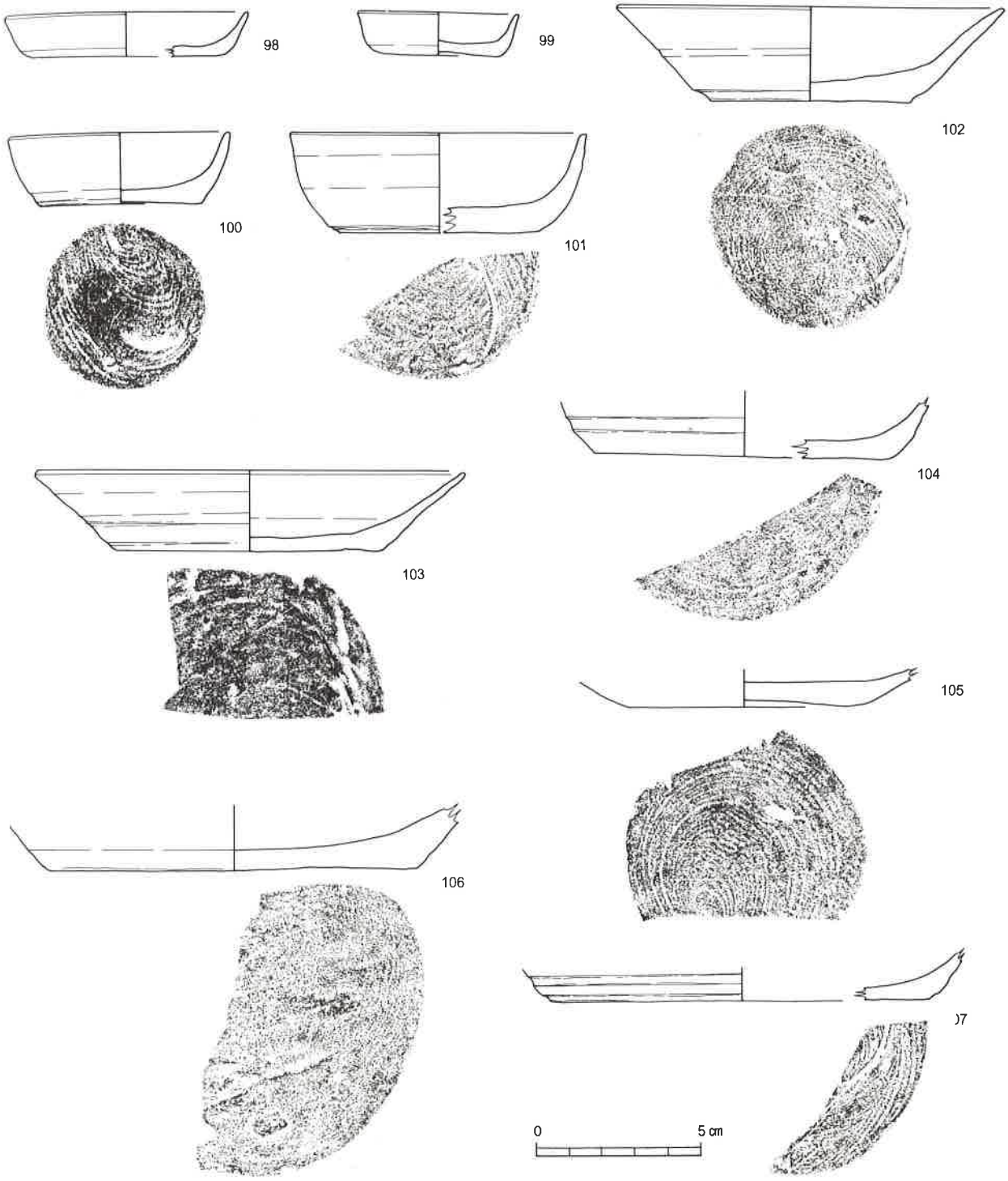
第10図　１トレンチ出土染付　②



第11図　1トレンチ出土陶器・その他　①



第12図　１トレンチ出土陶器・その他　②



第13図　１トレンチ出土土師器

2）2トレンチの調査（第14図～第20図）

曲輪群の中心部の曲輪3に、平成9年度に南北方向に2m×10mで2トレンチを設定し掘り下げた。その結果、遺構検出面が北側で深くなっていくが、曲輪2と同様の時期の遺物と遺構が検出された。平成10年度には東西方向に、2トレンチと直行させて、8トレンチを12m×14mで設定し掘り下げた。平成11年度は、曲輪2の調査が終了しており、曲輪3を中心に発掘調査をすすめることとして、2トレンチと8トレンチを2辺として12m×14mに広げて、遺構検出をおこなった。曲輪2と同じく南北方向に幅30㎝の溝状遺構が2.5m間隔ではしっている。柱穴跡の埋土には、黒褐色・灰褐色・灰褐色に黄色土ブロックと焼土が入るものがあり、分けることができる。埋土からは3時期に分けられる可能性があり、その色調の違いを記録した。検出面で3軒の建物跡と1列の柵跡が判明したため、この柱穴跡は掘りあげた。またこの建物跡と同方向で、石の入った規模の大きな柱穴跡があり、礎石建物の可能性を含めて5穴を掘りあげたが、建物跡には復元できなかった。南北方向には3間の規模までは追える。北西隅には竪穴状遺構があり、遺構の性格を把握するために掘り下げることとした。それ以外の遺構については将来に託すこととした。調査区の南西部分は白色シラスの基盤シラスが遺構検出面であり、北東部分では遺構検出が難しくなってくる。これは南西側の土を削って、北東部分を埋め立てて曲輪を造成したためと考えられる。

1号掘立柱建物跡は2間×3間の規模で、梁行約360㎝×桁行約530㎝である。柱間は桁行で中央の1間の幅がせまく、幅140㎝となり、他の柱間は190㎝前後である。2号掘立柱建物跡は2間×2間の規模で、梁行約310㎝×桁行約360㎝である。平行4辺形に歪んでいる。3号掘立柱建物跡は全体を検出していないが、2間×2間もしくは2間×3間の建物跡と思われる梁行を検出した。桁行は約400㎝であり、柱穴も大きい。

108～112が青磁、113～117が白磁、119～131が染付、132～139が陶器、140～145が瓦器類で、146～152が土師器である。

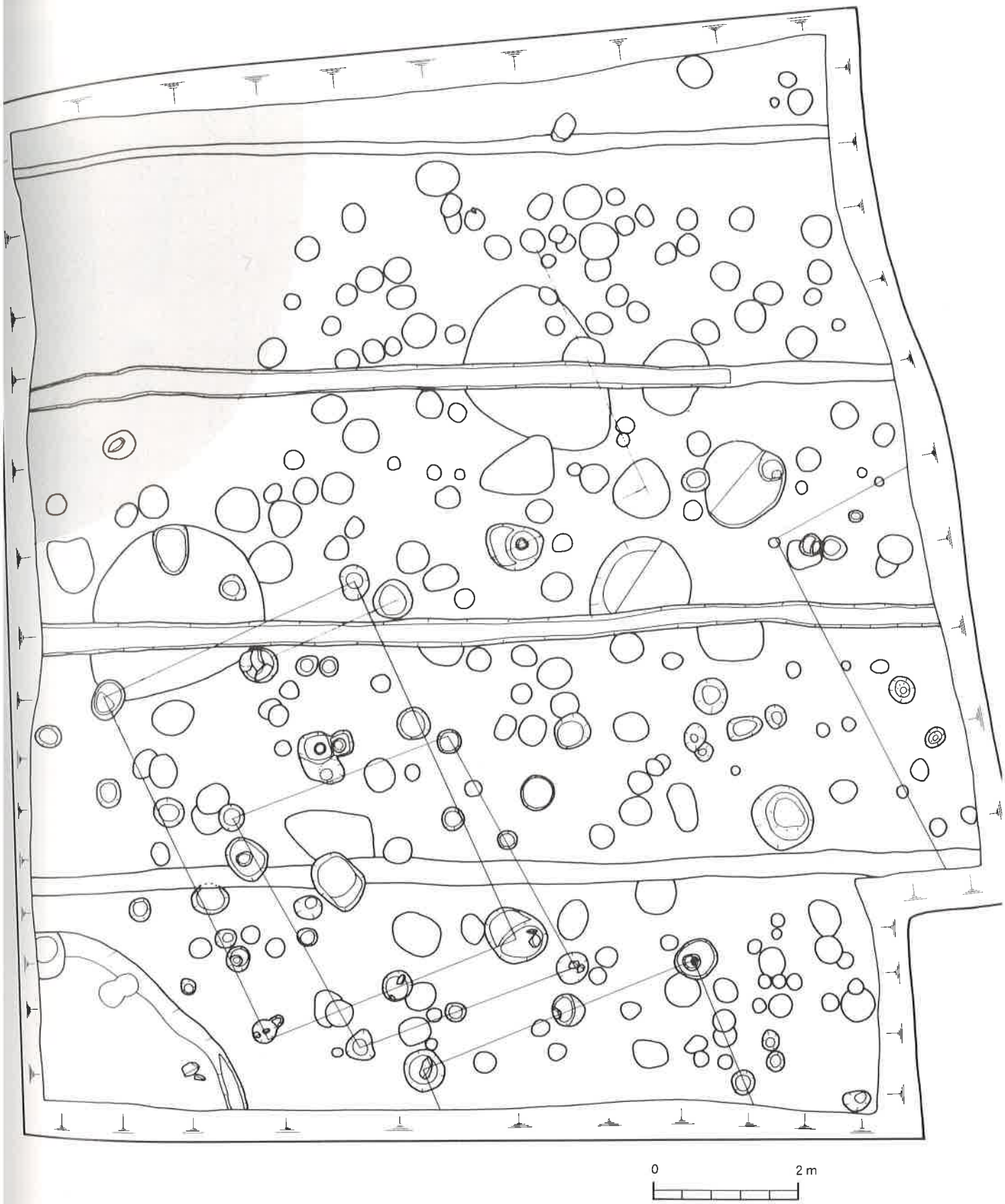
108は青磁の無文碗である。109は腰折れの稜花皿の破片で、ヘラ描きの沈線で施文する。110は青磁坏で、111は青磁蓋である。112は印花文の青磁の底部で時期が古くなる。

113～117は端反りの口縁をなす白磁で、森田氏分類のE－2類に相当し、16世紀の使用が中心である。117は小坏であろう。118は染付の長頸壷の口部分である。119は小野氏分類の皿C群である。120～122は小野氏分類の碗C群に当たると考えられる。122は人物を描く。123～125は小野氏分類の皿C群の底部で、碁笥底である。124のように、外面が芭蕉文、見込みに花葉文のものが目立つ。126は碗の底部で漳州窯系のものと考えられる。127は小坏の底部で、見込みが水草で高台内が「福」字文である。128～131は小野氏分類の皿B類の底部と思われる。

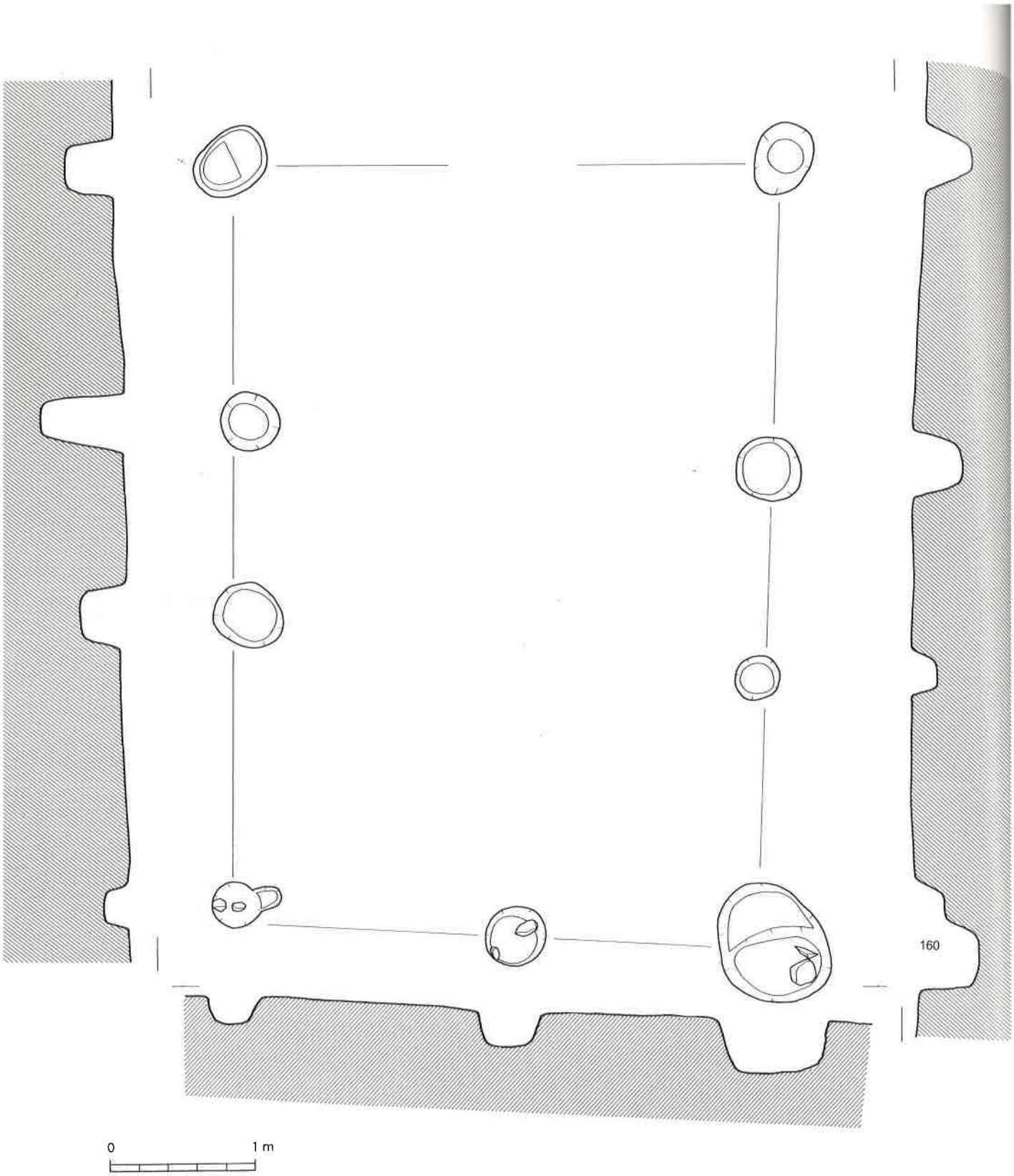
133は初期の薩摩焼の可能性がある。137は黄釉鉄絵の盤で、底部内側の立ち上がりに渦巻き文、見込みに唐草文のような文様が書かれる。139は摺鉢の口縁部にあたり、16世紀のものである。140・141は摺鉢の胴部である。143は須恵質の摺鉢である。144・145は火舎の破片である。

146～152は土師器である。すべて糸切底である。148・149の土師器の小皿は、内面に金属滓が付着して、胎土が灰色となるぐらい加熱されており、「るつぼ」として使用された。同様の土師器小皿が10数点出土しており、5トレンチの鉛製と思われる鉄砲の玉を考え合わせると、鉛を溶かしたものである可能性がある。今後付着物の分析が必要である。

2トレンチの遺物は破片が多く、小野氏分類の碗C群、皿C群の破片も多い。遺構を掘っていないため、図化するものが少なかった。残存状況がよくないが、土風呂や天目碗の破片などの茶道具

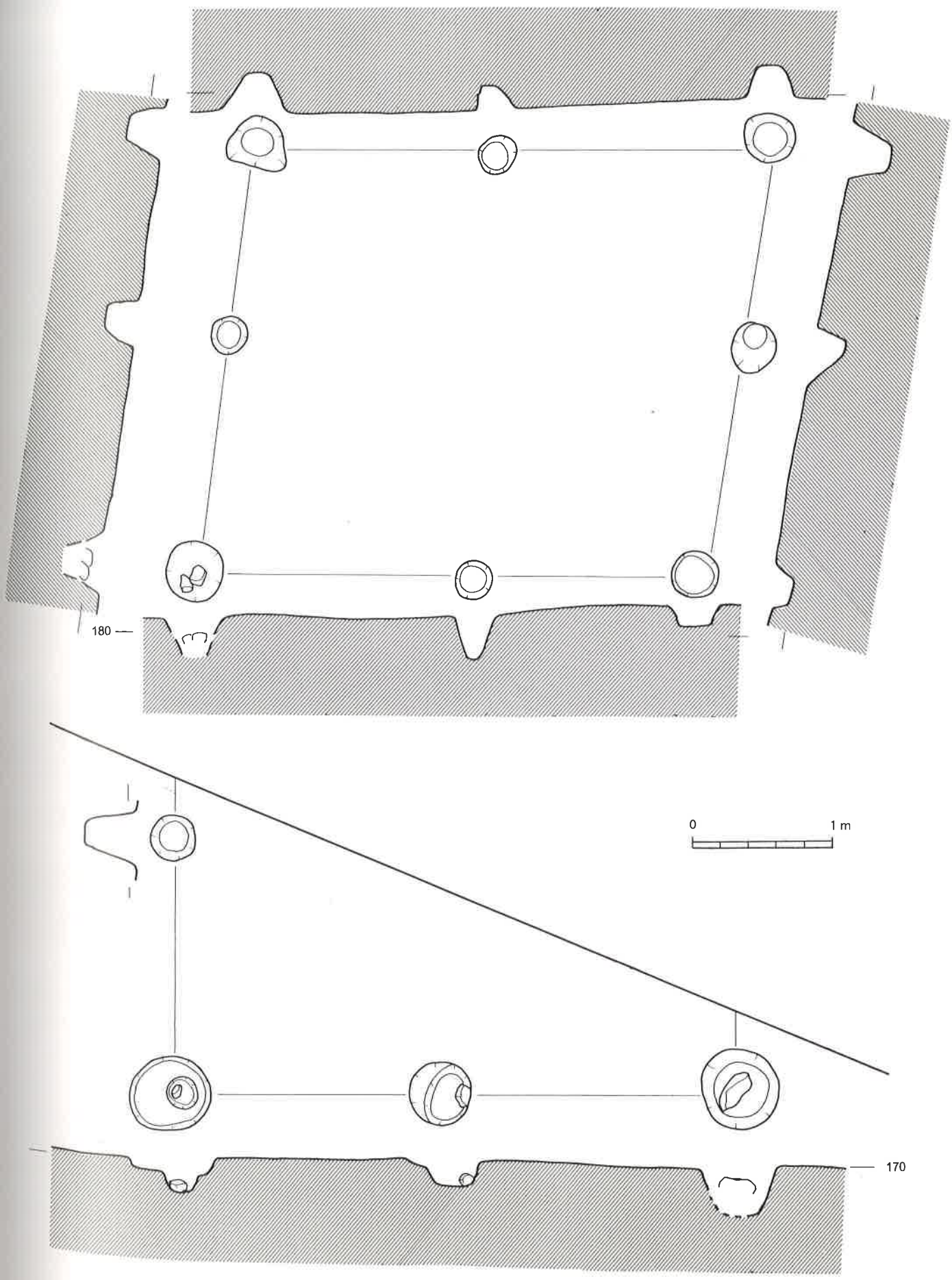


第14図　2トレンチ遺溝検出図

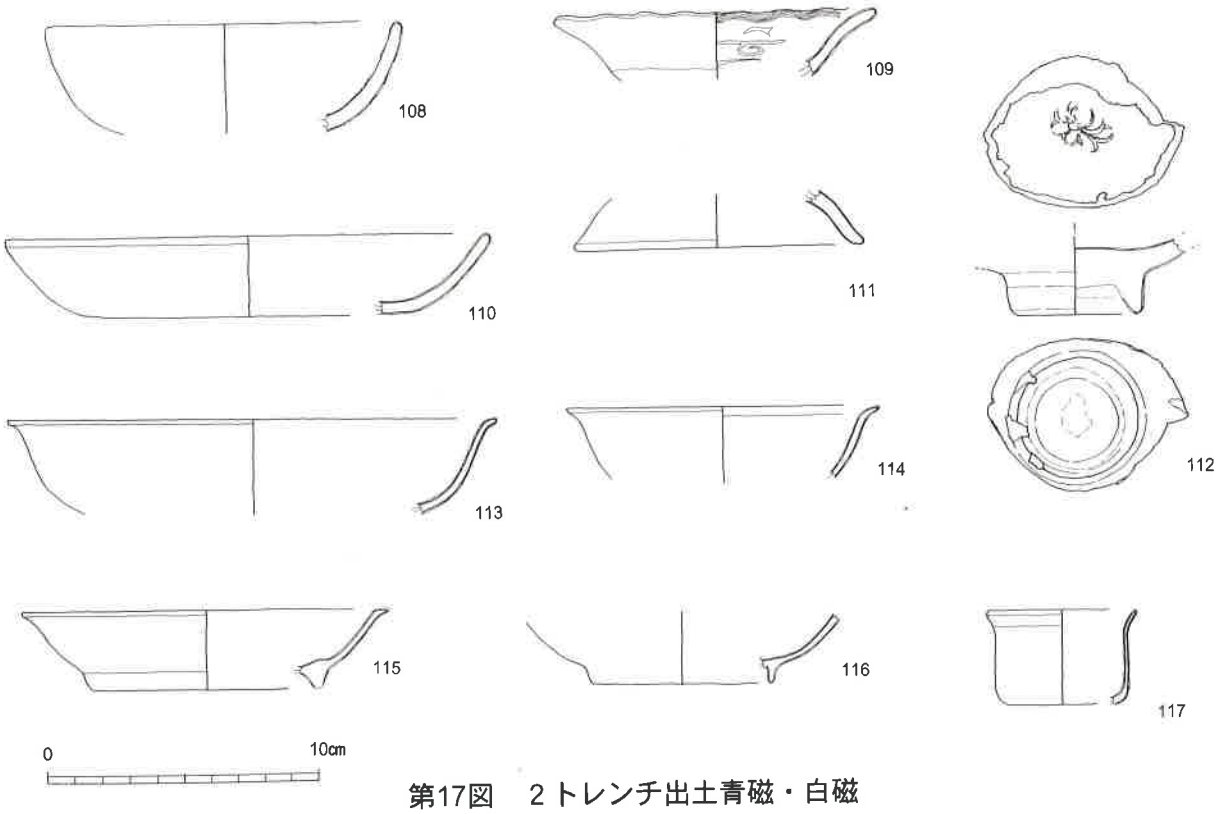


第15図　2トレンチ掘立柱建物跡（1号）

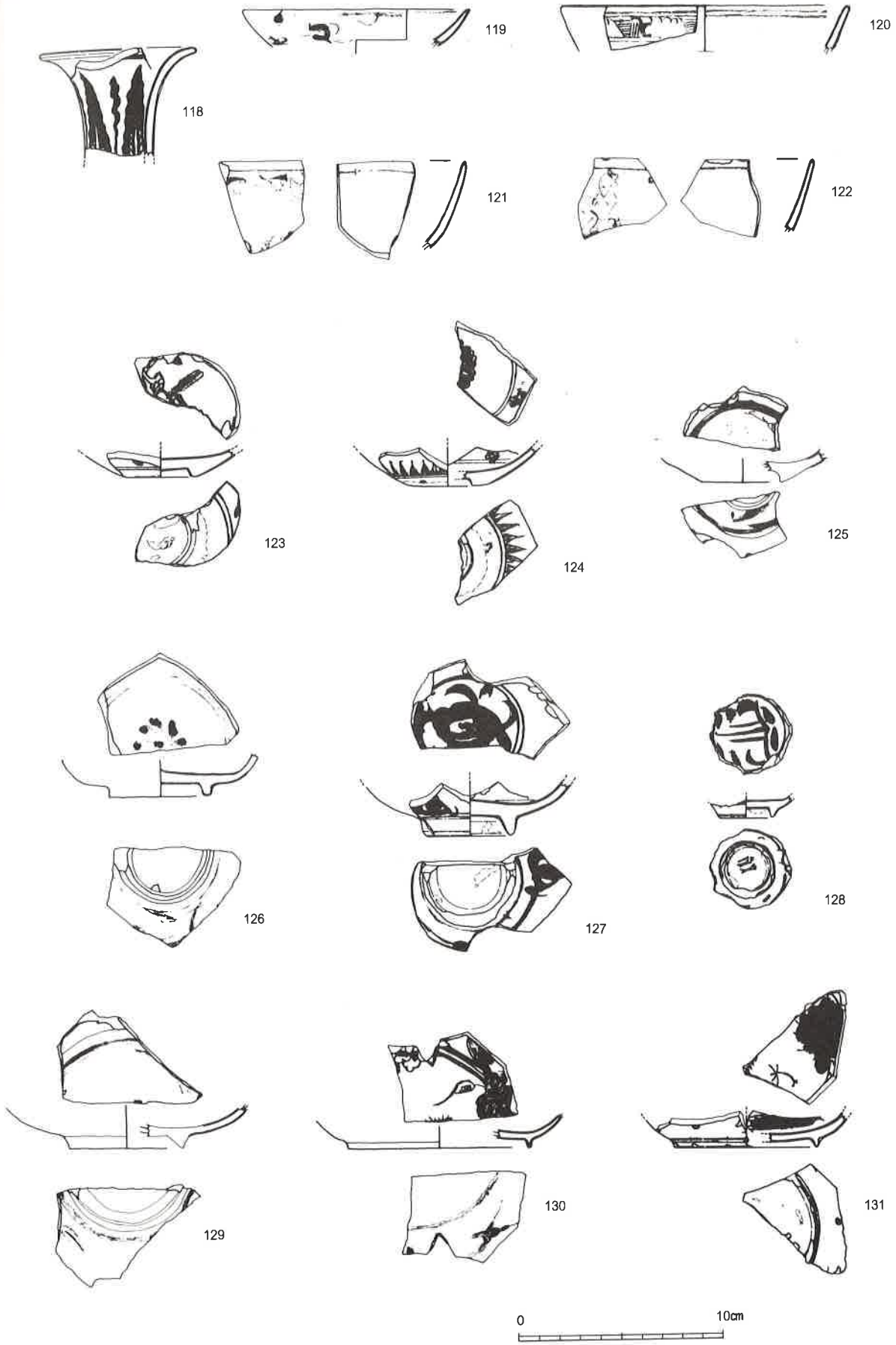
や、大甕・火舎・黒褐釉陶器の破片等、多様な生活具が出土している。



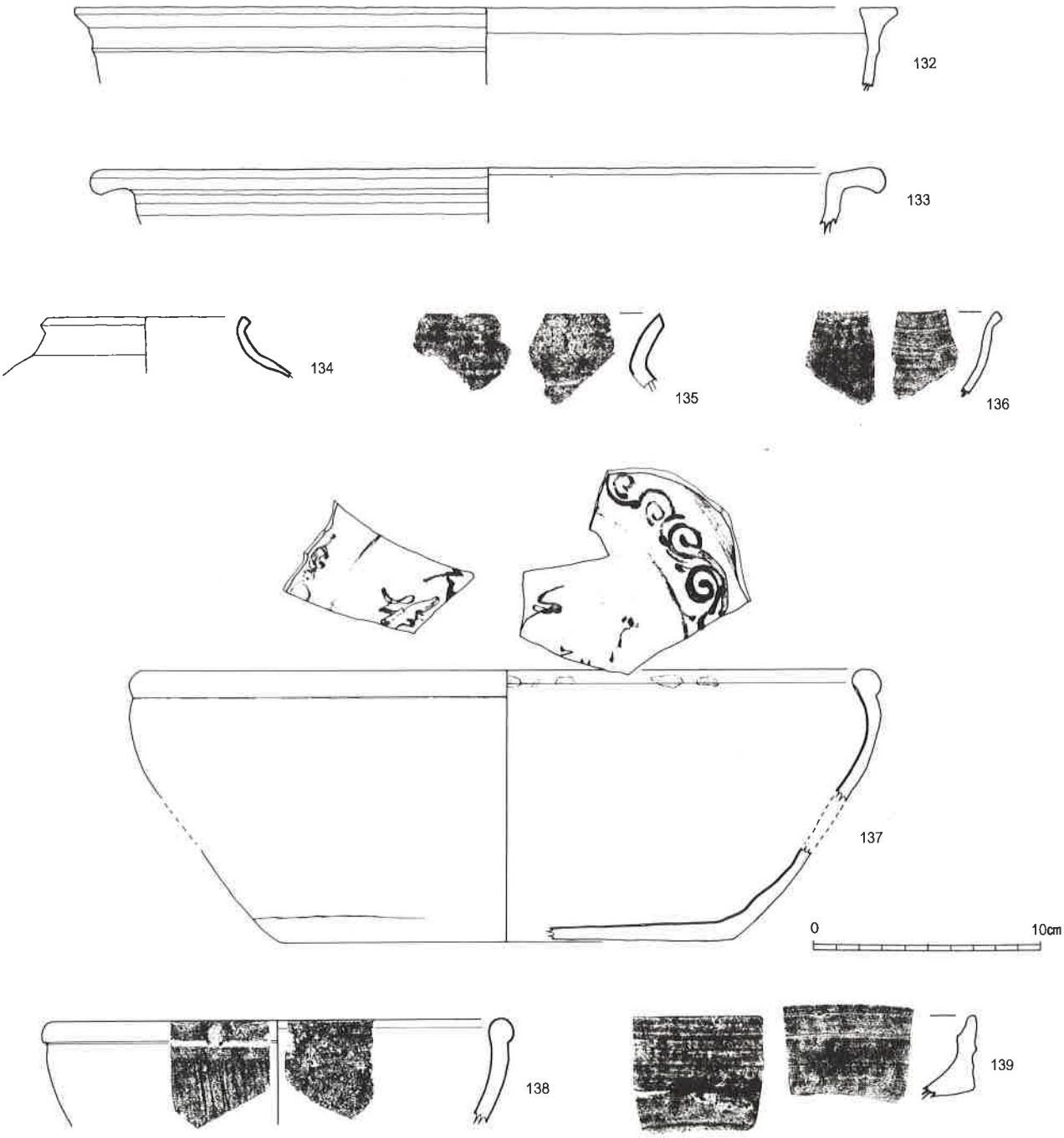
第16図　２トレンチ掘立柱建物跡（２号・３号）



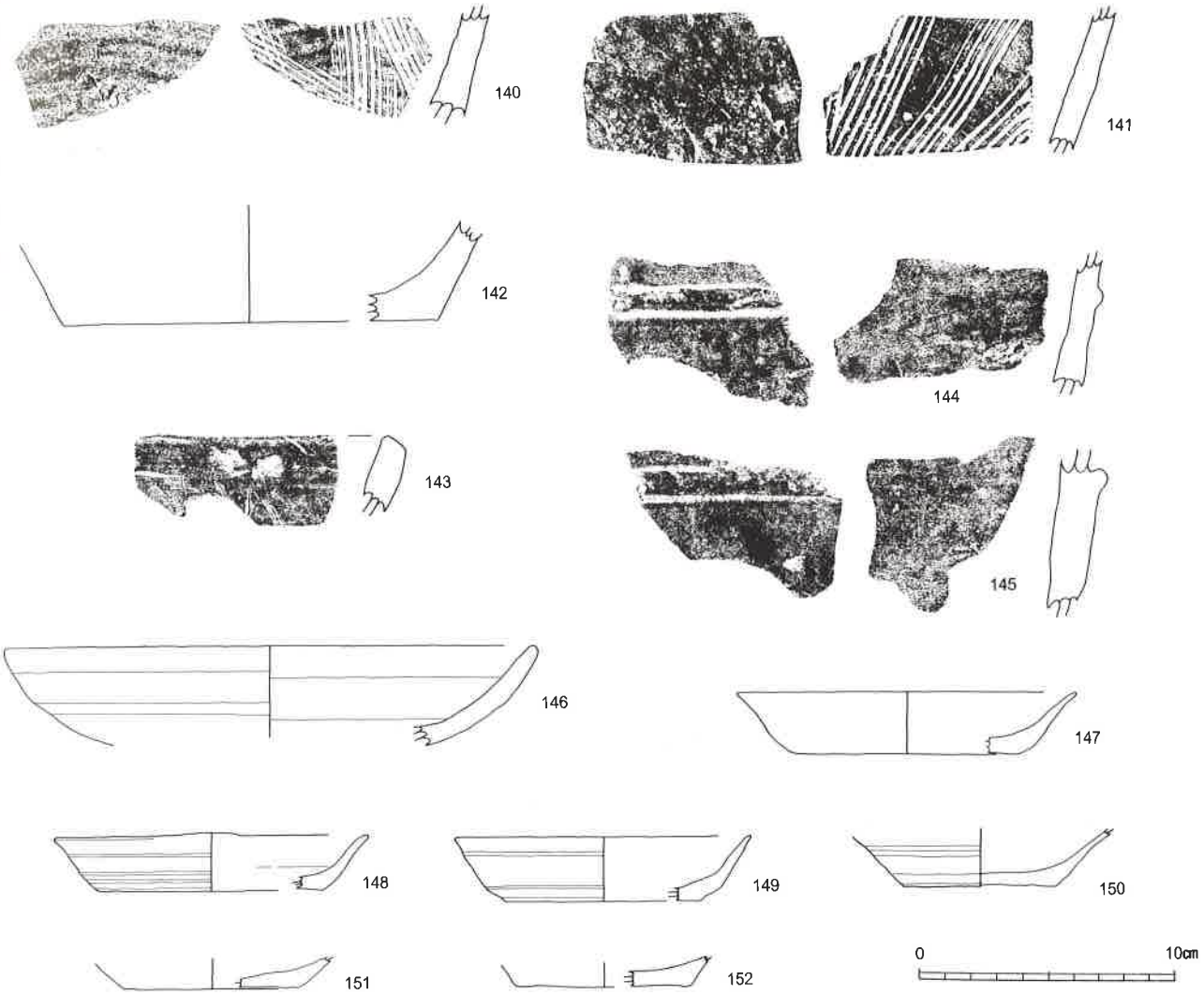
第17図　２トレンチ出土青磁・白磁



第18図　２トレンチ出土染付



第19図　２トレンチ出土陶器・その他



第20図　２トレンチ出土土師器

3）3トレンチの調査（第21図）

曲輪1と曲輪2の間に3×3mで設定した。シラスの崩土で埋まっていることを予測して、1.5mは重機で掘り下げ、その後人力で掘り下げた。2.7mで、遺構底面に達した。通常は何度も崩壊して、その度平坦としていったと考えられるから、1.5mほどは平行堆積している。砂層とシラスの互層の水成層があちこちに入っていて、豪雨時など水の流れる場所であったことが伺われる。空堀については、現在1m弱の深さは、築城時には左側の掘り込み線から2mほどと考えられる。①～③は薬研堀で、④～⑥が箱堀状になっており、①～③の近接した時期は空堀として使用され、その後は④～⑥は両断崖に挟まれて武者走りのように使用されたものと考えられる。大きく2時期の改修があったことがわかる。

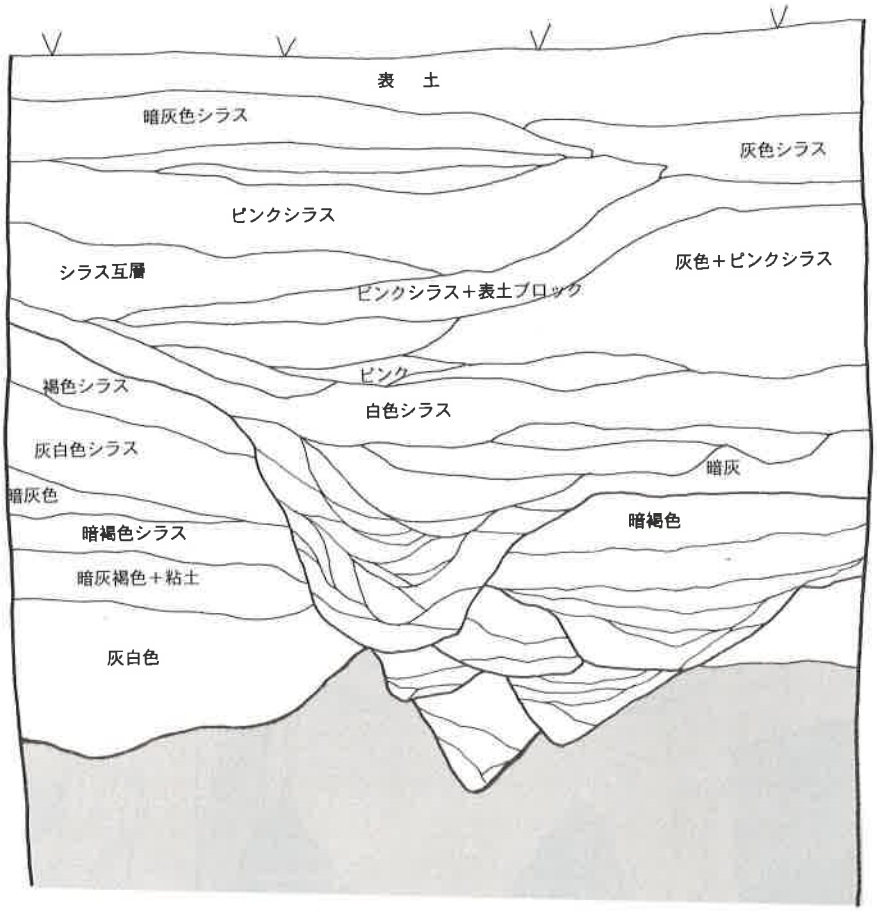
4）4トレンチの調査（図版16）

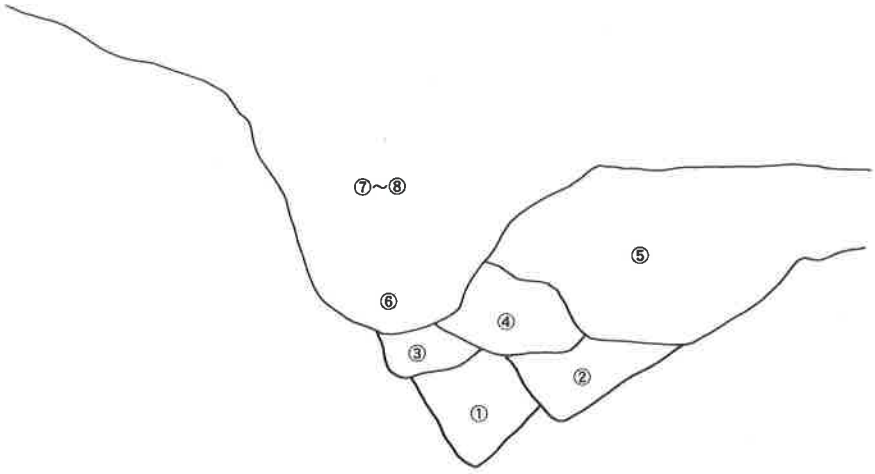
4トレンチは、曲輪3と曲輪4の間に2×2mで設定した。表土より約1mは撹乱されており、その下で平行堆積している。掘削幅が短かったためか立ち上がりを明確に把握できなかった可能性がある。しかしながら曲輪3と曲輪4の間は、西側で急坂となって落ち込んでおり、曲輪4の桝形状のbに通じる通路が主要な機能であって、立ち上がりはない可能性もある。空堀としては既に切り通されているだけで十分であって、さらに掘り下げることは要しなかったものと考えられる。2mほど下に、炭化物の層があり、その下は基盤層である。これについては城の構築時に、不要な立木等を伐採して、空堀の間で焼却処分する例がある（上田耕氏の御教示）そうである。

5）5トレンチの調査（第22図～第23図）

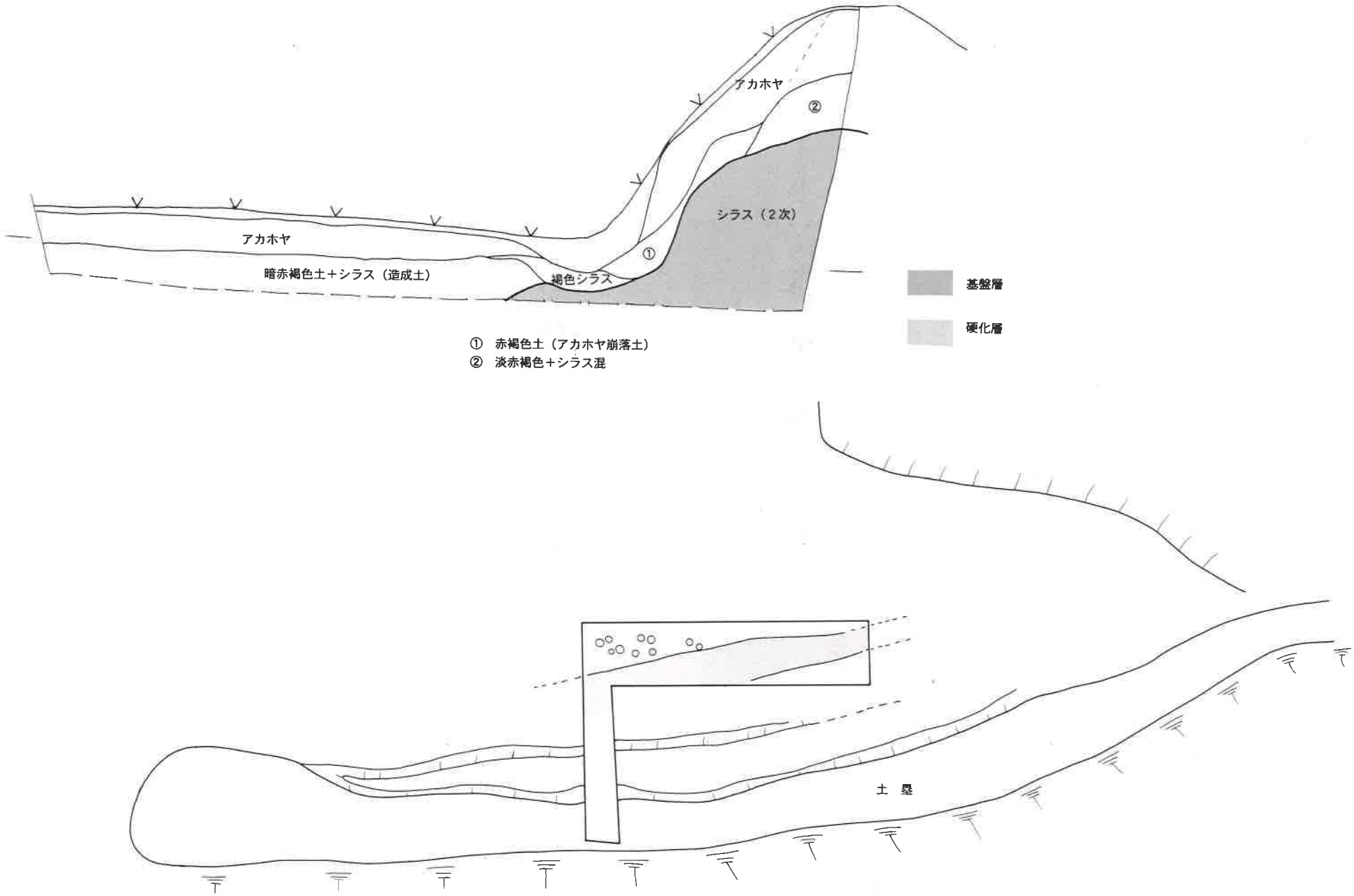
5トレンチは曲輪1に南北方向に2×5mで設定した。他の曲輪にくらべると1mをこえて遺構検出面に達し、表土が厚かった。表土層は褐色のシラス層で、遺物は表土層上部から数は少ないが出土する（図版17）が、その後は遺物量が減って、遺構面に達する。このトレンチの南側末端から、土塁方向へさらにトレンチを直角に拡張した。その土層図が上図であるが、アカホヤ混じりの撹乱した層の下が造成土として把握された。その後の調査と勘案すると、この褐色シラス層は造成土であった可能性が強く、曲輪1の南側から北側へと移動したシラスによって埋められたものと考えられる。検出した遺構面の時期より後に、城の改修を行ったことを示している。遺構は土塁に沿った硬化面と柱穴跡を検出した。

153・154は青磁で、壷と小坏と考えられる。155・156は漳州窯系のものと考えられ、外面に唐草文が書かれる。157は、小野氏分類の皿E群にあたり、四方襷文と見込みに花葉文が書かれる。158は小野氏分類の皿B1群で見込みに玉取獅子文が書かれる。159・160は染付の蓋である。161・162は青釉陶器で、花弁状口縁をなす。163は東播磨系の摺鉢と思われるが、口縁部の内面に2条の沈線が波状に描かれる特徴がある。164は火舎の破片である。165は陶器の口縁部、166は鉄砲の弾である。このほかに鉄滓が5塊ほど出土している。全体に遺物量が少ない。

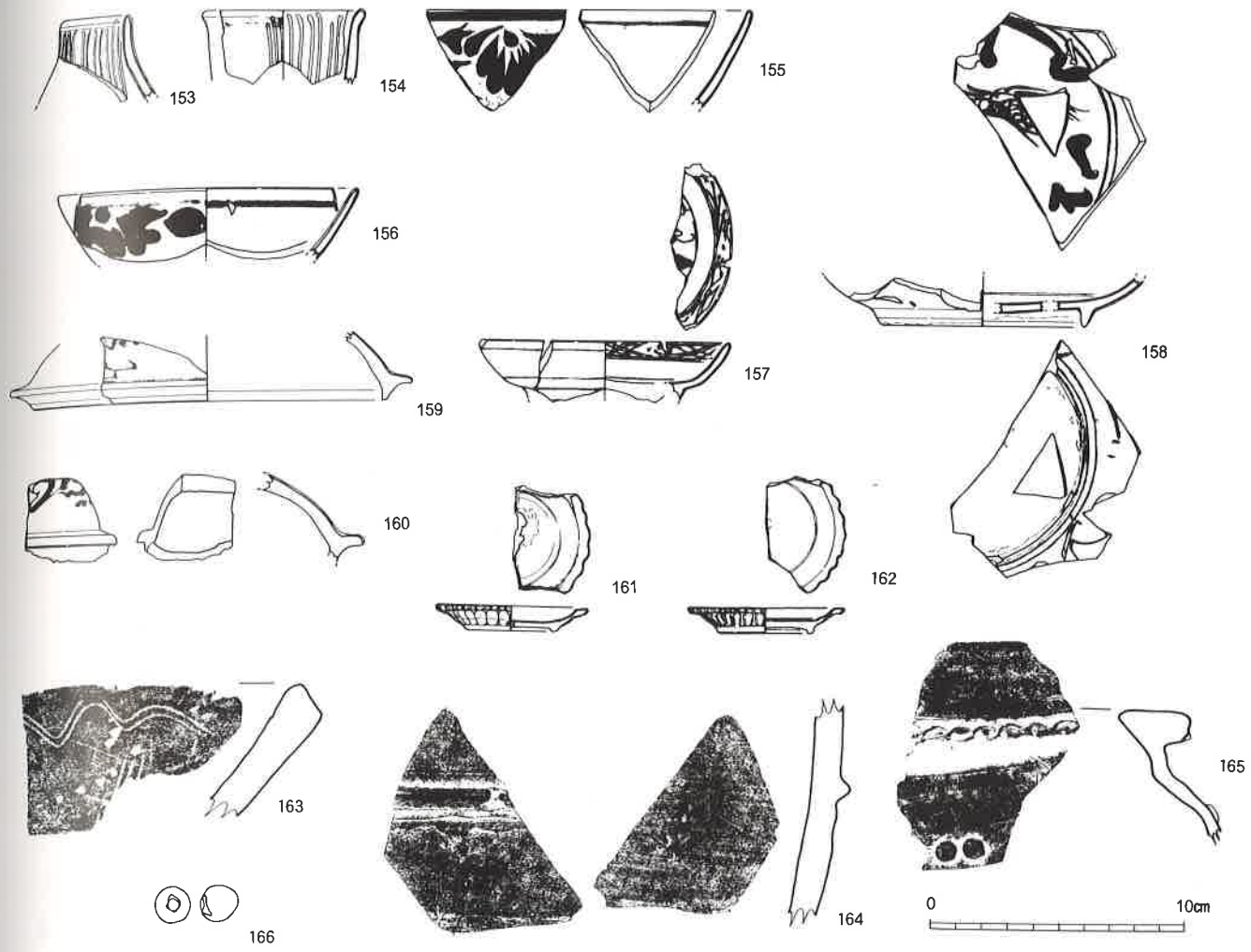




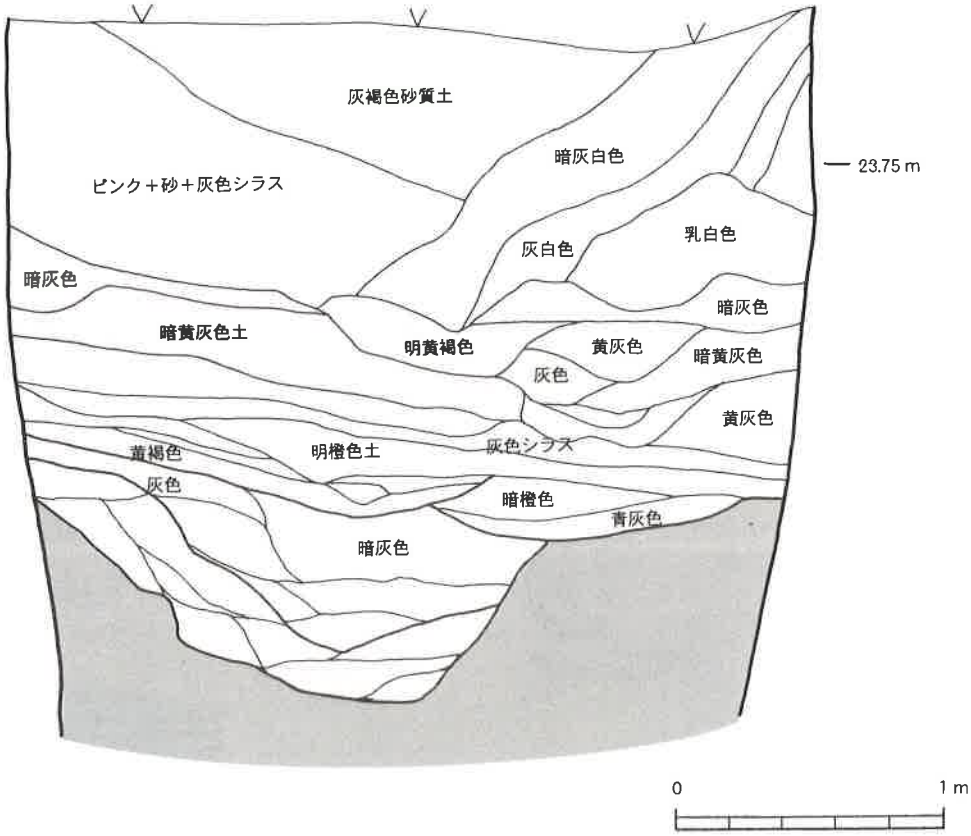
第21図　3トレンチ空堀跡土層断面図



第22図　5トレンチ遺溝検出状況及び土墨部分土層断面図



第23図　５トレンチ出土遺物



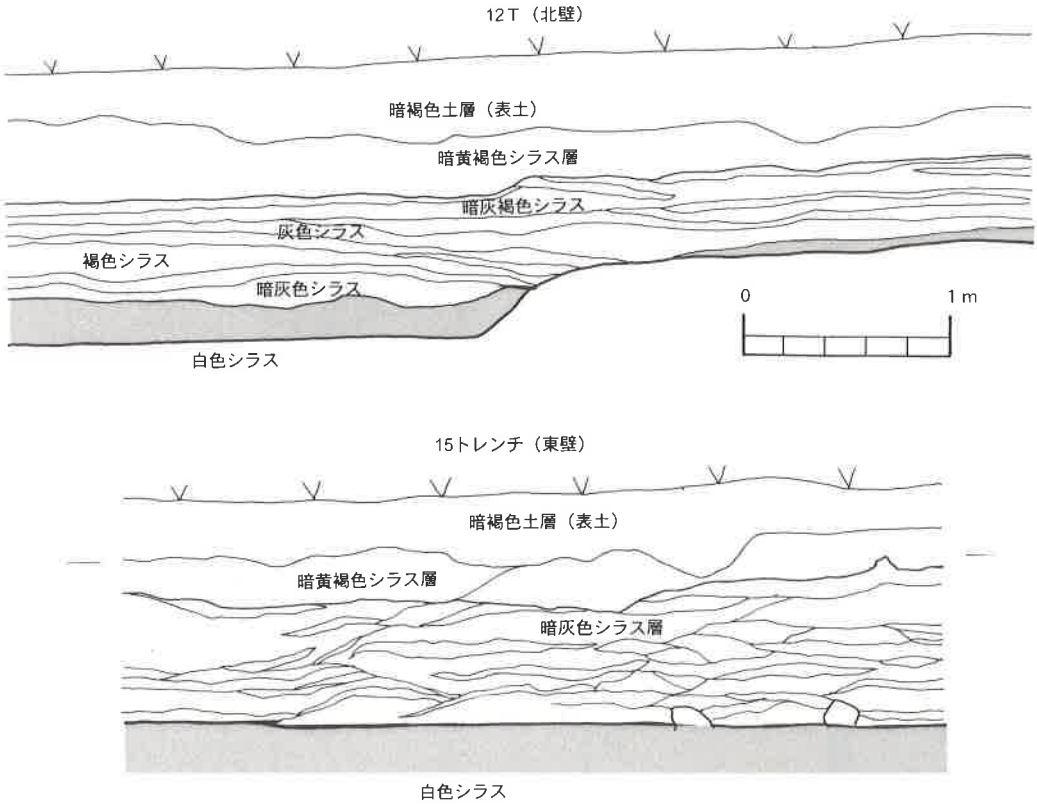
第24図　9トレンチ土層断面図（空堀部）

6）9トレンチの調査（第24図）

曲輪1と曲輪3の間で、曲輪Cとつながる位置に9トレンチを3×3mで設定した。この9トレンチの設定した場所は、北側で曲輪Cと約2mの段差がつく。第24図がその土層断面図である。上には曲輪3方向からの崩土が流れ込んでいる。また砂とシラスの互層の層が中間部分に集中している。崩土により埋まるまでは、流路であった。最下面に掘り込みがある。箱掘り状で、埋没してもう一度「V」字形に掘り込まれいる。築城時に、現在より2m下がった位置に、連絡路があり、より各曲輪間の空堀の機能は強化されていたことがわかる。

7）10トレンチの調査（図版18）

帯曲輪gの最高所に、土塁断面を一部切るように1.5×4mで設定した。その結果帯曲輪gの土塁についてもシラス山を削り出して構築されたことがわかった。また拳大の礫のつまった土穴が1基検出されたが、性格は不明である。表土より約20㎝で遺構面に達する。



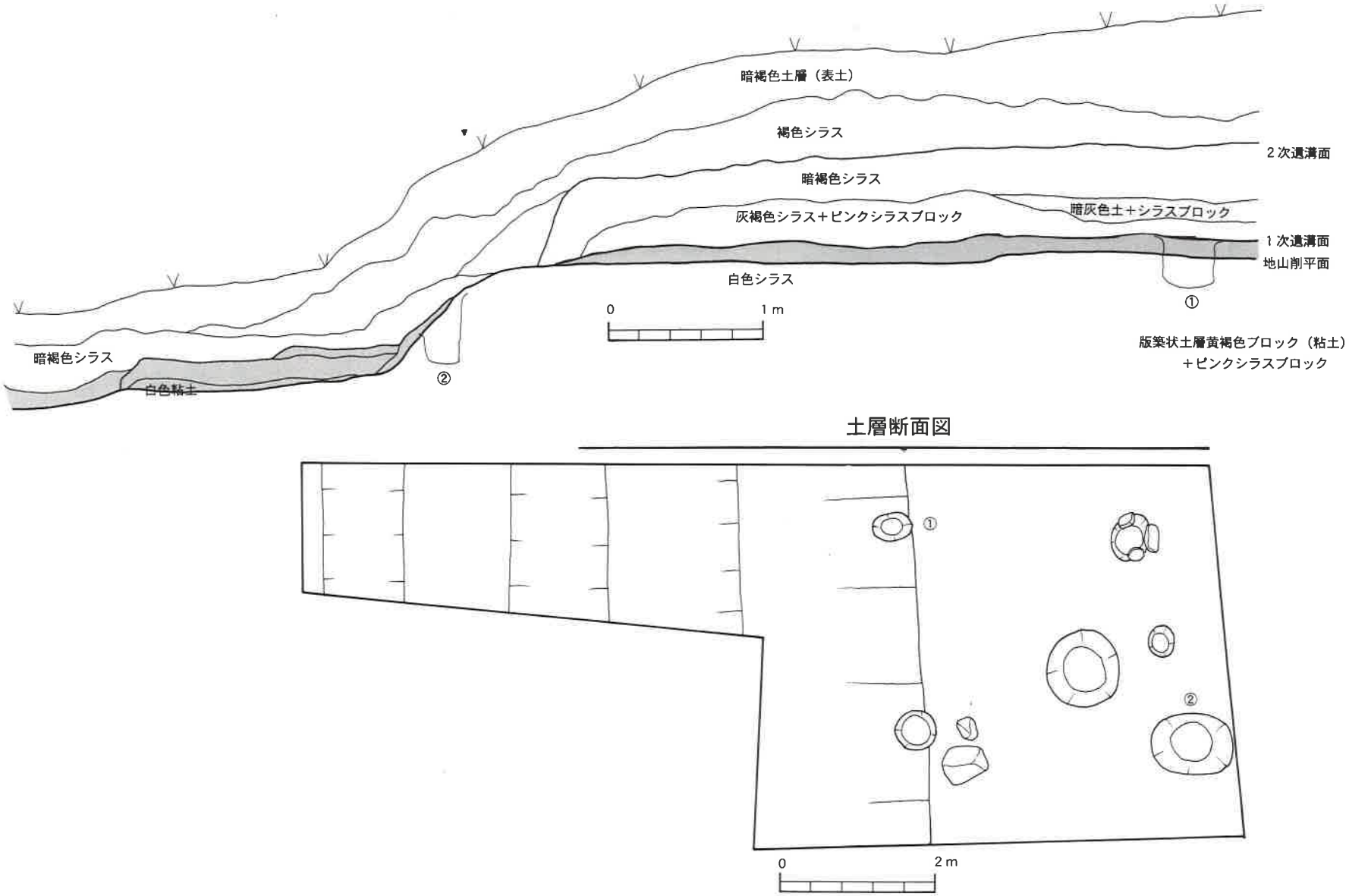
第25図　12トレンチ・15トレンチ土層断面図

8）12トレンチの調査（第25図）

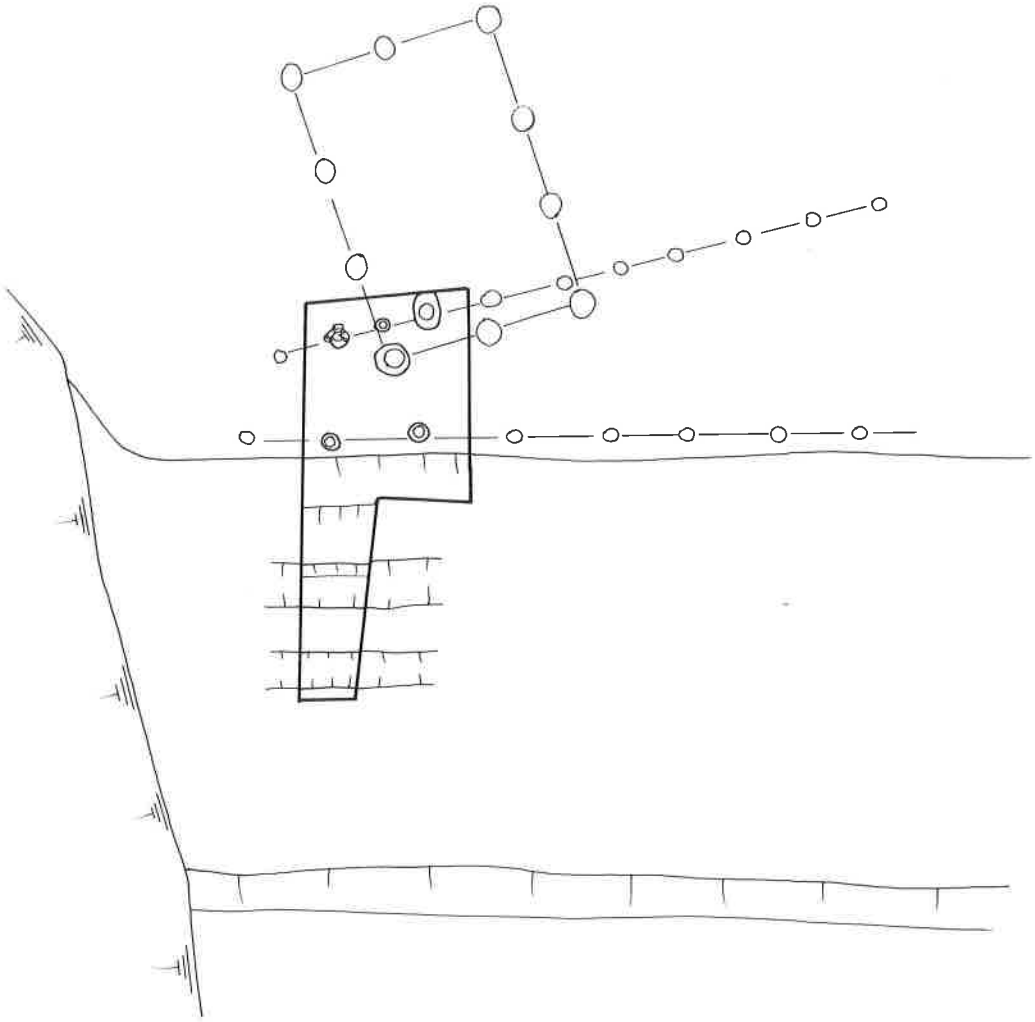
12トレンチは帯曲輪ｇの上段の中心部分に1.5×5ｍで設定した。10・11トレンチは表土下ですぐに遺構面ないし基盤層を検出しており、重機がはいらないためもあって、当初から人力で、遺構検出に努めながら掘り下げた。約1ｍで、基盤の白色シラス層に達した。この基盤層は柱穴など遺構は検出できなかった。第25図の上は12トレンチの土層断面図である。基盤層でもう一段あり、その上に粘土質の表土混じりのシラスと白色シラスが互層になっていることがわかる。12トレンチが傾斜方向の東西の断面にあたり、15トレンチが傾斜方向の横断面にあたる。造成時に一定の土（もっこの量）が楕円形に近い形で、傾斜方向に引かれたことが伺われる。造成は版築を意識していたことがわかる。その造成によって、造成前の段が失われ、より一枚の平坦面がひろくなっていった。その土は曲輪1ないしは11トレンチの北側を削り込んで、下の方へ排土していったと考えられ、これは同時に帯曲輪ｇの東側の土塁をも高くしたことになる。

9）13トレンチ（第26図・第27図・第28図）

13トレンチは、帯曲輪ｇの南北の段の部分を、直行する形で東西方向に設定した。当初1.5×4ｍで設定したが、遺構を検出し、また段の構築状況を把握するため、長さ9ｍに延ばし、段上も幅3ｍとした。表土下で、褐色シラス層がでたため、ここも慎重に掘り下げたが、遺構面は表土から1.4ｍほど下で検出された。第26図は遺構配置図と土層断面図である。小さな柱穴跡が段沿いにあり、規模のやや大きな柱穴跡がその東側にある。土層断面図では、互層状況が今ひとつ不明確であったものの、検出した遺構面の約60㎝上に、別の遺構面があり段をつくっている。基盤層から伺える、かってあった段を高くしているということができる。第27図が検出した遺構から推定した復元図である。段と柵で前面からに備え、浅い溝状の遺構は桝形ａに向かう。



第26図　13トレンチ遺溝配置図及び土層断面図



第27図　13トレンチ柱穴跡復元想定図

167は東播系の摺鉢で、摩滅している。このほかに遺構面から16世紀の染付の破片が出土している。

10）14トレンチ（第29図）

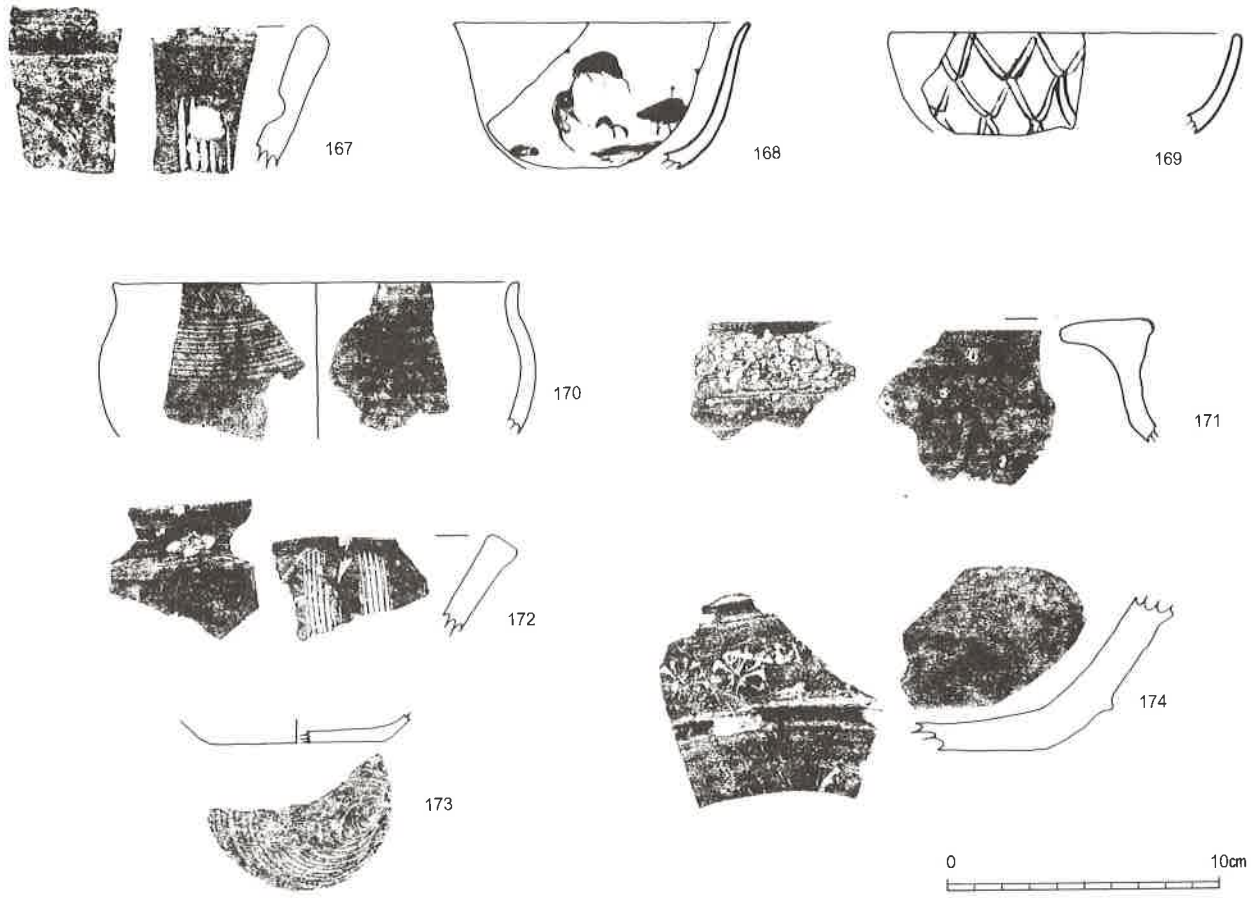
14トレンチは、曲輪0と曲輪1の間で、曲輪Fからの進入口にあたり、出入り口や門などの存在を想定して2×6で設定した。上層から50㎝ほどはスコップで除去して、その後慎重に掘り下げたところ、トレンチの西側に曲輪0の出入り口の桝形への進入路と考える遺構を検出した。第29図が14トレンチの土層断面図であるが、U字状に掘り込まれており、北側の断面では階段状の立ち上がりが観察できる。桝形に入る前に一端降りて、さらに急坂をあがるようにつくられている。ここでも50㎝ほど造成土がのっており、その後の改修のあとが伺われる。

遺物は表土層からの出土で、168の染付の碗が出土している。近世のものと考える。

11）15トレンチ（第25図・第28図）

15トレンチは曲輪gの中段に南北に1.5×4mで設定した。第25図にあったように、表土下でシラスと暗褐色の粘質の強い層とが互層状態で検出される。1.1mで基盤のシラス層が検出され、その面では遺構は検出できなかった。造成の痕跡が確認されたトレンチである。

169が染付の碗、170・171が陶器、172は東播系の摺鉢である。173は土師器坏の底部にあたる。174は火舎の底部である。

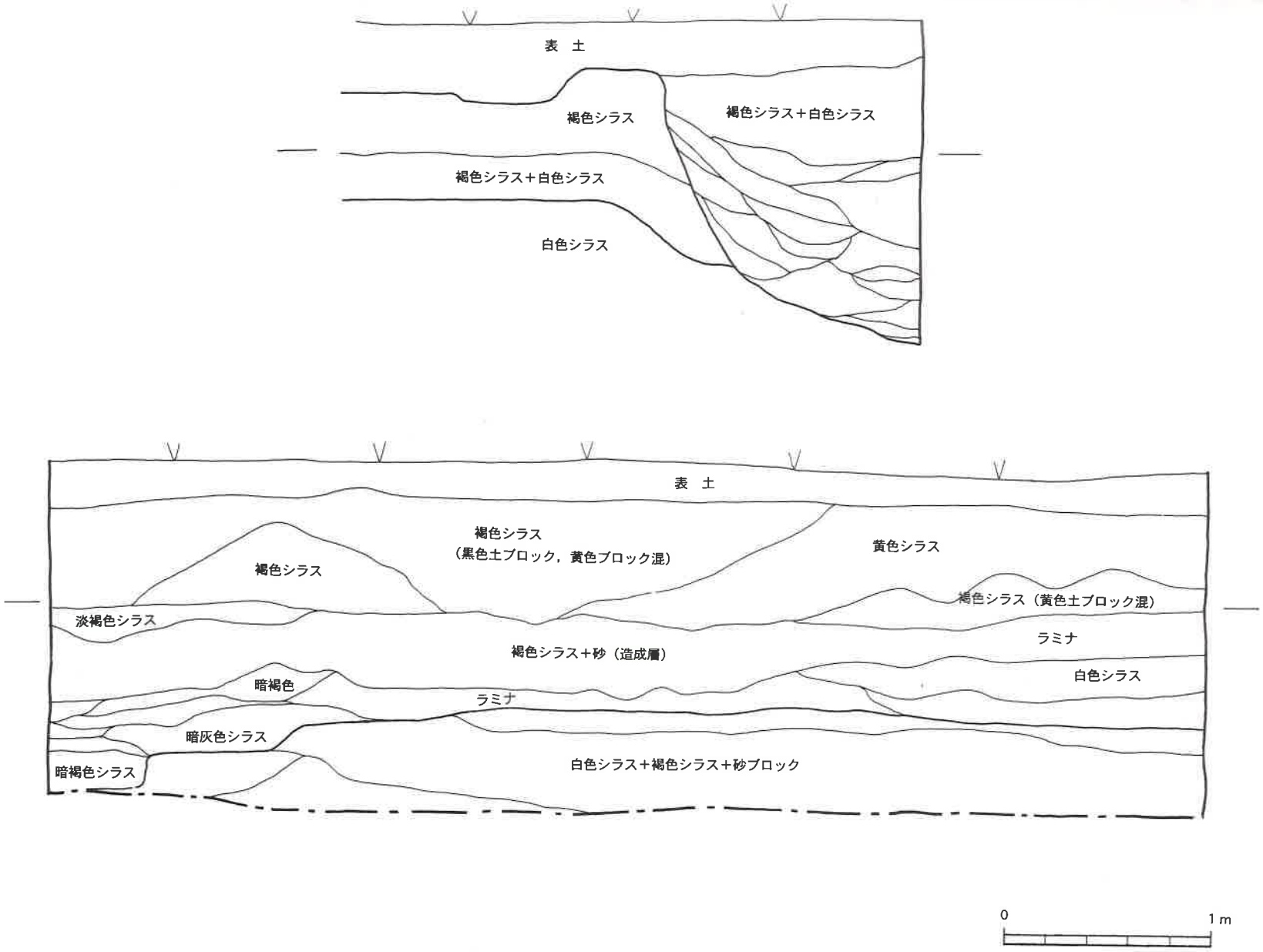


第28図　13・14・15トレンチ出土遺物

12）16トレンチ

曲輪３の南東の土居Ｐとの間に２×２ｍで設定した。現在でも狭い通路であるが、浅い落ち込みが中程にあり、基盤層への掘り込みが西側に観察される。しかし西側は曲輪３が１ｍ弱で立ち上がっていくので、規模の大きな空堀を示すものでなく、連絡通路的な機能のものと考えられる。

以上のように曲輪１・曲輪２・曲輪３では掘立柱建物跡の柱穴が検出され、曲輪１と曲輪２の間は薬研堀がはいり、曲輪１と曲輪３の間・曲輪３と曲輪４の間や曲輪３と土居Ｐの間は連絡用の浅い箱堀状のものがあった。土塁および土居は基本的に削り出している。各曲輪を分断する空堀は、現在より平均で２ｍ低かった。また曲輪１と帯曲輪ｇでは、城の改修の痕跡が顕著である。また曲輪２と曲輪３においても、築城時か改修時かは不明であるが、切り盛りの痕跡が確認できる。



第29図　14トレンチ土層断面図

第Ⅳ章　まとめ

串木野城跡の現在の曲輪の形成時期については、出土遺物から考えると、小野氏分類の染付碗Ｃ・Ｄ群、染付皿Ｂ１・Ｃ群、白磁皿Ｃ群、青磁無文碗や稜花皿などが出土しており、續氏の設定したⅡ期にあたる15世紀後葉から16世紀前葉を中心としながら、高台内に「天下太平」と書かれた皿Ｂ２類や、白磁の菊花皿などがあり、Ⅲ期のものも一部出土している。Ⅱ期の15世紀後葉から16世紀前葉とⅢ期の16世紀後葉への移り変わりの天文・永禄年間を中心とする。青磁と染付碗Ｂ群などから、15世紀中頃の時期にもうひとつ在城した時期がある考えられる。文明六年（1474）に川上忠塞が串木野城主に任じられるので、この時期の遺物であろう。永禄十一年（1568）の「坂下囲の戦い」を中心に、現在の曲輪が形成され、使用されている。16世紀の前半の天文・永禄年間を中心とするが、16世紀後半から増加する漳州窯系もかなり混在しており、わずかであるが16世紀末の遺物もあることから、16世紀をとおして維持されつづけたものと考えられる。ただし、饅頭心タイプの碗Ｅ群や皿Ｆ群は出土しておらず、城内での多数の武士の居住は1568年をもって終わったとしてよいと考える。李朝の青白磁や陶器は全く見られない。14世紀前後の東播系の摺鉢や青磁碗も出土しており、南北朝時代に串木野城を巡る攻防もしのばれる。遺物については、鉄砲の玉と鉄砲玉を鋳直す際の、るつぼと思われる土師皿が出土した。出土場所は離れており、今後の分析が必要である。19世紀初めの清朝の青花が２点出土している。

主郭の位置については、曲輪１、曲輪２、曲輪３はトレンチの面積が異なっているうえに、遺構についても曲輪２については掘りあげたが、ほかは柱穴は完掘しておらず、検出面のみで埋めもどしている。そのため単純に遺物量の比較はできないし、遺物の組成について同様である。破片数は柱などを掘り上げていないのにもかかわらず曲輪３が多い。曲輪２では青磁・白磁・染付・三彩盤・土師器・すり鉢（備前・東播系）・袋物の陶器・大甕などが出土したが、組成としては青白磁・染付がおおく、食膳器が多い。曲輪３も曲輪２と同様な遺物の他に、土風呂や天目碗の破片などの茶道具や、大甕・火舎の破片等生活具が多い。曲輪１は遺物は少なく、鉄滓が５点出土した。遺構については曲輪２は曲輪３ほど柱穴の規模も大きくなく、密度も薄い。曲輪の位置関係からも曲輪３が主郭として位置付けられる可能性がたかい。川上氏が城主時代は曲輪３が主郭として機能していたものと考えられる。

城郭構築の土木工事について、３トレンチでは６回以上の切り合い関係の中で、大きく２時期の使用が確認される。南北朝期と戦国期のものと考えられる。12～14トレンチの帯曲輪ｇが最終遺構面より上位で再整備されて、土塁を高くし、兵力の増強に対応するための平坦面の造成を行っている。これは５トレンチでも同様の作業が伺われる。中世山城の築城方法を考えるうえで興味深い成果であった。その防御機能をあげる造成は、13トレンチの16世紀後半の遺物を伴う遺構を覆っており、「坂下囲の戦い」より後である。さらに造成面に遺構を検出できず、造成面上面での遺物出土も少ない。これは改修後に実際に使用されることがなかったことをあらわしている。12～14トレンチの帯曲輪ｇが最終遺構面より上位で再整備されて、上田氏の言うように曲輪１が非常に堅固になっている。このころ主郭が曲輪１として再整備されたものである。これは坂下囲の戦い後の緊張状況、例えば豊臣秀吉の九州平定事業（1587）や、関が原の戦いで敗れたのちに備えかは確定できないが、実際に戦いに使用されることはなかった。

新しい日常品が曲輪２から出土しており、これは地頭仮屋との利便性と城下の管理上から、坂下

囲の戦い以後も曲輪２に城番がいた可能性がある。城下を見渡せる場所については、戦乱がなければ、城下である麓方面に目がむく。島津家久が日向佐土原に移され（1579）、ふたたび地頭が配置されてからは、城の管理から便宜上主郭として機能していたため、寛政10年の「古城并古戦場糺帳控」には曲輪２が意識されていたものと解釈したい。防御性や今回の発掘調査からは曲輪２が主郭となりえないと考える。主郭は曲輪３から曲輪１へと変遷し、曲輪２は地頭仮屋で政務することとなって、もっとも城下側に位置していたために主郭とみなされたと結論づけたい。

16世紀の末に、最後の城の改修に手をつけたとしたら、曲輪２と曲輪３の南北方向の溝状遺構もそのときに排水用として掘られた可能性がある。畑地として利用された暗渠との指摘もあるが、元来水捌けのいいシラス台地で、潅漑の要があるところに矛盾する。また近世以降の遺物を全く検出しなかった。また調査の概要で述べたように、最近まで余人を入らせなかったところであり、畑地として耕作したこともないという、地主さんたちの言もある。

以上のように、発掘調査面積は大きくなかったが、その成果は着実に上がったものと考える。今後は地元の歴史公園として整備されるとのことである。シラス台地に築かれた山城は、造成は削りやすいため比較的簡単であった。しかしシラスは周知のとおり、水に弱く崩落しやすい。このため城跡は少しずつ崩落し、曲輪も形状が変化していく。このため整備に際しては、設計から研究が必要である。歴史的遺産であるが、市民の憩いの場としての活用も重要であり、防災上の問題もある。こうしたことから行政の各領域をふくめて総合的に検討する委員会組織やプロジェクトチームが必要である。

現在の中世山城跡破壊の最大の要因はシラス採取とその後の宅地開発で、民間の事業が多いため個別に把握できず、虫食い状態で壊滅していっている。幸いにして串木野城跡は、まだこうした開発はほとんどなされていないが、歴史公園として実際に整備に手がつくまでは、こうした危険性を常にはらんでいる。行政が早急に具体的に動いていかなければなるまい。

付章として、上田氏から玉稿をいただいた。上田氏からは串木野城の縄張りについて詳述していただいた。串木野城をめぐる歴史が具体的に思い浮かび、イメージできるのではなかろうか。

最後に、串木野城跡を守ってこられた方々に敬意を表し、また発掘作業にたずさわれた方々に感謝したい。ありがとうございました。

参考文献

串木野市郷土史編集委員会　1984『串木野郷土史　補遺改訂版』串木野市教育委員会
森田勉　1982「14～16世紀白磁の分類」『貿易陶磁研究』Ｎｏ２
小野正敏　1982「14～16世紀染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』Ｎｏ２
森村健一　1994「３、福建省　州窯系陶磁器（スワトウ・ウエア）について」『大阪城跡の発掘調査』４
續伸一郎　1995「中世後期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

付　章　串木野城の城域と構成

上　田　　耕
（知覧町教育委員会）

1．はじめに

県内には900ヶ所近い中世城郭が存在している。中でも知覧城跡が平成５年鹿児島県内では戦後はじめて城郭の国指定史跡となったのを契機として、城に対する興味をおぼえた。たまに訪れる妻の実家の眼前に串木野城があり、帰郷するたびにふらふらと城を散策した。コンパクトな城跡だけあって気軽に現地に足を運ぶことができた。時には城壁をよじ登り、藪の中から現れた土塁や空堀など発見しては感激したものである。

その内、城下の麓集落の中にも良好な土塁や空堀など遺構が残存し、中世の姿を随所に止めていることを知った。ところが、近世に成立した麓集落も今日、随分宅地化が進み武家屋敷や庭園、地割りなど往時の姿を残しているのはわずかとなってきた。風化しつつある地域の歴史を解き明かし、今や風前の灯火となった麓の遺構を後世に伝えていかなければならないと考えた。それにはまず基礎作業として城跡に残った遺構の数々を図化する作業が先決であると感じた（１）。

調査方法は、繁茂した竹林や杉・雑木のすき間を貫き、目測と簡易距離計を利用して、串木野市作成の千分の１地形図に加え、さらに精度の高い串木野市教育委員会作成の五百分の１地形図を参考とした。時には有川孝行氏、橋口亘氏南九州城郭談話会員の協力を得た。このような作業と共に、地名や伝承、古い記録、発掘調査の成果等々も併せながら当時の串木野城とそれを取りまく地域社会の在り方を探ることができればと考える。

縄張図の作図は、自分自身、はじめての挑戦であり、また、地域の歴史・伝承に関しても調査不足で、不十分な点が多々あると考えるが、多くの方々のご鞭撻・ご叱正をお願いしたい。

2．南九州の城の特徴

南九州には、シラス台地の縁辺部を縦横に巨大な空堀や谷で幾つにも分断し、丘陵状の曲輪を形成している城が多くみられる。一見まとまってみえるが、内部は各曲輪が大空堀で隔絶され、連絡は空堀底を通路として各々の曲輪に入るようになっている。それぞれの城には今城とか蔵之城・新城などの名称が付けられ独立性が強い。しかも、串間城や都之城、高城、川田城、知覧城のように幅広い台地を縦横に仕切っていくタイプでは、どれが主郭かつかめない。このような城に関して村田修三氏は、時代が降るにつれて台地の奥へ切り込んでいき、その都度主郭の位置も変わるのか、あるいはそもそも主郭を特定する必要もないような性格の城だったのかと論じている（村田1987）。このように特徴的な縄張プランを持つ。

このような城のプランは、南九州型（村田1987）とか群郭式（八巻1991）、南九州館屋敷型（千田1990）等と称されている。これらは浪岡城など日本列島東北部の城と縄張が類似していることも指摘されている（村田1987）。近年では北郷泰道氏が、丘陵立地型の城館に対し、穂北城（西都市）を典型とした台地立地型の城館として分類（北郷1994）。さらに、桒畑光博氏は都城盆地を舞台とした中世城館の立地や城館の規模、構造をＡ～Ｄに類型化し、主要曲輪が20万㎡をこえる都之城や安永城など大規模城郭をＡ１類として分類、台地端に占地する拠点的城郭であるＡ類は防御面に優れているだけでなく、政庁機能や住居機能も兼ね備えていたと評価している（桒畑1998）。

これらの城郭は、千田嘉博氏によると自然地形を利用して不整形に一定地域を囲い込む曲輪の集合体として形成されたのが大きな特徴で、曲輪ごとに館主が存在し、一貫した求心構造をもたない館屋敷型の城郭であった。このような城郭プランは、曲輪間の階層性が脆弱で求心性の弱い並立的な構造であるとされ、このことは、領主と家臣との力関係が緩やかに展開されることを物語っており、この地域の権力構造が城郭にも反映されていると指摘する（千田1993）。さらに、南九州館屋敷型城郭は、曲輪内部につくられた屋敷が集合して構成されていた。つまり、直属家臣や一族が居住する城下町凝集域を城郭に含んで構成していたと考え、天文15（1546）年に南薩の頴娃城を訪ねたＪ．アルバレスの日本報告の記述からも南九州のこられの城郭は、従来同タイプとしてきた東北の館屋敷型城郭と曲輪の機能が異なることには注意しておく必要があると指摘している（千田2000）。

３．串木野城の構成

串木野城は串木野市上名字城之元一帯に所在する。

ここでは、串木野城とそれを取りまく周辺の地名、伝承、史跡、文献、遺構を通して城の構成を考えてみることにする。

さて、串木野城も張り出したシラス台地の縁辺を分断し、巨大な空堀を築き独立性の高い一連の南九州の特徴を有する城郭である。約15ｍの空堀に囲まれた主要な５つの曲輪群からなり、その曲輪の東西南北に付随して添曲輪Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ等が配置されている。どれが主郭かはっきりしない。Ｆは近世の地頭仮屋跡の場所である。すでに一帯は宅地化が進み当時をしのぶ面影はないが、消滅したＡ曲輪から主要曲輪１・２によって防御された重要な添曲輪と見なすことができる。

さらに曲輪Ｆの仮屋の肝付どん宅から南側の曲輪Ｂへは隧道が存在しており、第二次世界大戦以前からあったと伝えられ、近年まで利用されていたという。中世からの遺構であるとしたら特質される。

曲輪まで「亀ヶ城　三方は田、一方は野久尾」と元禄12年（1699）編纂の「他郷境縄引帳」(2)にも記載されているように、明治37年の県道冠岳・市比野線開通以前は、７のセゲン飯田どん宅の南側には台地がつながっていたとされる。麓公民館発行の「明治期の住居地図」『共励斎百年記念誌』(1979)には、８の場所から７の曲輪の脇まで通じる道が記載されている。加えて８の台地と同様、７の曲輪は地籍図では字北原に含まれていることからも、かつてここが台地続きだった傍証となろう。つまり、縄引帳にも記載のある野久尾にあたる(3)。近世の串木野麓は内村郷・西之口郷・麓郷・原郷の４つの郷（麓４郷）からなり、うち原郷は南側台地縁辺一帯を指している。近世末、この地域に在住していた郷士の石高をみると、30石をこえる家が原郷で２軒、内村郷で３軒、西ノ口郷で４軒、そして麓郷で７軒ある（『串木野士族明細帳控』）。これをみてもこの場所には有力な武士達が在住していたことがわかる。これが、中世以来の家臣団の配置と関係があるかどうかは定かでないが、空堀や土塁の遺構の存在を考慮すると、中世には城の曲輪の一つとして使用されていたことは確実である。８と９の間には明瞭な空堀が残っており、９の東側には土塁も築かれている。そして、共励斉（現麓公民館）の場所は、すでに削平されて以前の地形を留めていないが、かつてはここにも小規模な曲輪のあったことが想定できる。

今日残る地籍図に基づいて、字「城之元」（しろんもと）の行政範囲を点線で図中に表示したが、大方往時の城の主要な範囲とみてさしつかいないと考える。

元禄12年『他郷境縄引帳』には、「城内水有り、城高さ　5間程（約10ｍ）亀ヶ城外曲輪大手口より縄引き始右串木野亀ヶ城大手ノ口取合の本迄縄引留　間数合　619間（約112000㎡）町10町19間・・」とあり、点線で示した地籍図字「城之元」の範囲とほぼ大差ないものと考えられる。この中で記述されている外曲輪の大手口と亀ヶ城大手口とはいったいどの箇所を指しているのか判然としないが、ここで述べられている外曲輪は、当城の添曲輪Ｆ・Ｂ・Ｄ・Ｇあるいは東側Ｒ一帯を指していたのではないだろうか。しかし、中心曲輪群の北側には６・Ｑ・Ｍの曲輪が、南側には７～９の曲輪が築かれており、実際は、これらが外曲輪として機能を果たしていたと考える。縄引帳の記述よりも城域はさらに拡大する。

一つ気になるのが、南方神社のある曲輪５の北東、五反田川の向こう岸である。字「城之元」の行政ラインがここまで延びていることである。五反田川は、串木野城における最も外側の防衛ラインであるが、その川が大きく蛇行するところを城内に取り込んでいる。この地点に城下へ水を引くために必要な取水口の存在が想定できる。城の東側にあるｐの用水路や西ノ口の用水路は、このあたりから取水している。そして現在も用水路として重要な役割を果たしている。それに串木野城は、平江の五反田川河口からわずか約２㎞しか離れていない。もちろん海上を通じて物資供給のあったことを考慮しなければならないが、この地点に、船着き場のような施設があった可能性も想定できよう。すなわち曲輪５と下位の曲輪が水の手曲輪的な機能を備えていたのだろうか。それだけに見逃せない重要な場所だったに違いない。

南方神社のある主要曲輪の一つ５は、南北約50ｍ、東西約25ｍの長方形状をなし、北に高さ約1.20ｍあまりの土塁を残し、周囲にＧの添曲輪を、その下段にはＬの曲輪を配置している。曲輪ＧとＬを下位の曲輪として結びつけることによって、曲輪５を格式の高いものに仕上げている。そして、Ｅの曲輪の間には深い空堀で区切られ、独立性な曲輪となっている。曲輪の西側は大きく滑落し、しかも神社に通じる階段のため情報は大きく撹乱されている。そのため虎口の有無はわからない。曲輪の北側土塁の角ｊは突出し、朝鮮半島や中国、琉球の城にみられるような「雉城」に形態が類似したものがみられる。機能は異なるかもしれないが、これは、栗野城の研屋敷、人吉城、恒吉城など南九州の拠点的な城郭の一郭でも類似したものが見られる。

『三国名勝図会』に「摩利支天堂　當社の庭にあり」と記されているように、かつて南方神社の境内には、摩利支天像が祀ってあったことがわかる。摩利支天とは、念ずれば一切の災いから免れられるという仏である。サンスクリットの武士の守護神として崇められた神様で、戦国時代の武士の守護神になっていた。

戦国期の島津氏の合戦において修験者が重要な役割を果たしたことはすでに松永敦氏などの研究で知られるが、陣取りまたは築城にあたり、まず着手しなければならなかったのは、鍬初めと軍神勧請で、この軍神勧請には摩利支天が祀られることが多く、その作法は、修験者の役割りだったという（松永1993）。

文禄元年（1592）、朝鮮の役に島津義久が肥前の名護屋城に赴く途中、串木野に留まり、この神社（曲輪５）に詣でて順風を祈り、法楽の為に和歌を献詠されている（『三国名勝図会』）のも興味深い。

修験者の多くのが陣の設営、軍神勧請、方角の占い、戦死者の処理などに携わっていた（松永1993）、このような記録等から推察すると、城郭内における曲輪の位置づけや機能を探る手がかりとなる。曲輪５については、今後の発掘調査において、地鎮・鎮壇その他の祭儀にかかわる出土遺物の発見

など大いに期待がかかる。

ところで、中心曲輪群の一つ曲輪２と３に入城するためには、今日、奥田栄穂氏（通称：諏訪下ン入来どん）宅の武家門前から進入できる。しかし、２の曲輪との土居Ｐの間の空堀底に入る手前には土塁があり、枡形状の武者溜りｉで守備されている。そこを通りぬけ空堀底を駆けあがると曲輪３の東南角ｅに阻まれ、二手に分散させるようになっている。曲輪３の東側空堀を通り、曲輪４の南東角ｆもｅに類似して横矢を利かせている。曲輪２の北東角ｏと曲輪３ｅの間の空堀は、坂で狭小となり２・３の曲輪へ進入し難いように築かれており、ここに城門ないしは柵などを配置したと想定される。曲輪３の南側には、正方形の枡形状の窪みｃが設けられている。ここにｅを監視できる機能を持たせている。この枡形状の空間は、曲輪４のｂ、曲輪１のａなど当城の主要曲輪群にみられる特徴的な遺構である。これに類似する遺構は、川田氏（日置郡郡山町）の居城、川田城等でも顕著にみられ（有川1999)、虎口空間と考えられている。

曲輪４のｆは、やや高くなっており、櫓台的な施設の可能性も示唆される。通路となる空堀にこの部分が張り出しており横矢が懸かるようになっている。曲輪３のｅも同様である。また、主要曲輪群にはｋ・ｇ・ｄ・ｏなどの張り出しの共通した遺構をもつ。また、曲輪２、ｄの南東角には竪堀が、曲輪３西側角の張り出し部分内側にも竪堀がみられる。

曲輪２には南側に高さ約70㎝ほどの低い土塁が残存しているが、曲輪３・４には痕跡をとどめていない。しかし、曲輪３の北側と曲輪４の西側斜面の一部、それに曲輪２の北側斜面ｏのわずかな部分に乱積みされた石列がある。土砂流出防止のために普請がなされたものと推定する。

曲輪２・３とＥの間には、当城郭最大規模の土居Ｐがある。曲輪２・３の主要曲輪を保護し、樋ノ口（手の口）方面からの敵をくいとめるために力を発揮したものと考える。土居上は武者走となっている。

曲輪１は、主要曲輪群の中では最も大きく、曲輪の高所、北東側に高さ約２ｍの土塁を備えるが、さらに一段高所の曲輪南西側の土塁は流失して残存度は低い。この場所からｇの方面に土塁づたいに往来でき、武者走りとなっている。下位の曲輪ｇと上位の曲輪１の比高差は約４ｍ、ｇの曲輪の南側には、枡形虎口ａを形成している。

曲輪Ｏと曲輪１の間の空堀底を通過しｇの曲輪に至るまでにはそれぞれに設けてある段を乗りこえなければならない。曲輪Ｏへの登り口には、土塁があり、枡形を形成している。ここにも西側に土塁を残している。そして，添曲輪Ｂが西側に，添曲輪Ｆが南側にそれぞれ付随している。遺構の残りの良さ、防御施設などから当主要曲輪群の中では，最も防御機能が高い。

曲輪Ｏと曲輪２のｄ共に下段の添曲輪Ｆを包み込み横矢を利かせている。

曲輪Ｏの南にはＡが有り，ここには，Ｏと同様かつて曲輪が存在していたが，シラス土砂取りによって消滅している。さらに南側には空堀を設け，曲輪７が存在する。最大長約50ｍ×約40ｍ方形の曲輪である。ここはセゲン飯田どん宅（上にある飯田宅と下にある飯田宅の意味）があり、三方を土塁が囲む。

曲輪南側は、すでに造成され、現状はとどめていないが、東側に高さ約４ｍ、全長約30ｍの壮大な土塁が備えられている。しかし、この土塁も途中で削られて完全ではない。

明治36年開通の県道がなかった頃は、この場所から曲輪８・９まで道が通じていたと伝えられている。このことからも南側台地と曲輪７が台地続きであったことが伺える。

東側ｈには、曲輪７への虎口と思われる空間もみられる。ここから東側には曲輪Ｈがある。この

曲輪には幅約９ｍの浅い堀状の遺構が巡っており、区画内に屋敷の存在が想定出来る。ここは通称「モタイ屋敷」と言われている(4)。また、この堀は現況と地籍図を重なりあわせてみるとまだ北東側に延びる可能性がある。立地現状からみて水に関連した地名なのであろうか。

地頭仮屋跡の下位にわずかに土塁ｍが残っている。これはどん馬場通りからの入城にあたり、Ｆの曲輪へ通じる城道に関連した遺構と考えられる。土塁ｍの南側には古井戸がある。

主要曲輪群の西側曲輪Ｃは、草木が繁茂した荒れ地となっているが、玉石垣で構築されたＴ形枡形が残っている。さらに、その西側１の曲輪は、整然とした凝灰岩製切石積みの石垣をもつ。いずれも近世以後の屋敷の存在が考えられる。

曲輪Ｃの北側には、高さ約４ｍ、長さ約87ｍの西側に一直線に延びた壮大な土塁がある。この土塁は海江田氏宅の北側の一部が欠けているだけで残りはよい。土塁の外側には、Ｍの帯曲輪をもち、樋ノ口方面からの攻撃に備えている。五反田川を自然の堀と考えた場合、ここは次にくる当城の外郭ラインと考える。

帯曲輪Ｍを通り西側へ一周すると、曲輪Ｑの登り口に至る。ここは薩摩山あるいは平江方面からの敵を監視する見張り台的な曲輪と考える。

「にしんくっ馬場」は、字西ノ口の小分け地名「どんもと」から直線距離にして約150ｍ、西ノ口の長どんのところで屈曲し枡形となっている。この通りには武家門跡や石敢當、上水道跡等の史跡があり、近世には整備されていたことが考えられる。

西ノ口の入口あたりにかつて地蔵堂があったことから「どのもと」という小分け地名が残っている。これは「堂の元」がなまってこう変化したと伝えられる（『共励斎百年記念誌』1980）。

西ノ口の旧街道に沿った現在の畠中氏宅一帯を「たれんくっ」といった。「たれんくっ」は門の代わりに入口に柱を二本づつ立て、それに注連縄を張った「垂ンロ」と呼ばれるものから由来しており、これを境に郷士の居住地区である「麓」とは厳重に区別されていた。市来町では町場（藩政時代の規制された商業地区＝野町）の入口には町門があり、区別されていた（高向1996）。すなわち「たれんくっ」は郷士の居住区である麓の外と内を区別する重要な場所だったのである。そう考えると、つまり北側を流れる五反田川が自然の水堀として、南側の台地は自然の塁として城域が防御された。さらにその内側にはｎの鉤型の台地とＪの土居が、かにばさみ状に字「八久保」字「西ノ口」一帯を包み込み、一方で東側には、字「鳥井原」の台地と城山とが字「友ノ内」一帯を包み込み防御された。今日残る遺構や地名、史跡あるいは地形等をみたとき、まさに城と城下を包み込む巨大な惣構(5)が想定できるのである。

４．主郭の位置

往時、串木野城の主郭は、どこにあったのだろうか。

シラス台地を基盤とした南九州の城は各曲輪の独立性が強く、いずれが主郭かはっきりしないところに一つの特徴がある。そして、城内の各曲輪がそれぞれ某城と呼ばれ、一族や家臣など居城者の名前や官職名がそのまま曲輪に残っている場合がある。

串木野城の場合も南九州にみられる特徴的な城郭群の一つで、いずれが主郭かはっきりしない。城の名称は亀ヶ城（『古城并古戦場糺帳』）と記録にはあるが、実際は「城（じょん）山」と呼ばれていたようだ。しかし、それぞれの曲輪に名前は残っていない。そのため、主郭の位置や曲輪の使われ方がつかめない。

そこで、まず主郭の位置を探る手がかりを考えてみることにする。

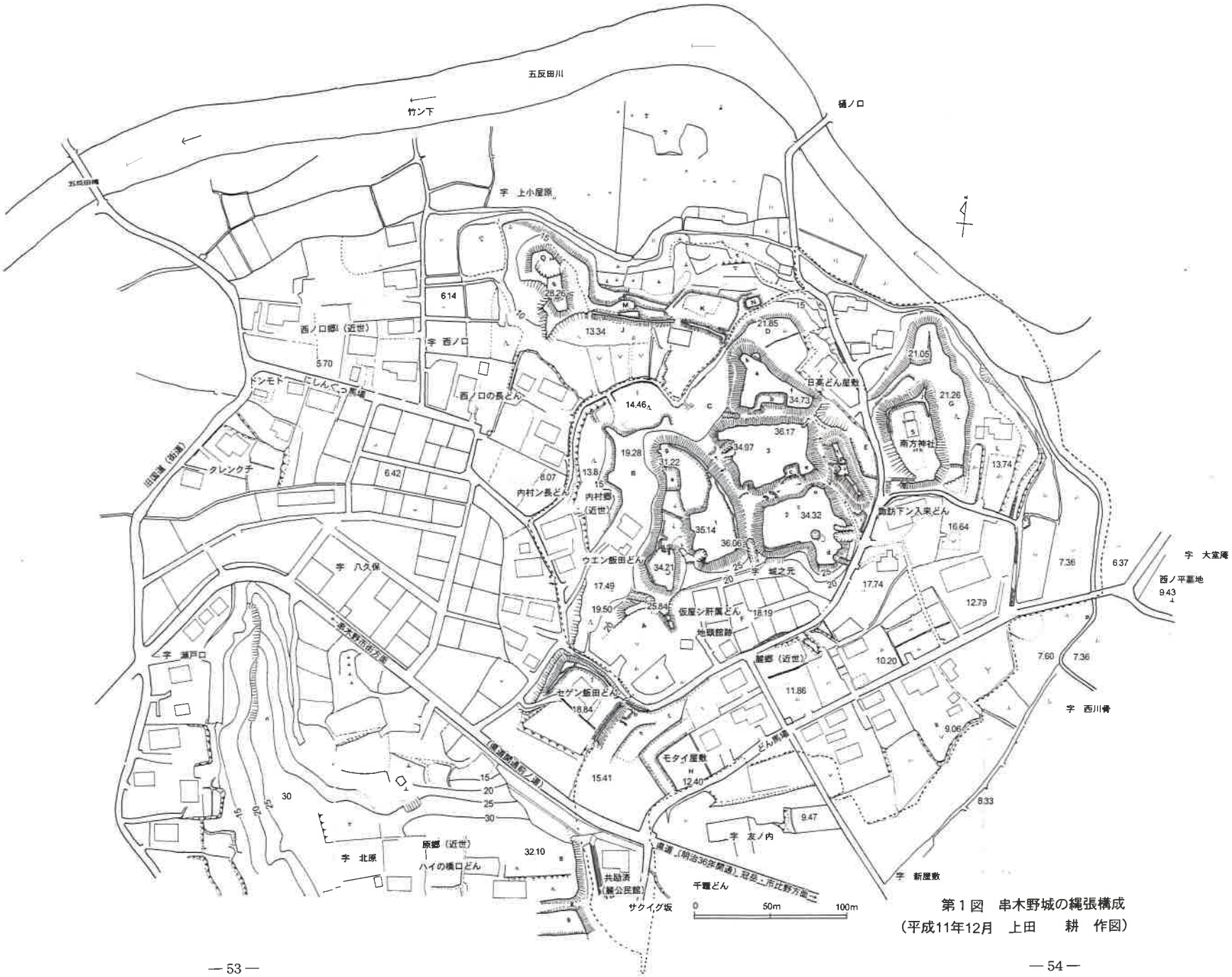
16世紀後半、16代島津貴久により、市来地頭山田有徳が当地の地頭に任命され、山田有信が継ぎ、元亀元年（1570）、貴久の子家久（義久の弟）が限之城と串木野の地頭に任じられると、天正7年(1579）には家久は日向佐土原に移される。その後は再び地頭が置かれ天正8年（1580）頃には宮之原左近将監が地頭に任命され（「諸郷地頭系図」『島津国史』）、近世になると慶長7年（1610）～寛永16年（1639）には仁礼蔵人が、そして野村大学、鎌田左京と続いた（『共励斉百年記念誌』1979）。このように代々串木野城には地頭が置かれた。そして、近世には地頭仮屋跡が城の南東Fの曲輪に置かれた。さて、上記の歴史的変遷から戦国期の地頭居館はどの曲輪にあったのか。つまり、戦国期に地頭館のあった場所が主郭であった可能性があるため、その位置を文献・伝承・縄張構成、出土遺物等々から考えてみたい。

寛政10年（1798）の「古城并古戦場糺帳控」（『頂峰院文書』）によると、「亀ヶ城と相唱上名村之内二有之麓地頭仮屋元より子丑之方仮屋元城内同前二御座候」と記されている。この文書は戦国期から200年あまりが経過して編纂されたものなので、内容には問題があるかもしれないが、示唆に富む史料である。すなわち麓の地頭仮屋（Fの曲輪）より、子丑（北東）方向に、以前は城内に仮屋（地頭館）があったと解釈できるのである。これに対して、麓の地頭仮屋（Fの曲輪）より子丑（北東）方向にある城内と同様に前が地頭仮屋であるとも解釈できる。前者の解釈が正しいとすれば、地頭の居城となる曲輪、すなわち主郭の場所が特定できるはずである。文書に従えば地頭仮屋から北東の方には、曲輪2と曲輪3がある。この双方のいずれかの曲輪が、主郭となろうか。特に曲輪2は、南東側方面に眺望が効き、Fの曲輪に横矢を利かせ、敵を監視できる。さらに南東側に土塁が、東側には竪堀が配置されている。戦闘時にはFの曲輪からただちに後ろの曲輪へ避難ができる位置にある。また、この曲輪は東側城下の麓を見渡せる位置でもある。そして東の方向には字「大堂庵」に貴久（大中公）の御霊を祀った廟（元亀2年1571年）が、また、貴久の位牌を安置したと伝えられる岩水山良福寺跡が眼下にある。因みに宮崎県穂北城や串間城、鹿児島県郡山町川田城も同様に城下を見渡せる台地縁辺部を主郭としている。

出土遺物についても、14世紀から16世紀代にかけての国内外産の陶磁器類の数々がみられ、建物跡の柱穴など遺構も検出されている。さらに他の曲輪に比べ遺物量が多いとされている。かならずしも遺構・遺物の出土量が多いからといって、そこが主郭となりえる根拠はないが、江戸時代の陶磁器なども少なからず発見されていることは、少なくとも廃城後も何らかの利用があったと考えられ、廃城後も曲輪への思い入れのあったことを感じさせる。このように長い間の曲輪の使用が確認でき、城の中心部の重要な曲輪の一つであったことには相違ない。

同様に、曲輪3は中心曲輪群のさらに中心部分に位置し、それぞれの曲輪群の中では北側部分に36.17mの当曲輪群の中では最も高い地点をもつ。出土遺構には多数の建物跡柱穴や礎石状の配石を備えたもの、竪穴状の遺構など、遺物には国内外産の各種陶磁器をはじめ壷・甕類、鍛冶関連遺物などが出土しているが、曲輪2に比較して遺物量は少ないとされる。曲輪の南側に桝形虎口を備え、横矢を利かしている。各曲輪に取り囲まれ保護される形となっている。

因みに、永禄4年（1561）に市来鶴丸城に滞在した宣教師イルマン・ルイス・デ・アルメイダの手記には、城について一つの砦から他の砦へは橋が架けられ、すべての砦の真ん中に、その城主が住んでいる本丸があったという。市来鶴丸城とは構造こそ異なるが串木野城の場合も中央部に主郭を配置したのであろうか。しかし、主郭にしては曲輪の防御性に乏しいことと南九州の城はかなら



第１図　串木野城の縄張構成
（平成11年12月　上田　　耕　作図）

ずしも中央に主郭を配置したり、志布志城の例にもあるように、最高所に主郭を設けているとは限らないのである。

次に地頭仮屋の北側にある曲輪１である。曲輪１の最高所は発掘調査されたが、遺構面を十分に確認できなかったとされるが、滓（鍛冶滓か？）を数点検出したとされる。また、Ｏの曲輪の東側切岸付近に虎口と思われる遺構が確認されたという。

当曲輪は西ノ口方面を正面に五反田川や西側一帯を広く見渡せるように占地されている。曲輪の東側には削出しの土塁が巡り、西側には桝形虎口ａを備え、南側に降るにしたがって段を築いている。下段の西側には土塁が配置され、Ｏの曲輪に登城するのを困難にするための桝形の虎口を設けている。曲輪１は標高36.06ｍを最高地点として、下段に曲輪ｇを配置。発掘調査による出土遺構・遺物の出土量はすくないものの縄張構成からみると当曲輪群の中では最も防御性が高く、格式高い曲輪を形成している。ここも十分に主郭となりえる(6)。

今後の研究課題として、串木野城の主郭・本丸の位置づけについては、縄張構成の詳細な把握の上に発掘調査を立ち上げ、出土遺構の検討を試みる。それに伴った出土遺物の位置や遺物の分類・出土量をおさえ、組成を割り出すという基礎的作業を行うことが先決だろう。それによって、各々の曲輪の特徴もしだいに明らかになってくるものと考える。

さらに南九州ではこれまでに発掘調査においては、虎口の形態や構造が十分に把握されてこなかった。これらの多大な課題を少しでも解消できるよう地道に研究を重ねていくことが必要であろう。

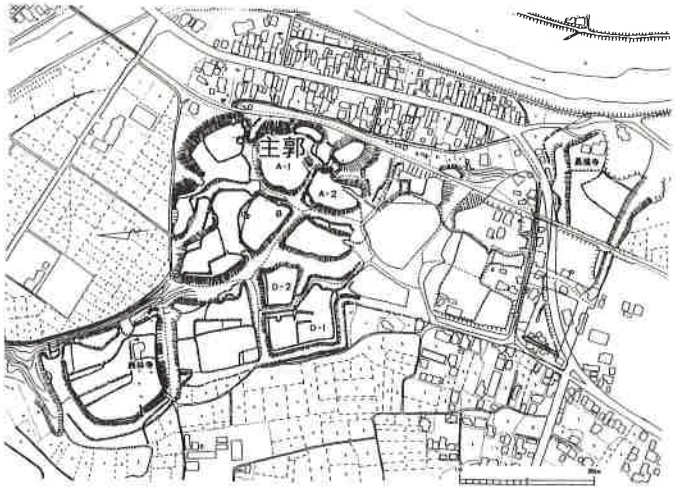
５．さいごに

本論では触れられなかったが、串木野は13世紀初頭の串木野忠道を最初の城主と伝えるが（『御家五代他家古城主来由記』）、文和４年（1355）の串木野城の攻防に関わる南北朝期の遺構の有無を把握することは困難であった。ただし、発掘調査では、串木野氏が居城していた1300年代頃の中国製磁器等は検出されている。しかし基本的には島津氏入城後の幾度かの改修によって、戦国期後半の姿をとどめているものと理解している。それは16世紀後半頃の中国製青花碗・皿などの出土からも伺える。

串木野城の出城と伝えられる浜ヶ城や栫鼻陣、坂下栫等々それぞれの城郭の構成や役割等についても言及していくべきであった。

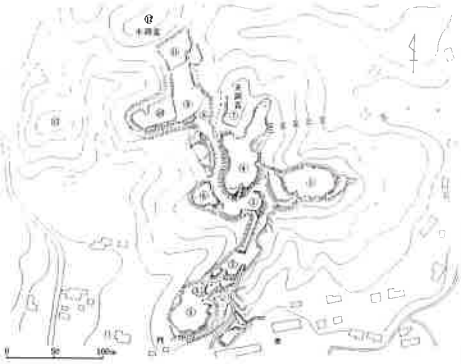
串木野城は五反田川と袴田の台地の内側に存在し、往時、城と城下を包み込む壮大な惣構が存在していたことが想定された。その痕跡は城山を中心とした麓集落の随所にとどめており、中世南九州の様相を探ることのできる数少ない資料であることがわかった。このことは、地域にとっても誇れる歴史遺産であり、今後、近世の史跡と共に串木野市の文化歴史ゾーンとしての保護活用を期待するものである。

最後に、所崎 平氏（串木野古文書研究会会長）には文献の提供並びにご指導をいただいた。さらに南九州城郭談話会会長三木 靖氏をはじめ会員の鶴嶋俊彦氏、千田嘉博氏、福田泰典氏、吉本正典氏からは遺構と縄張についてご検討いただいた。その他に串木野郷土史研究会員の皆様方、これら多くの方々に心から感謝の意を表したい。

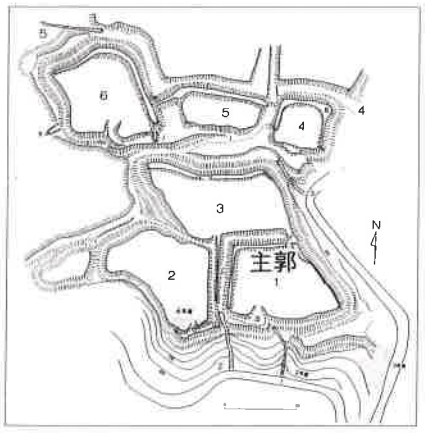


櫛間城跡縄張図（千田嘉博氏　作図）

志布志城跡縄張図（村田修三氏　作図）
『図説中世城郭事典』1987年より引用

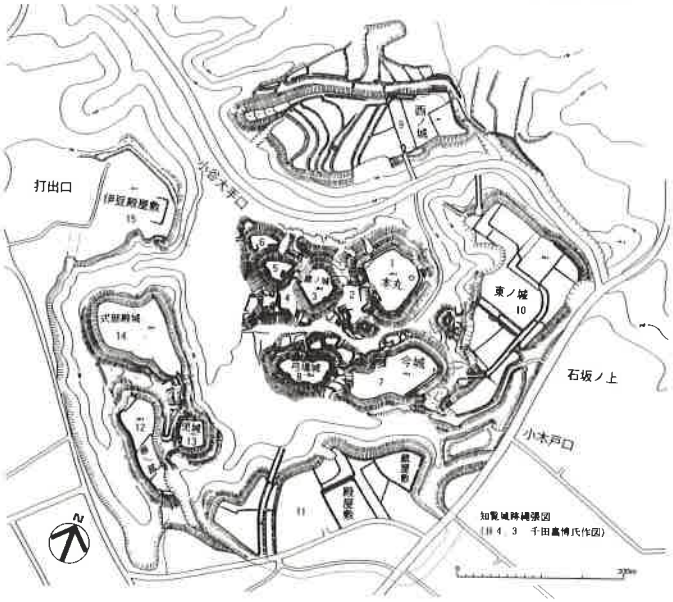


市来鶴丸城跡縄張図（村田修三氏　作図）
『図説中世城郭事典』1987年より引用



穂北城跡縄張図（北郷泰道氏　作図）
『宮崎県地方史研究紀要』
第20輯1994年より引用

栗野城跡縄張図（木島孝之氏　作図）
『中世城郭研究』第６号1992年より引用



知覧城跡縄張図（千田嘉博氏　作図）
「知覧城跡」『知覧町文化財調査報告書第３集』1994年より引用

川田城跡縄張図（有川孝行氏　作図）
『南九州城郭研究』1999年より引用

第２図　南九州の主な中世城郭

参考・引用文献

有川孝行「川田城跡」『南九州城郭研究』創刊号　南九州城郭談話会　1999年

有川孝行「川田城跡について」『南九州の城郭』第6号　南九州城郭談話会　1997年

桑畑光博「都城市における中世城館の立地」『都城市の中世城館』1998年

木島孝之「九州における織豊期城郭―縄張り構造にみる豊臣氏九州経営」『中世城郭研究』第6号中世城郭研究会1992年

高向嘉昭『薩摩の豪商たち』春苑堂出版1996年

千田嘉博「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号　大阪歴史学会1993年

〃　「城郭と地域社会」『織豊系城郭の形成』　東京大学出版会　2000年

〃　「東北北部と南九州の城館」『城館調査ハンドブック』新人物往来社　1993年

北郷泰道「日向の中世城館跡」『宮崎県地方史研究紀要』第20輯1994年

村田修三「城の分布」『図説中世城郭事典』第3巻　新人物往来社　1987年

八巻孝夫「都之城について縄張検討による現状把握」『都城市文化財調査報告書第13集』都城市教育委員会1991年

松田毅一・川崎桃太　訳「豊後篇㈱」『フロイス日本史』中央公論社　1987年

松永　敦「島津氏と修験道」『狩猟民俗と修験道』白水社　1993年

三木　靖ほか「串木野城」『鹿児島県の地名』日本歴史地名大系47巻　1998年

若山浩章「中世城郭と荒神」『宮崎県史しおり』宮崎県史編纂室　1996年

『共励斎百年記念誌』串木野市麓公民館　1979年

『串木野郷土史』串木野市教育委員会　1984年

(註)

⑴地形表現方法記入例については、本田　昇「中世城郭の調査と図面表現」『中世城郭研究』創刊号1987年並びに本田　昇『頴娃城遺構確認調査報告書』1995年、小島道祐・千田嘉博・前川要「東北北部と南九州の城館」『城館調査ハンドブック』新人物往来社　1993年を参考とした。

⑵元禄１２年(1699)「他郷境縄引帳」の原本の所在は不明である。所崎　平氏によると串木野の重要な古文書等は戦時中に多くは焼失したという。

⑶緩い傾斜地で細長く突き出た所が特に細くくびれている所を言う。この場所を掘りきって、その先端の台地を独立させて、城と築くことが多かった。このくびれているところを野首といった。

⑷モタイはモタヒ＝毛太非（和名抄）すなわち水や酒を入れる甕の意味と、モタフ＝持ちこたえるという意味がある（『古語大辞典』小学館1994年）。

⑸外郭の外側にさらに城下町を経営し、城下町全体を堀と塁をもって防備したものをいう。

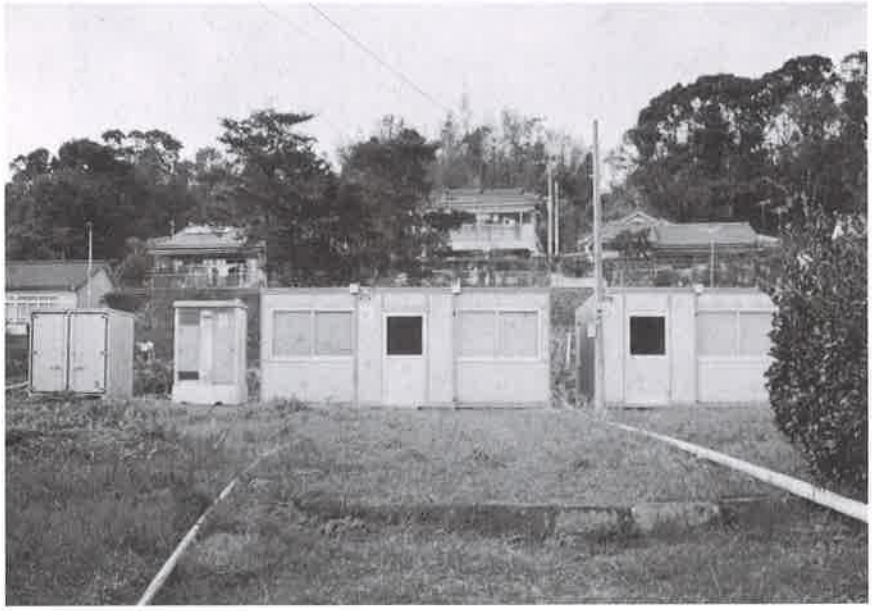
⑹主郭の位置に関しては、発掘調査に伴う遺構の状況と曲輪の配置から曲輪３（堂込秀人氏）、寛政10年の古城并古戦場礼帳の記述と出土遺物の内容及び状況から曲輪２（橋口　亘氏）、縄張図の構成と伝承から曲輪１を主郭に（千田嘉博氏、所崎平氏）と様々な意見がある。

(2000・2／25)

串木野城跡航空写真

図版 2

表土剥ぎ状況



プレハブ設置状況

城跡北東方向
（治山工事前）

伐開状況

伐開状況
１トレンチ予定地

伐開状況
２トレンチ予定地

図版４

作業用通路整備
１トレンチへ
曲輪２への登り口
向い側が曲輪３

曲輪１と曲輪３との
間の空堀（９トレンチ）

曲輪１
５トレンチ掘り下げ

曲輪３から曲輪２を見る

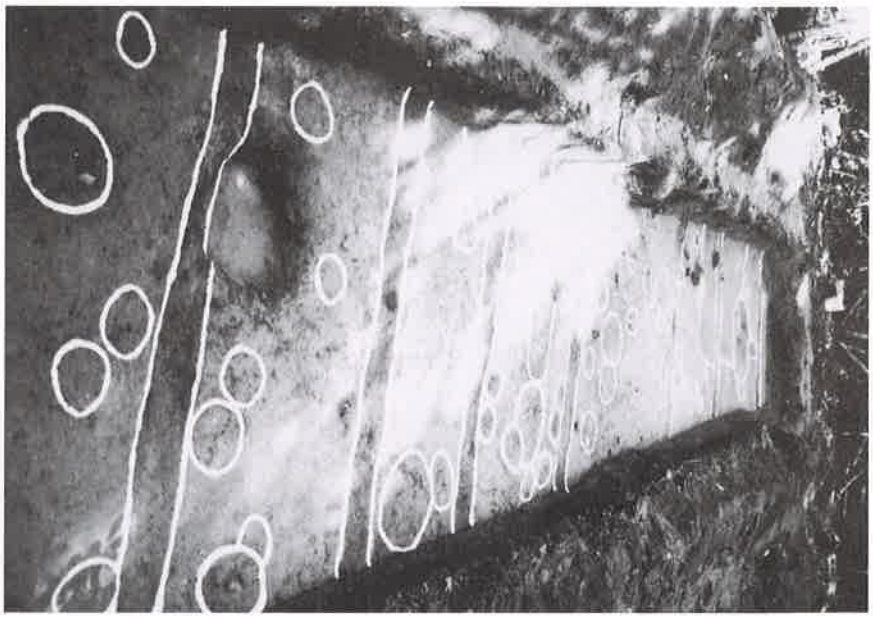
曲輪１への作業用通路

曲輪１のｇからの登り口

図版６

Ｈ９年度
１トレンチ作業風景

遺構出土状況

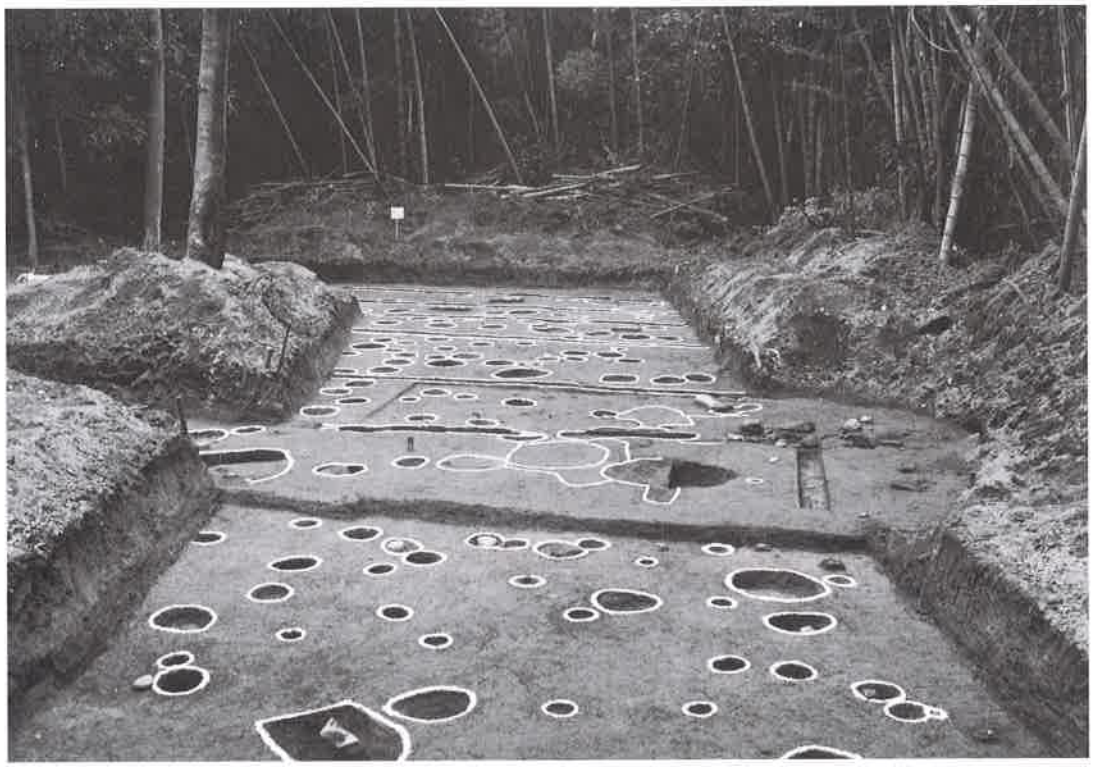


遺構出土状況

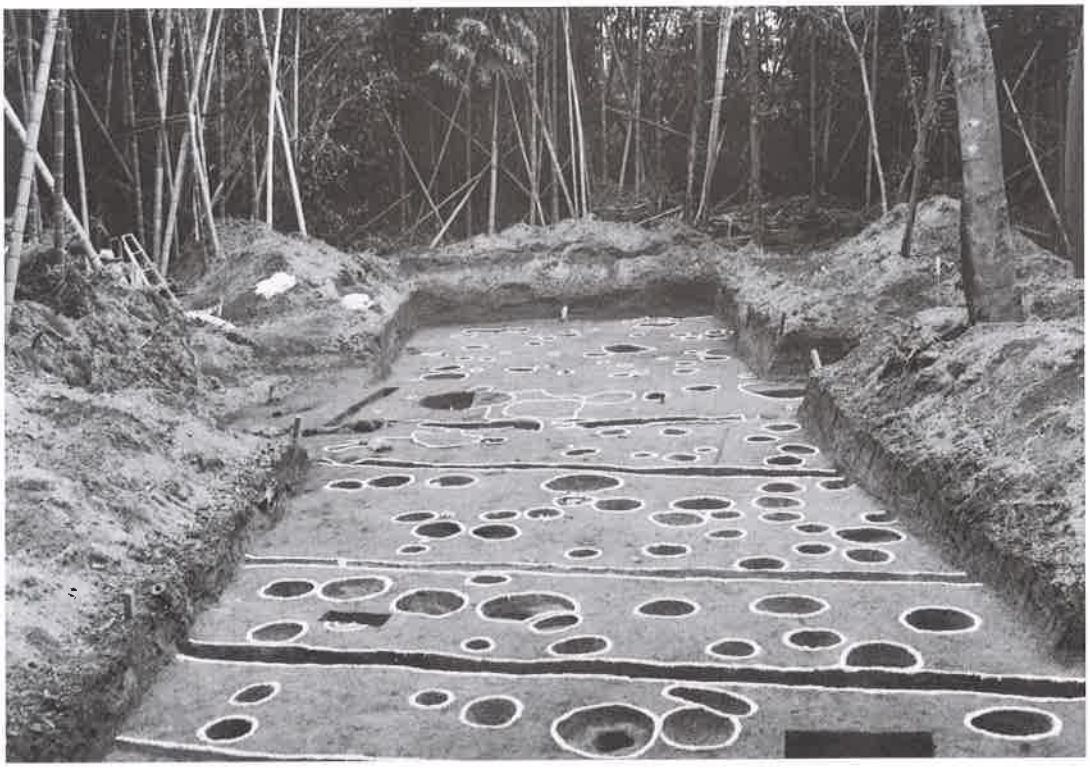
１トレンチ槍先出土状況

１トレンチ土抗調査状況

１トレンチ
柱穴跡検出状況



１トレンチ拡張　遺構検出状況（西から）

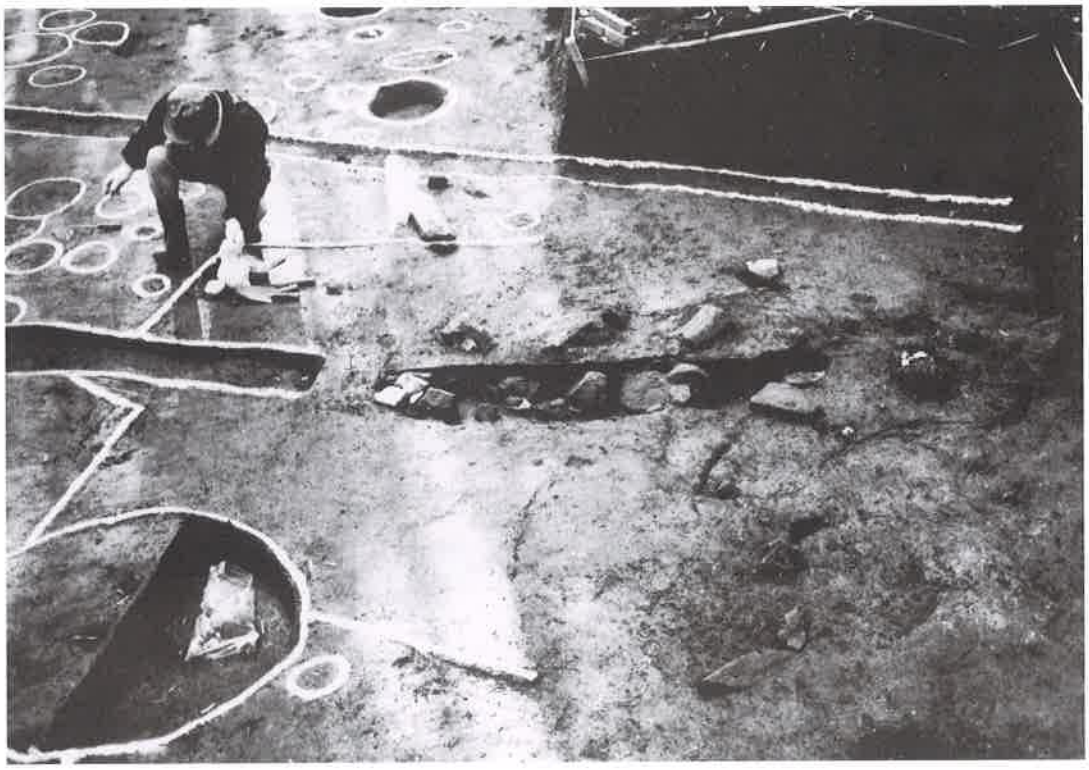


１トレンチ　遺構検出状況（東から）

１トレンチ　炉跡検出状況

１トレンチ　炉跡半截状況

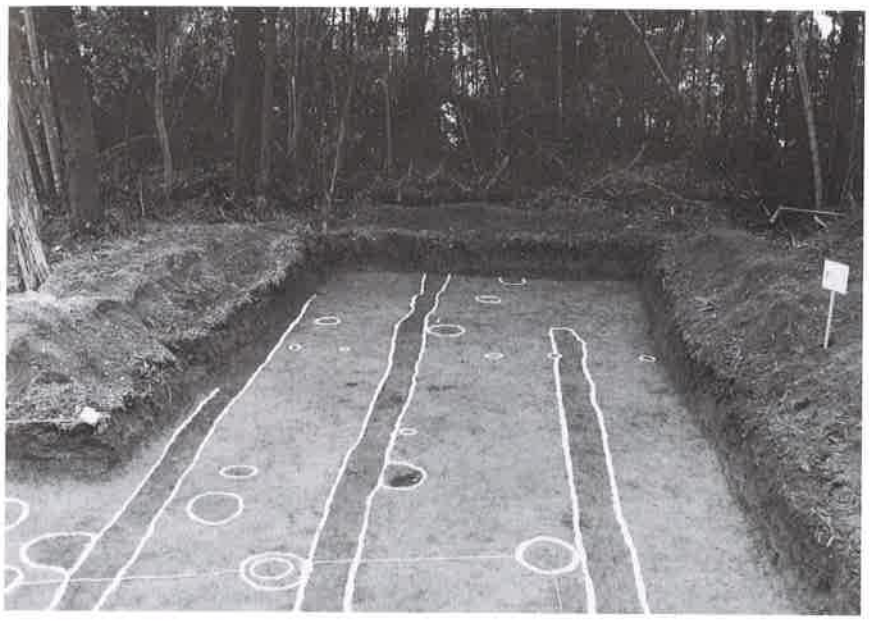
図版10



1トレンチ　炉跡埋土状況

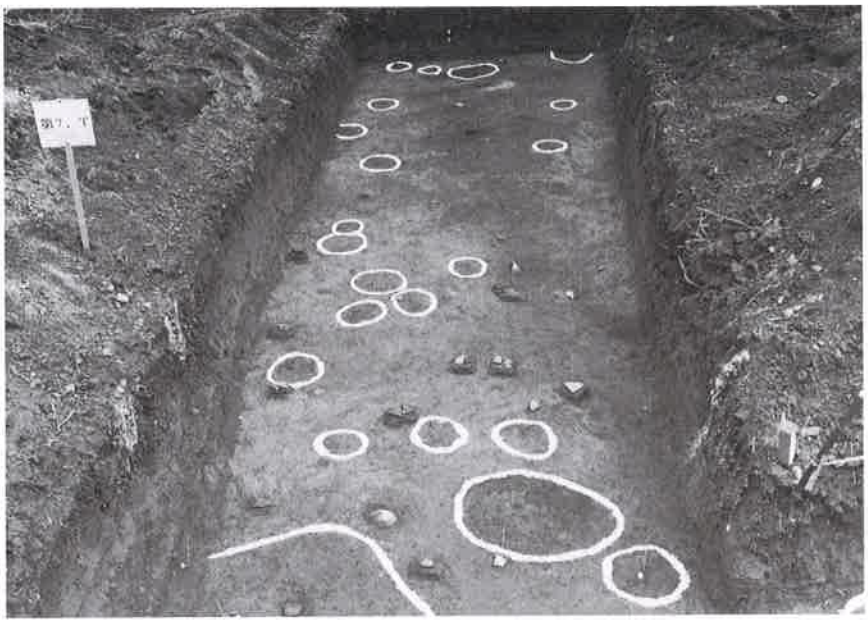
1トレンチ　炉跡検出状況

6トレンチ　遺物出土状況



6トレンチ　遺構検出状況

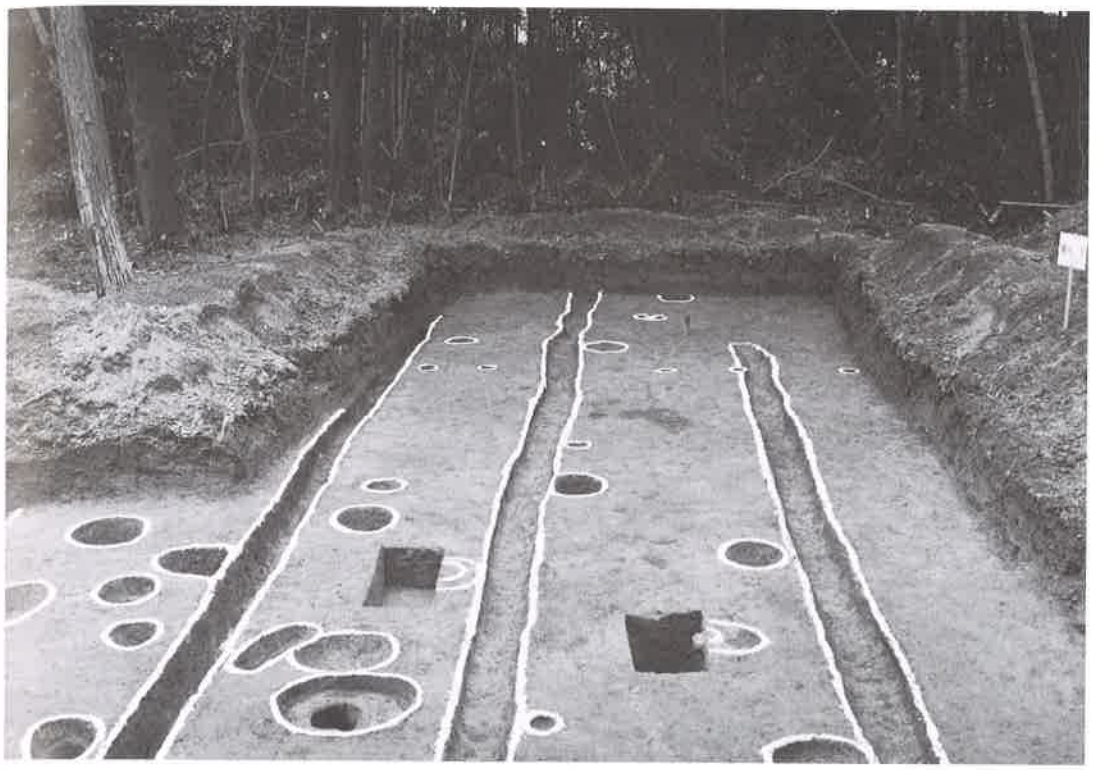
発掘作業状況



7トレンチ遺構検出状況

7トレンチ　遺物検出状況

9トレンチ　土層断面

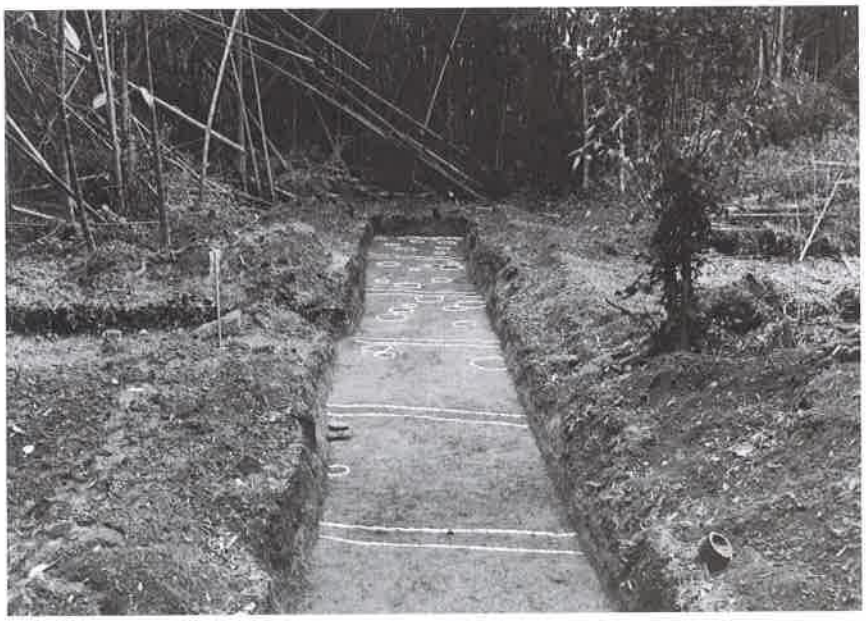


6トレンチ　遺構検出状況

7トレンチ　遺構検出状況

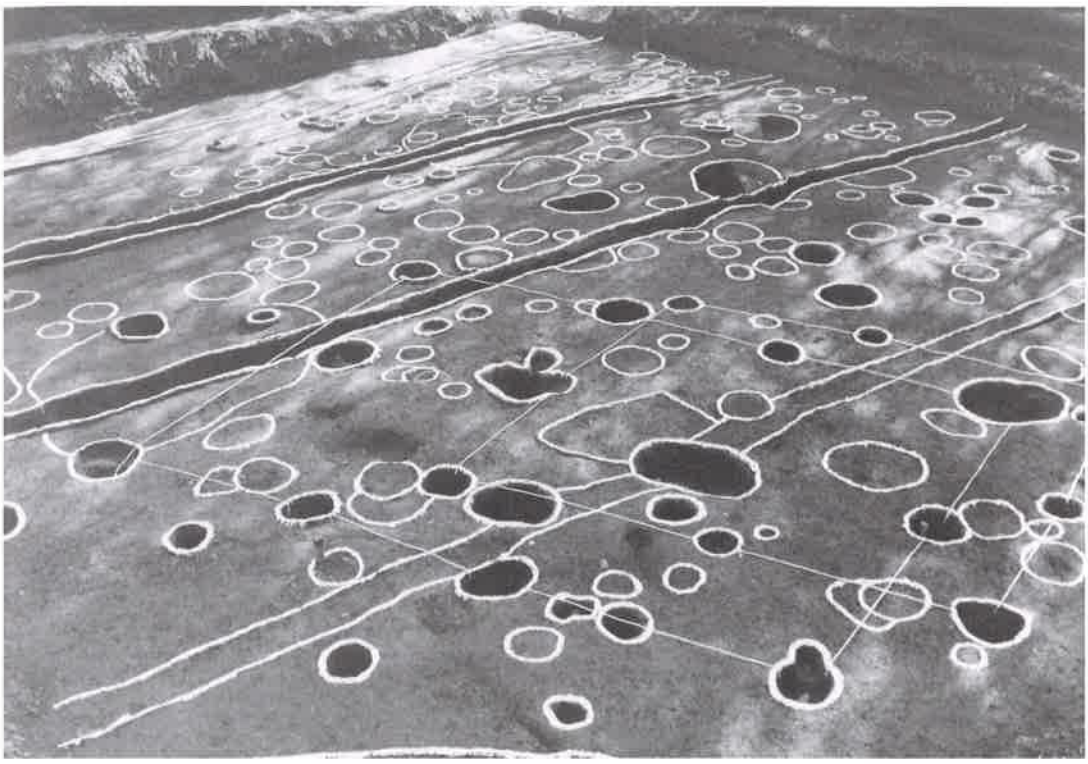
図版14

2トレンチ
遺構検出状況（東から）

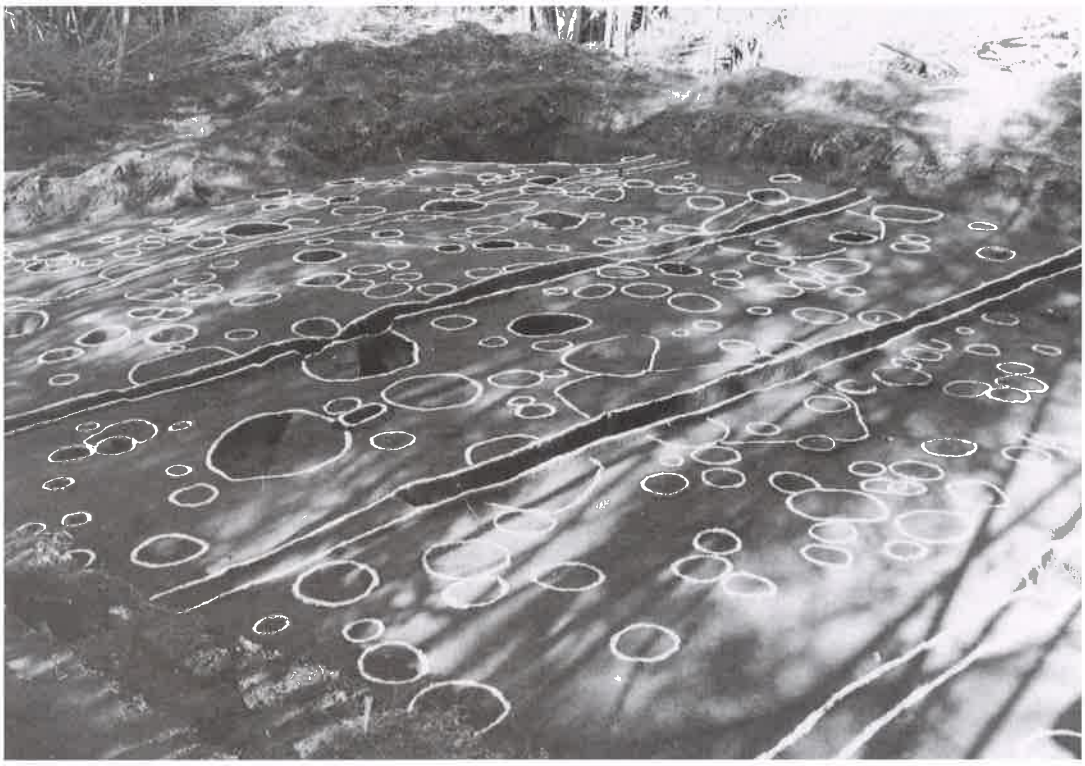


2トレンチ
遺構検出状況（西から）

2トレンチ　白磁出土状況



2トレンチ拡張　遺構検出状況（北西から）



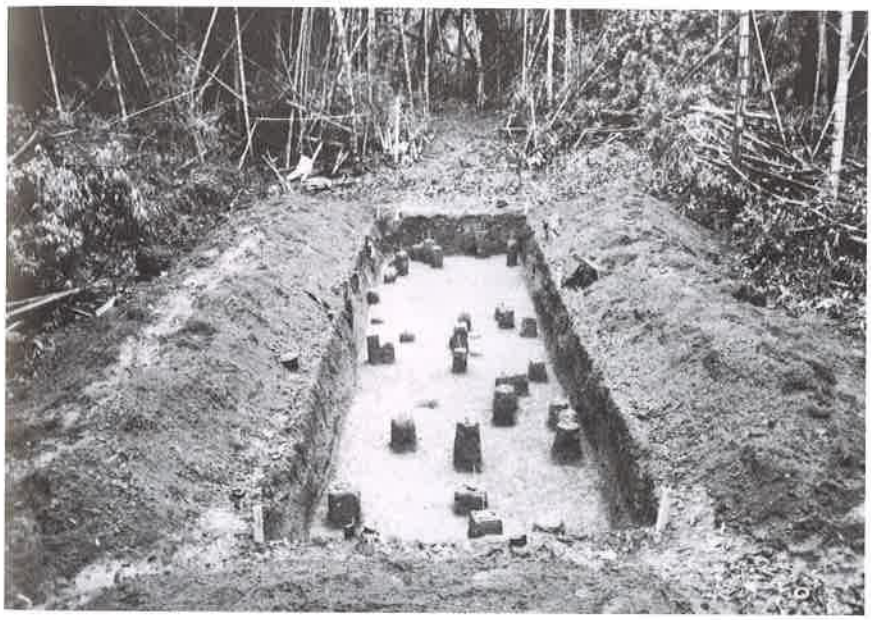
2トレンチ拡張　遺構検出状況（南東から）

図版16

3トレンチ土層断面

4トレンチ土層断面

5トレンチ作業状況



5トレンチ遺物出土状況

5トレンチ拡張　土塁断面

図版18

10トレンチ　土塁断面

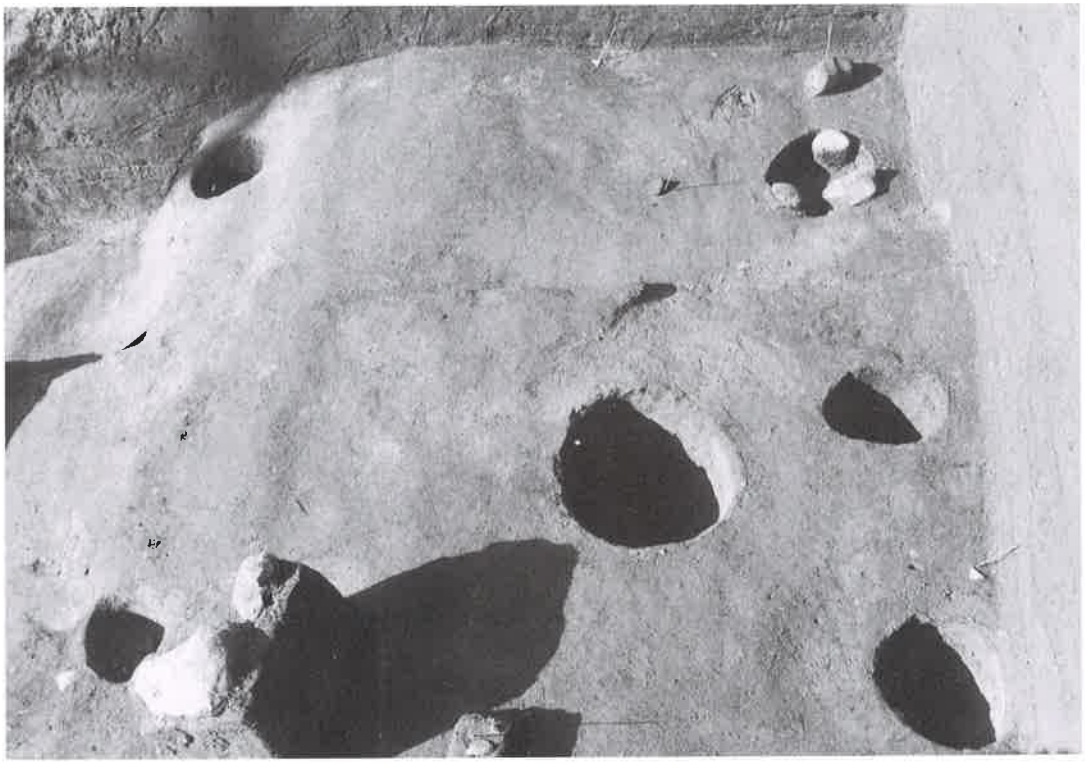
10トレンチ　遺構検出状況

10トレンチ　埋めもどし

13トレンチ　遺構検出状況（南から）

13トレンチ　土層断面

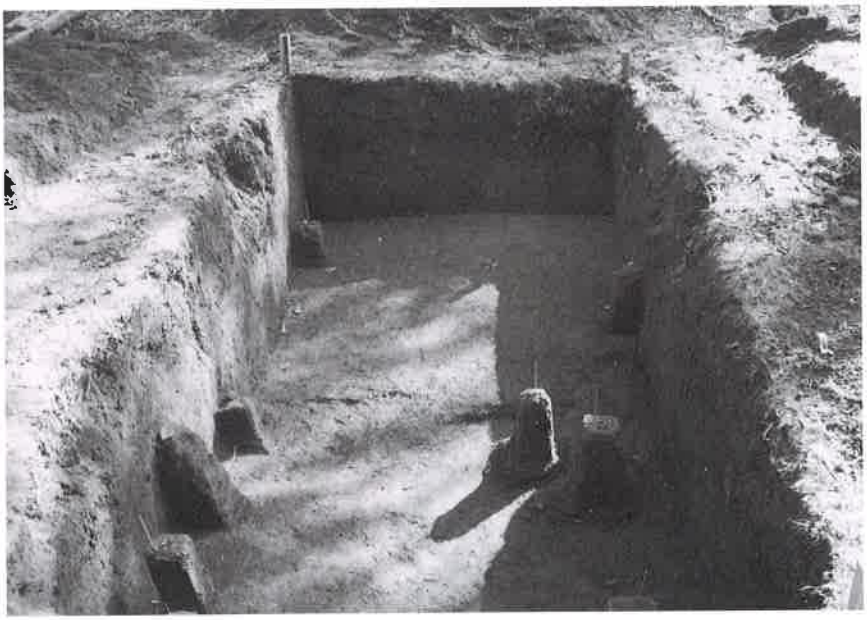
13トレンチ　土層断面



13トレンチ　遺構完掘状況

12トレンチ　土層断面

14トレンチ　土層断面



15トレンチ　遺物出土状況

鹿児島県文化財保護審議委員会委員
三木　　靖先生
上村　俊雄先生　視察

文化庁
坂井　秀弥調査官視察

埋めもどし状況

1

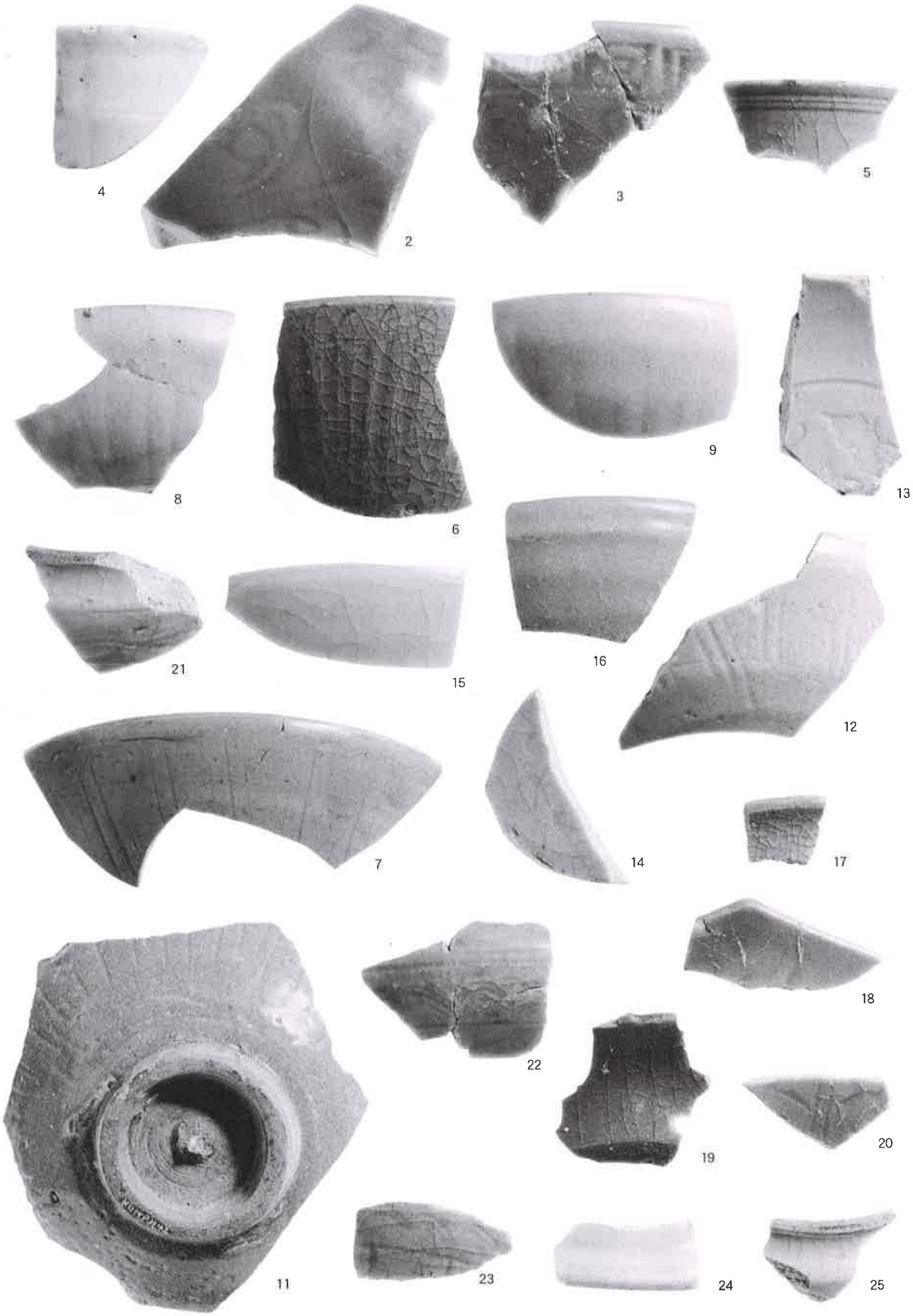
10

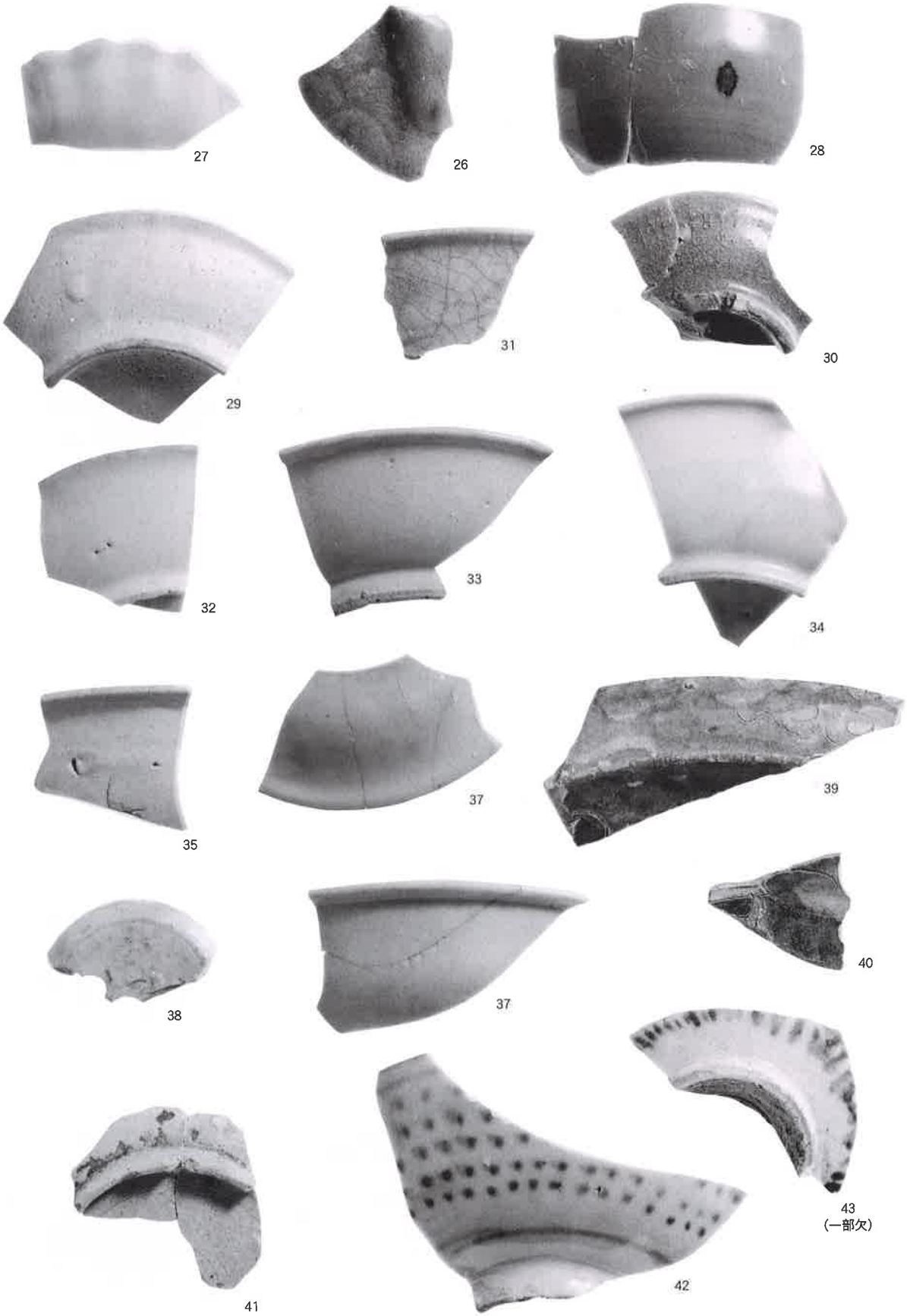
59

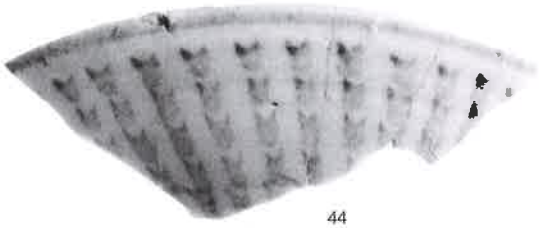
81

101

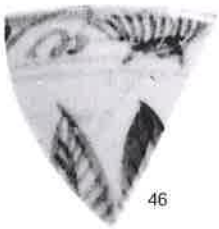
図版24




27
26
28
29
31
30
32
33
34
35
37
39
38
37
40
41
42
43
(一部欠)


44

45


46

47

49

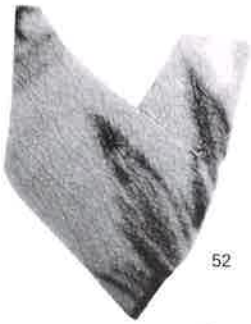
48

50

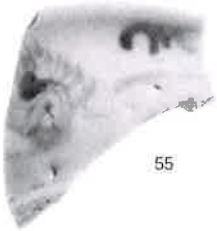
51

54

53


52

56


55

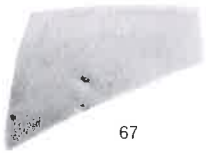
60

61

64

62

63


67

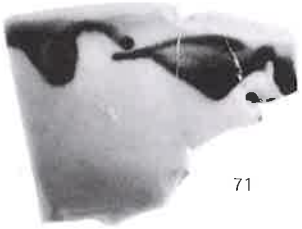
66

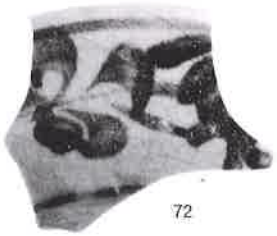
68

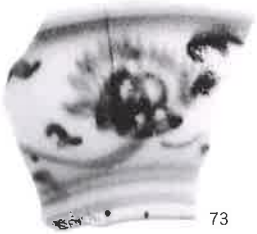
69

65

70

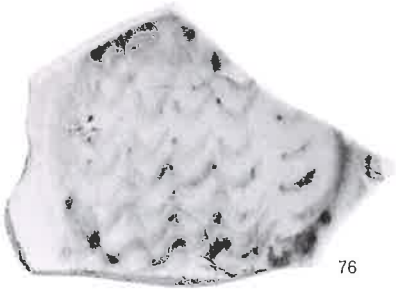

71

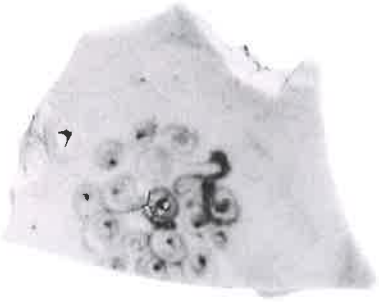

72

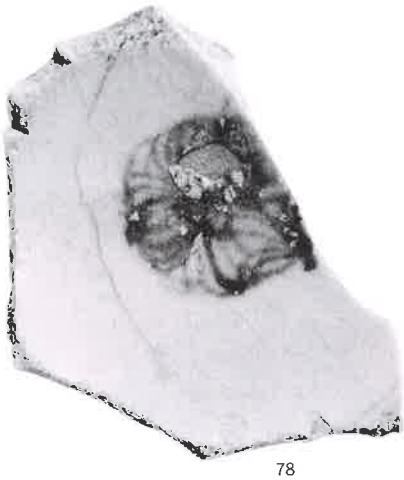

73

77

75


76


77


78

79

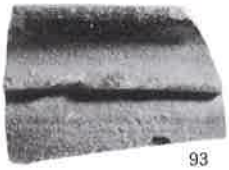
83

80

82

版28

84


93

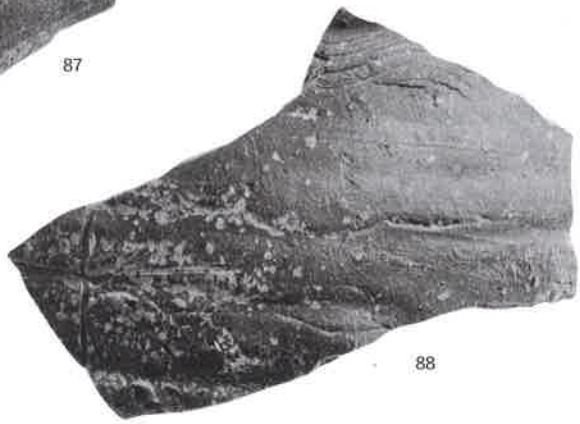
86

92

87

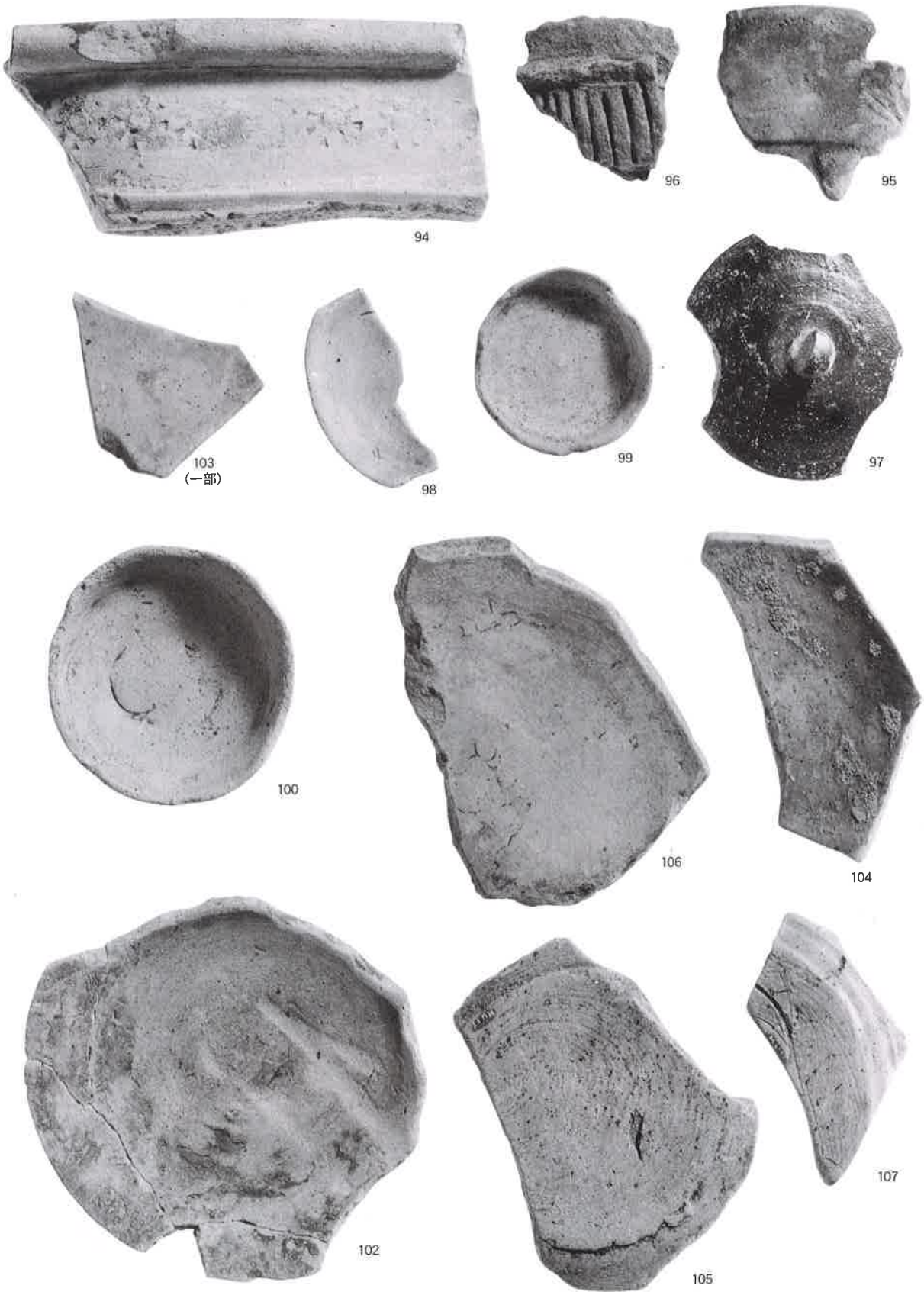
85

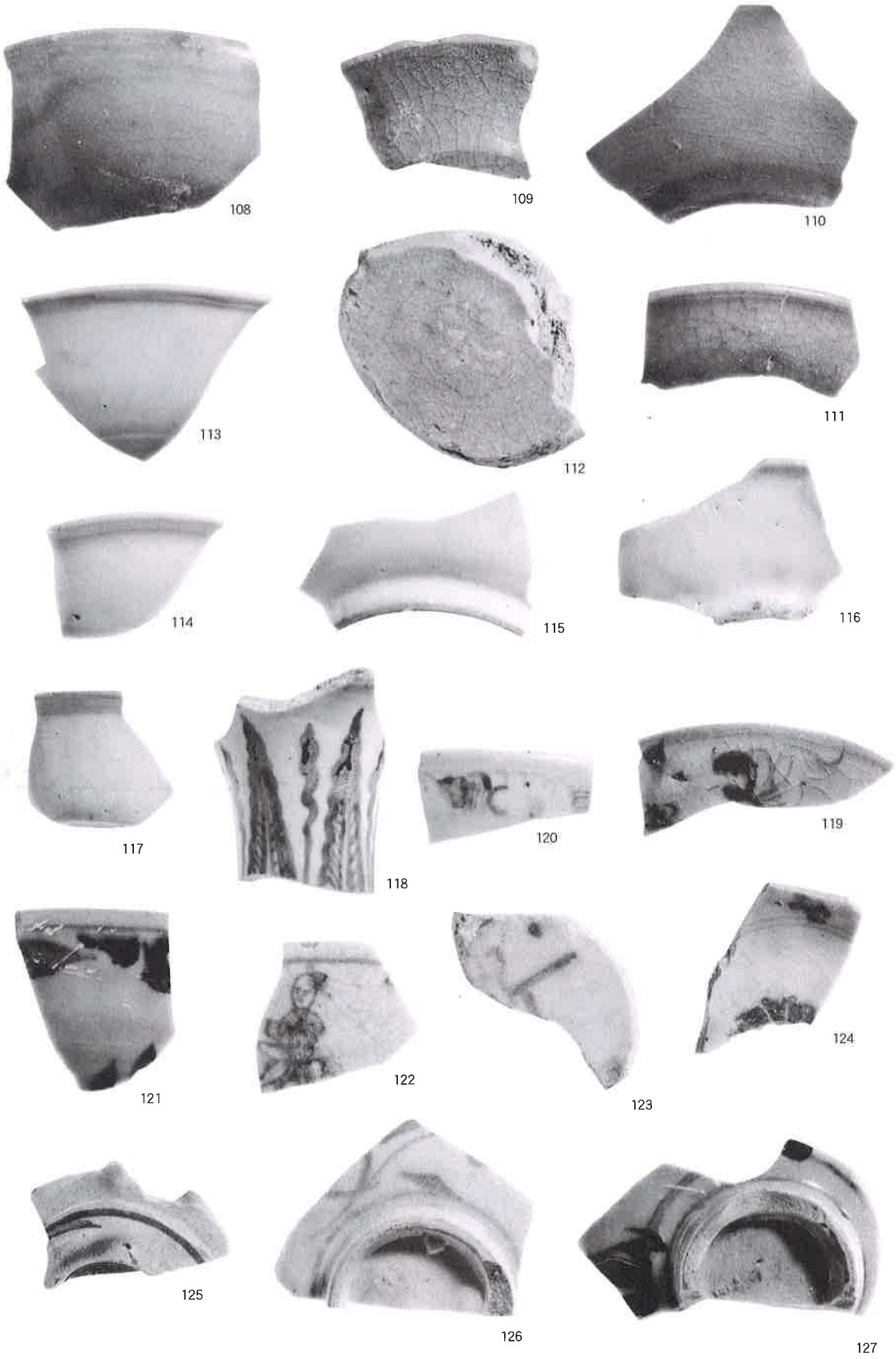
90


88

91

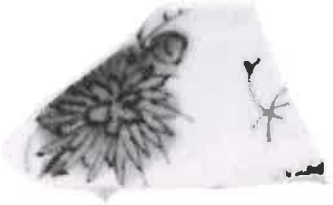
89


94
96
95
103
(一部)
98
99
97
100
106
104
102
105
107

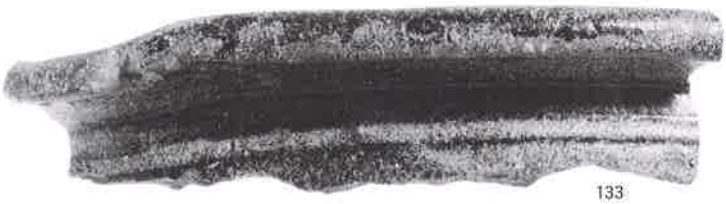

108
109
110
113
112
111
114
115
116
117
118
120
119
121
122
123
124
125
126
127

128

129


131

132


133

134

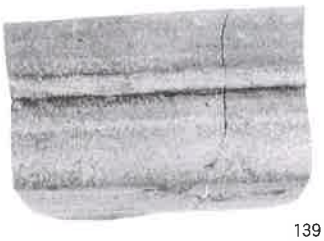
135

136

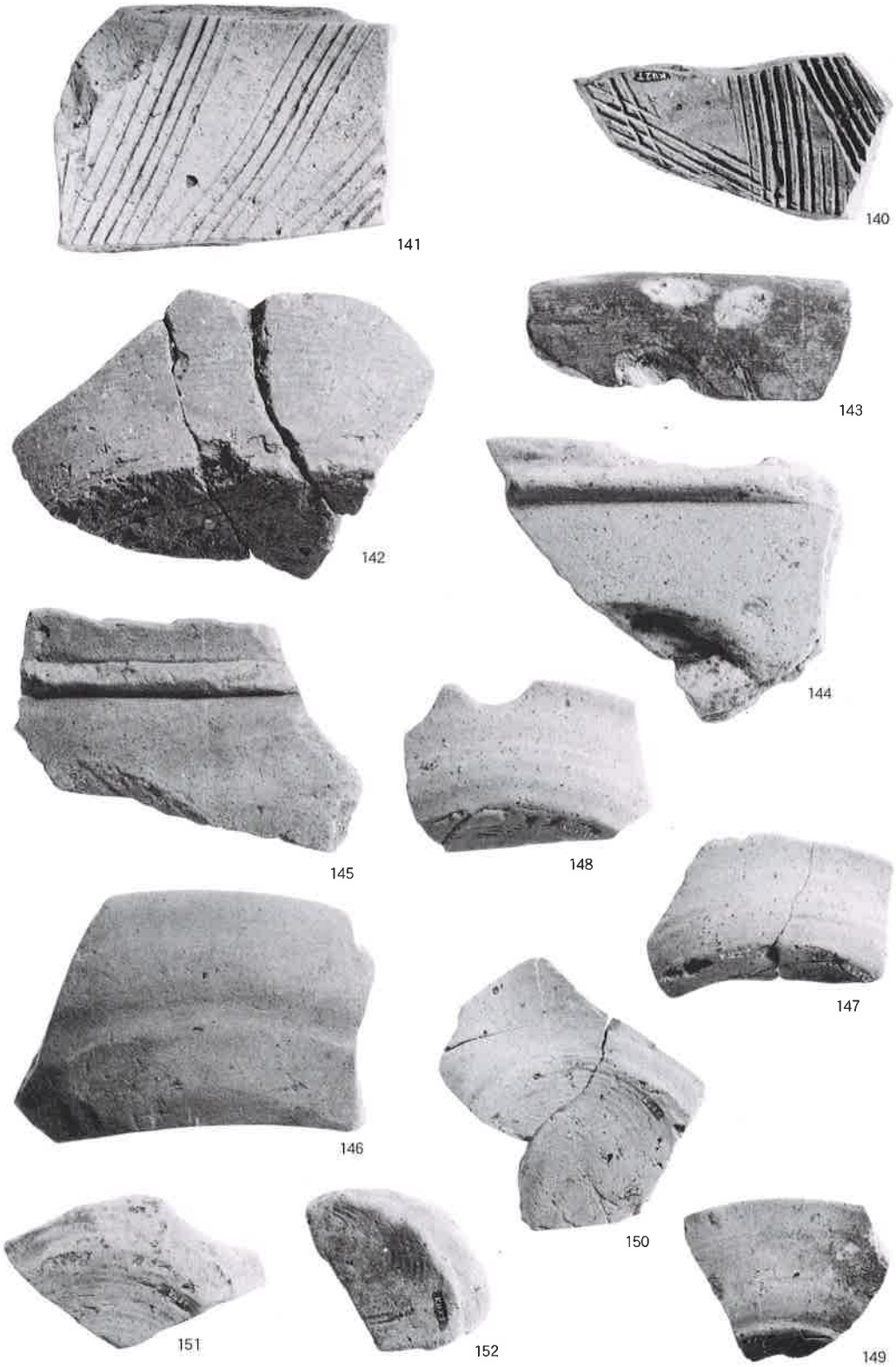
137
(底部)

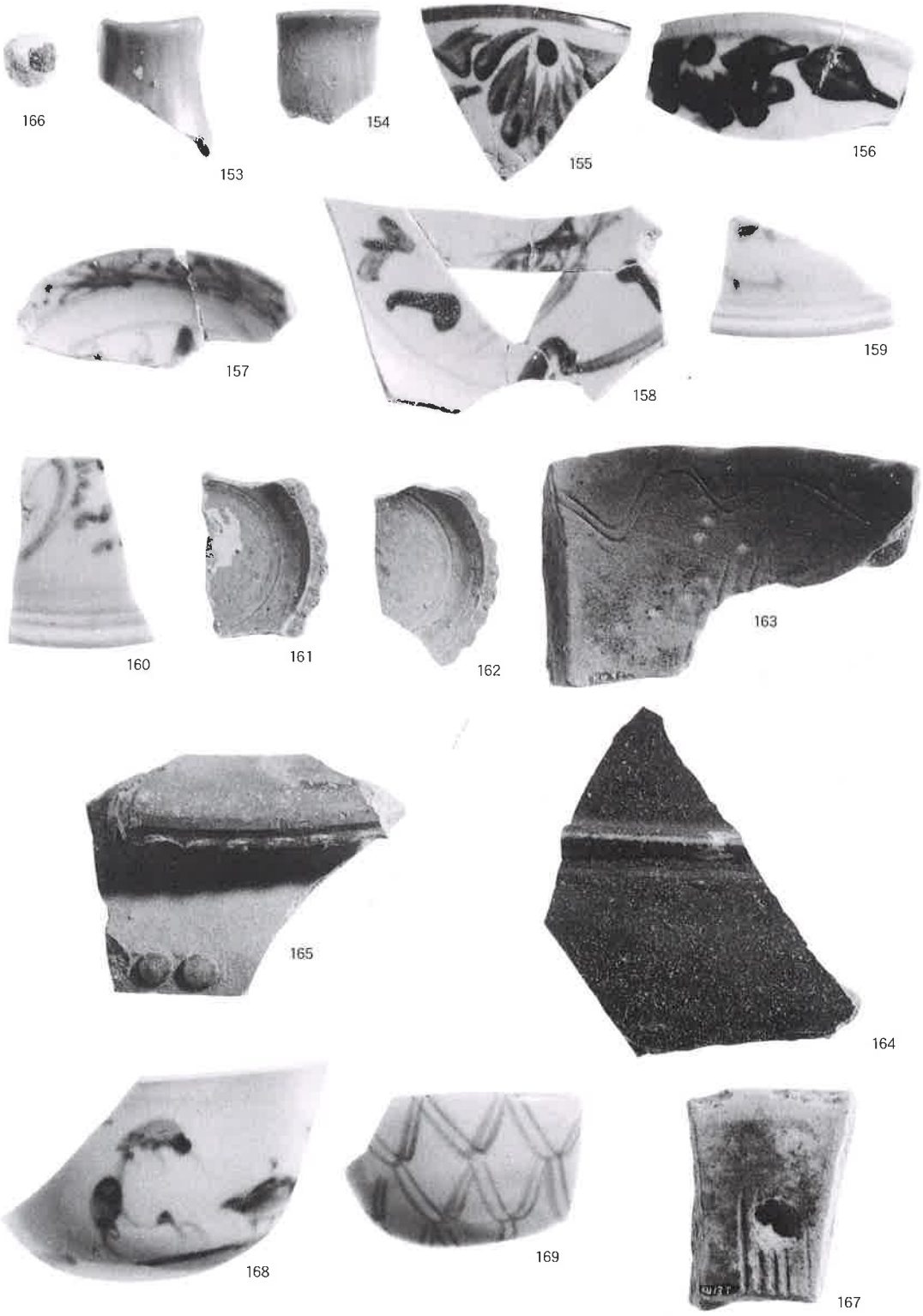
137
(口縁)

128


139

図版32




166
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
165
164
168
169
167

173

172

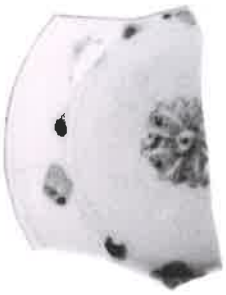
170

174

171

69

69


68

55

130

68

55

130

平成９年度　串木野城跡発掘調査参加者

平成10年度　串木野城跡発掘調査参加者

平成11年度　串木野城跡発掘調査参加者

あ と が き

串木野城跡の発掘調査は、平成９年度から平成11年度の３年の歳月をかけて行われました。

今、ここに報告書を刊行するにあたって、振り返ってみると、多くの方々に支えられた発掘作業及び報告書作成でありました。文化庁記念物課・鹿児島県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化センターの先生方をはじめ諸先生方にも多くのご指導をいただきご支援を賜りました。このことに対しまして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、雪が舞ったり、霜が降りたりと極めて厳しい条件の中、精力的に作業に従事していただいた作業員の方々と遺物等を整理していただいた整理作業員の方々にも御礼申し上げます。

串木野市埋蔵文化財発掘報告書(2)
串木野城跡

発　行　〒896-0026
編　集　鹿児島県串木野市昭和通133-1
串木野市教育委員会
TEL（0996）33-5653

印　刷　〒896-0005
鹿児島県串木野市西塩田町150
協業組合 ユニカラー
TEL（0996）32-2627